瀬峰町文化財調査報告書第20集

下　富　前　遺　跡

―富地区県営担い手育成ほ場整備事業に係る発掘調査報告書Ⅱ―

平成14年３月

宮城県瀬峰町教育委員会

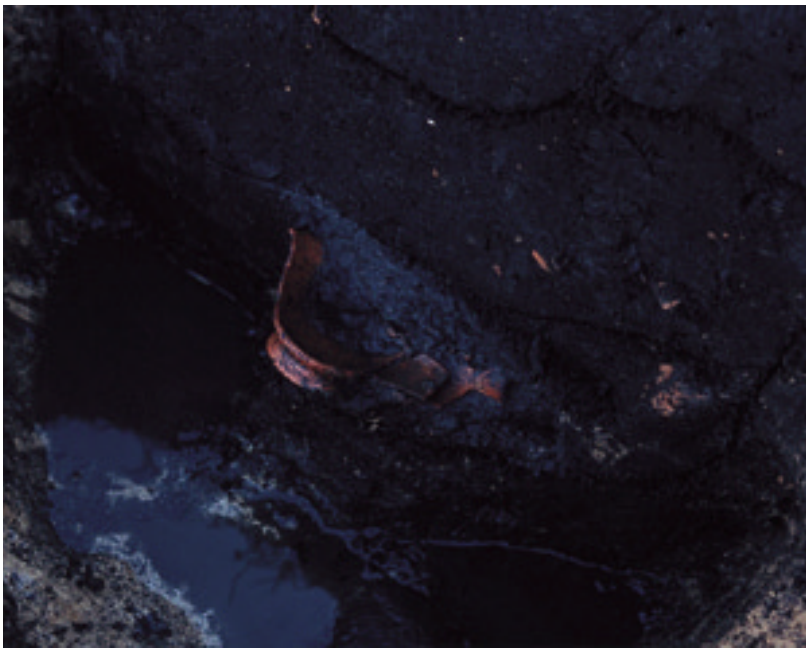
瀬峰町文化財調査報告書第20集

下　富　前　遺　跡

―富地区県営担い手育成ほ場整備事業に係る発掘調査報告書Ⅱ―

平成14年３月

宮城県瀬峰町教育委員会



67号土坑遺物出土状況①
（北より）

67号土坑遺物出土状況②
（北より）

67号土坑出土遺物

緑釉陶器皿（67号土坑出土）

縄文土器深鉢口縁部
動物顔面形突起
（８区下層出土）

中世陶器

1……16区表土
2……23区旧河川
3・4・8…12区表土
5……14区表土
6……８区下層
7……13区表土

カラー図版 2

発　刊　の　辞

このたび、瀬峰町文化財調査報告書第20集「下富前遺跡」を発刊することになりました。

下富前遺跡は過去２回発掘調査が行われ、縄文土器や古代の土器、中世の遺物などが発見されており、長期間にわたり人々が生活を行っていたことがわかっておりました。ただ、今までは部分的な調査であったため、どのような遺跡であったのかが具体的にはわかりませんでした。今回の調査も部分的なものではあったのですが、各時代の様々な生活の痕跡を発見することができました。町内で初めての墨書土器が発見され、その他にも緑釉陶器や動物の顔をした突起がつく縄文土器片など珍しい遺物も発見することが出来ました。しかし、このような珍しい遺物にだけ目をとらわれるのではなく、下富前遺跡とは一体どのような遺跡だったのかということを検討していくことの方が大事なのではないかと考えます。そのような検討をもとに瀬峰町の歴史を明らかにしていくことが必要でしょう。

最後になりましたが、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県築館産業振興事務所等の諸機関や研究者からは調査のご指導をしていただくなど種々ご高配を賜りました。また、雪の降る中現地でご協力をいただきました作業員や整理に当たっていただいた作業員の皆様、快く調査にご協力いただきました下富地区の皆様方に感謝いたします。ここに関係各位に対し謹んで敬意を表するとともに、今後も益々皆様のご指導、ご協力を賜りますことをお願いし、発刊のあいさつといたします。

平成14年３月

瀬峰町教育委員会 教育長　濱　田　利　昭

目　　次

カラー図版
発 刊 の 辞
目　　次
例　　言
Ⅰ．遺跡の位置と地理的・歴史的環境……**1**
１．遺跡の位置と地理的環境……**1**
２．遺跡の歴史的環境……**1**
Ⅱ．調査に至る経緯……**4**
Ⅲ．基本層序……**7**
Ⅳ．検出された遺構と遺物……**9**
１．竪穴住居跡・竪穴遺構と出土遺物……**9**
２．掘立柱建物跡と出土遺物……**22**
３．井戸跡と出土遺物……**24**
４．土坑と出土遺物……**26**
５．溝跡と出土遺物……**37**
６．性格不明遺構……**42**
７．７～９区下層（基本層序Ⅷ層）出土遺物……**42**
８．表土（基本層序Ⅰ～Ⅵ層）出土遺物……**49**
Ⅴ．考　　察……**53**
１．古　　代……**53**
①竪穴住居跡・竪穴遺構について……**53**
②掘立柱建物跡について……**54**
③２号溝跡について……**54**
④井戸跡について……**55**
⑤土坑について……**55**
⑥67号土坑出土遺物について……**56**
⑦東北地方北部系の土師器について……**58**
⑧集落の変遷について……**59**
２．中　　世……**60**
①遺物について……**60**
②遺構について……**60**

Ⅵ. ま と め……61
引用参考文献……62
写 真 図 版

挿 図 目 次

第１図　瀬峰町の位置
第２図　下富前遺跡の位置と周辺の遺跡
第３図　調査区の位置
第４図　トレンチ配置図
第５図　基本層序模式図
第６図　遺構配置図（１）
第７図　遺構配置図（２）
第８図　遺構配置図（３）
第９図　住居跡と出土遺物（１）
第10図　住居跡と出土遺物（２）
第11図　住居跡と出土遺物（３）
第12図　住居跡と出土遺物（４）
第13図　建物跡
第14図　ピット断面図
第15図　井戸跡
第16図　土坑（１）
第17図　土坑（２）
第18図　土坑（３）
第19図　67号土坑出土遺物（１）
第20図　67号土坑出土遺物（２）
第21図　67号土坑出土遺物（３）
第22図　土坑（４）
第23図　60・61・62・80号土坑出土遺物
第24図　溝跡と出土遺物
第25図　７～９区下層（Ⅷ層）出土遺物（１）
第26図　７～９区下層（Ⅷ層）出土遺物（２）
第27図　７～９区下層（Ⅷ層）出土遺物（３）
第28図　７～９区下層（Ⅷ層）出土遺物（４）
第29図　７～９区下層(Ⅷ層)及び廃土出土石製品
第30図　表土（基本層序Ⅰ～Ⅵ層）出土遺物

写真図版目次

図版１　調査前風景（北西より）
７区全景（西より）
８区全景（東より）
図版２　作業風景（8−9区間ベルト付近）
10区全景
23号土坑（北より）
図版３　10区土坑群（東より）
39号井戸跡（北西より）
11区東側全景（西より）
図版４　41号竪穴遺構（北西より）
43号住居跡（北より）
12区全景（東より）
図版５　55号住居跡（北より）
49号井戸跡断面（北より）
作業風景（12区）
図版６　13区全景（西より）
58号住居跡（北より）
14区全景（西より）

図版７　63号住居跡（西より）
　　60号土坑（南より）
　　67号土坑断面（北より）
図版８　67号土坑遺物出土状況①（北より）
　　67号土坑遺物出土状況②（北より）
　　68号建物跡（西より）
図版９　68号建物跡北西隅柱断面（西より）
　　２号溝跡（南西より）
　　２号溝跡確認状況（１次調査、西より）
図版10　２号溝跡断面（西より）
　　73号溝跡・76号溝跡（東より）
　　78号溝跡（西より）
図版11　81号土坑（南より）
　　23区全景（北より）
　　83号住居跡（西より）
図版12　出土遺物（１）
図版13　出土遺物（２）
図版14　出土遺物（３）
図版15　出土遺物（４）

例　　言

１．本書は富地区県営担い手育成ほ場整備事業に伴う事前調査及び確認調査の調査報告書である。なお、平成８年度確認調査を第１次調査、平成11年度事前調査を第２次調査とし、本年度調査を第３次調査とする。

２．調査は以下の要項で実施した。

［調査要項］

［遺　跡　名］下富前遺跡（宮城県遺跡登載番号：46047）

［所　在　地］宮城県栗原郡瀬峰町大里字下富前66、78～90、101、107、111～120、140～150、190～195

［調 査 面 積］約1,350㎡

［調 査 期 間］平成13年11月７日～平成14年１月22日

［調 査 主 体］瀬峰町教育委員会教育長　濱田利昭

［調 査 担 当］瀬峰町教育委員会社会教育課主事　安達訓仁

［調 査 指 導］宮城県教育長文化財保護課

［地権者・耕作者］遠藤喜徳　遠藤隆市　大内一也　大場次郎　大場富榮　日下博　佐々木尚見　白鳥恵志　白鳥徳男　高橋量広　高橋正衛　星文彦　山田主悦　山田文彦　山田まさ子

［調査協力者］宮城県教育長文化財保護課・宮城県築館産業振興事務所・瀬峰町産業課　飯塚義則　大場次郎

［調査参加者］飯塚志求子　飯塚緋佐子　伊東有一　伊東よし子　小野寺敬典　後藤雄一郎　坂本香代子　宍木広美　菅原清志　菅原八重子　鈴木茂　高橋一正　高橋崇行　千葉栄子　三神きみ子　幸田佶生

［整理参加者］星宗久美子　千葉栄子　宍木広美　坂本香代子

［事　務　局］瀬峰町教育委員会社会教育課　課　　長　佐々木徹

同　　上　　課長補佐　菅原正剛

同　　上　　主　　事　安達訓仁

3．土層や土器の色調表現については『新編標準土色帳』四版（小山・竹原1971.1、日本色研事業株式会社）に準拠し、土性区分については国際土壌学会の基準に準拠している。

4．調査における地区割は点（Ｘ＝－150123.537、Ｙ＝20424.537）を原点とし、３ｍグリットの局地座標を設定した（２次調査とは原点が異なる）。なお、この座標は真北に対しＮ－19°45′－Ｅの傾きをもっている。

5．図中にある方位は、真北を表している。

6．遺構番号は第２次調査からの通し番号を各遺構に付した。

7．遺構全体図の縮尺は1/100を基本とし、遺構平面・断面図は1/60に統一しスケールを添えた。また、遺物の縮尺は1/3を基本としスケールを添えた。なお、断面黒塗りは須恵器を示す。また、鉄製品は一部錆取りを実施した段階で図化を行ったものであり、今後更に錆取りを行い新たな事実が判明した場合は再度報告したい。

8．遺物写真の縮尺は任意である。

9．発掘調査及び報告書作成に際し、次の方々よりご指導、ご助言をいただきました。

阿部博志、高橋栄一、天野順陽、村田晃一、相原淳一、柳沢和明、須田良平（宮城県教育委員会文化財保護課）、白鳥良一・阿部恵・後藤秀一・吾妻俊典（宮城県多賀城跡調査研究所）、及川規（東北歴史博物館）、佐藤敏幸（矢本町教育委員会）、佐藤信行（日本考古学協会員）、千葉孝弥・鈴木孝行（多賀城市埋蔵文化財センター）、平川南（国立歴史民俗博物館）、三上喜孝（米沢女子短期大学）、佐々木志伸（東北芸術工科大学）、山中雄治（福島県喜多方市教育委員会）、高橋誠明（古川市教育委員会）、塩谷慎輔（福島県西郷村教育委員会）、小川長導（名取市教育委員会）、城ヶ谷和弘（愛知県立豊田高等学校）、安達正陽（宮城県白石市立福岡東中学校）

東北歴史博物館、宮城県多賀城跡調査研究所、㈱佐々貞土建、㈱セミネ測量

10．調査によって得られた資料は、全て瀬峰町教育委員会で保管している。

11．本書の執筆、編集は、瀬峰町教育委員会社会教育課　主事　安達訓仁が行った。

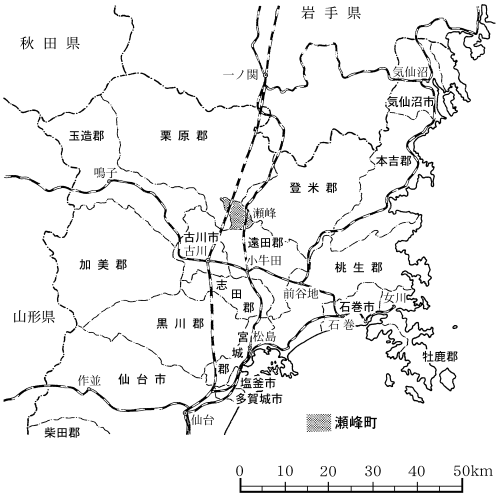
Ⅰ．遺跡の位置と地理的・歴史的環境

１．遺跡の位置と地理的環境

宮城県の北西部に位置する栗原郡は岩手、秋田両県と境を接している。瀬峰町はその栗原郡の中でも南東端に所在し、宮城県西部を南北に貫く奥羽山脈と、岩手県から宮城県北東部にかけてのびる北上高地に挟まれた仙北平野低地帯のうち、北上川流域右岸の一角に位置している。

ここは奥羽山脈からしだいに標高を減じながら南東方向に連なる派生低丘陵のほぼ末端部分にあたり、周辺には県北湖沼地帯として知られる伊豆沼、内沼、長沼、蕪栗沼が群在する。中でも、蕪栗沼はかって当湖沼地帯最大の水域を有していたが、江戸時代の新田開発、さらには近年の排水･開田事業によって、現在ではその旧状をほとんど止めていないものの、瀬峰町を貫流する瀬峰川、小山田川、萱刈川の遊水池として、当町の東南部に隣接している。

下富前遺跡は瀬峰町を東西に横切る穏やかで、低平な４つの丘陵中、中央部の標高約30m前後の寺沢丘陵の南面、小山田川左岸の微高地に立地する。標高は６～７ｍと低く、現在、田地、畑地として利用されている。昭和22年のアイオン台風による復旧工事に伴う土取りや昭和30年代の開田工事により削平を受け旧地形は不明であるが、遺跡中央付近がやや高く、周囲に向かいゆるやかに低くなる。この微高地は水田耕作土下部直下からローム層が確認されるため、埋没丘陵の頂部が島状に残存したものと考えられる。また、遺跡縁辺の南側の低地部は小山田川の旧河川と考えられる。



第１図 瀬峰町の位置

本遺跡の基盤は礫層、砂岩、泥岩、凝灰岩からなる鮮新世：瀬峰層で、その上に礫層と凝灰岩から構成される更新世：高清水層、さらに最上部には第四系のローム層が堆積しており、丘陵上に所在する町内の諸遺跡とほぼ同じ様相を呈している。

２．遺跡の歴史的環境

瀬峰町には丘陵上に多くの遺跡が所在している。ここでは、これまでの調査、研究を踏まえ遺跡周辺の縄文時代から近世にかけての歴史的環境を記述する。

瀬峰町内において、縄文時代の遺物が出土する遺跡は19ヶ所を数える。年代の特定できるものとして大境山遺跡で早期後葉から前期前葉の繊維土器、前期の大木６式、中期の大木８ｂ式、岩石Ⅰ遺跡で前期大木６式、中期大木８ａ式が出土している。これらはいずれも丘陵上に位置している。また、低地部を望む微高地に立地する筒ヶ崎遺跡で前期の大木４式、下富前遺跡では前期大木５式と土偶が出土している。これらは土器の出土がきわめて散発的で、しかも、細破片が少量しか発見されないというのが現状である。今後、調査が進むと遺跡の数は増加すると考えられるが、現時点では当町域における縄

文時代のあり方は貧弱であると指摘せざるを得ない。なお、その理由について現段階では、「縄文時代においては当町域は概ね、蕪栗沼沿岸諸遺跡の後背地としてその生活領域に包含され、生活の拠点となる集落の形成はなされず、むしろ、これらと諸遺跡の生活活動を補完する狩猟、採集の場として機能していた」（阿部・赤澤：1985）と考えられている。

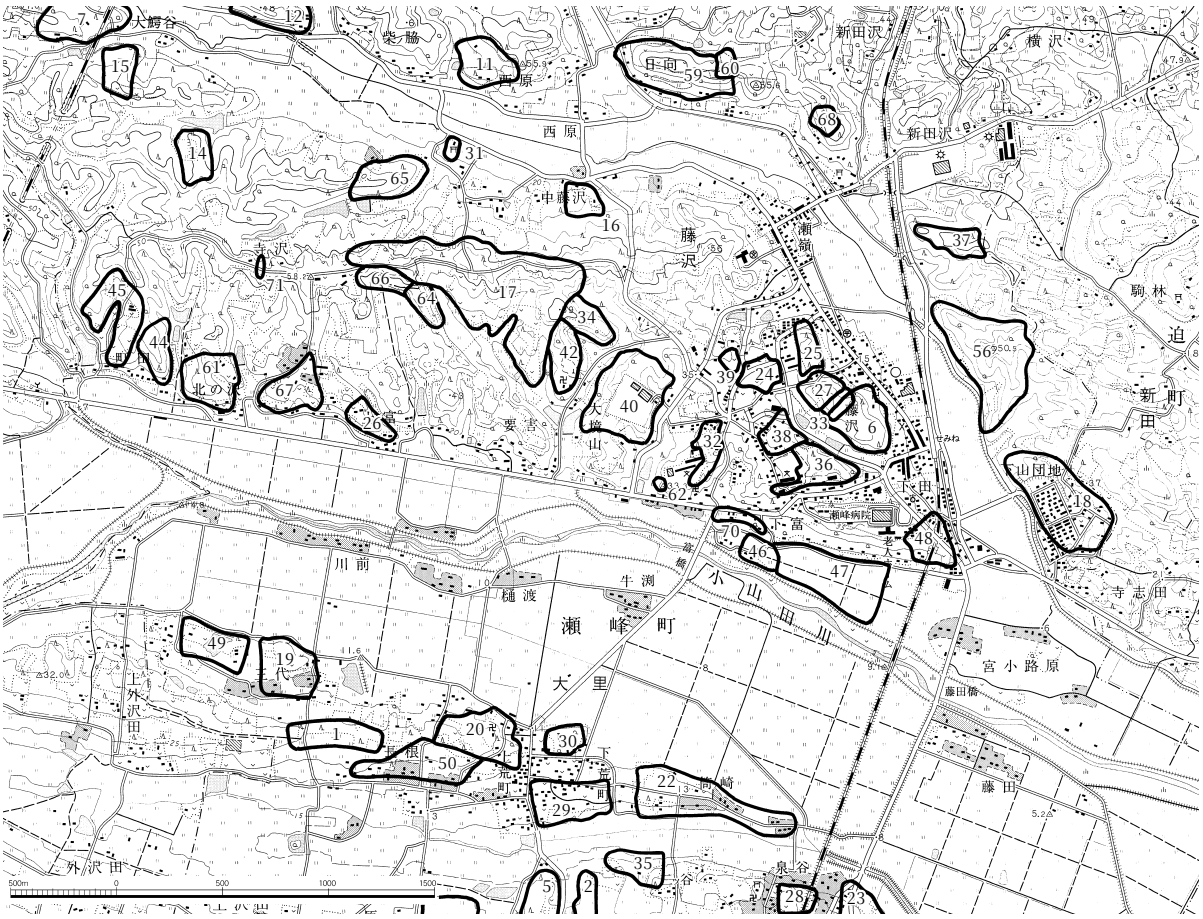
弥生時代の遺跡は大境山遺跡、岩石Ⅰ遺跡、寺山遺跡の３ヶ所確認されているに過ぎず、いずれも瀬峰川と小山田川に挟まれた寺沢丘陵に立地しており、他の丘陵では確認されていない。

古墳時代前期の遺跡としては大境山遺跡などが、中期の遺跡としては荒町遺跡、泉谷遺跡などが知られている。後期の遺跡としては泉谷館跡、民生病院裏遺跡、三代遺跡、大境山遺跡が知られており、いずれも標高20～30m前後の丘陵上に位置するものである。泉谷館跡（阿部・赤沢・佐藤：1987）では11棟の住居跡が検出され、栗囲式期の土器とそれにほぼ並行すると考えられる関東地方鬼高式期の土器が出土している。なお、仙台市郡山遺跡（木村・長島：1983ほか）、志波姫町御駒堂遺跡（小井川・小川：1982）などでは、７世紀後半から８世紀前半にかけての関東系の土器が相次いで出土しているが、泉谷館跡出土の関東系土器の年代は、概ね７世紀前半と考えられ、それらに先行する段階のものとして注目を集めている。同様の関東系土器は、出土状況は明確ではないものの、民生病院裏遺跡（阿部・佐藤：1989）、大境山遺跡からも出土している。三代遺跡（阿部正光：1982）からは、栗囲式期の中でも新しい段階に属する資料が得られている。以上、古墳時代の遺跡の概要を述べたが、いずれも蕪栗沼、もしくは、それに流入する小山田川を間近に望める丘陵上に位置している。よって、当時、既に小山田川の土砂運搬作業によって徐々に沖積化しつつあった旧蕪栗沼縁辺部において、遺跡ごとに農業経営が展開されていたと推定されるが、今後は、各遺跡の編年とその関係を、より詳細に究明することも必要と思われる。なお、関東系土器に象徴される関東地方との交流経路については、当町が海岸部から離れた内陸部に位置するものの、舟を用いて北上川、迫川を溯れば容易に宮城県北部湖沼地帯の一つ、旧蕪栗沼に到達しうるという地理的条件を備えているところから、陸路のほかに海路の存在も考えてゆく必要があろう。

瀬峰町で遺跡の数が最も多いのは奈良・平安時代で、49遺跡を数えることができる。桃生田前遺跡、下富前遺跡などは沖積地を望む微高地に立地している。現在までに寺沢丘陵に位置する岩石Ⅰ遺跡、大境山遺跡、寺沢丘陵東端に位置する長者原Ⅱ遺跡、民生病院裏遺跡、下藤沢Ⅰ遺跡、下藤沢Ⅱ遺跡、下藤沢Ⅲ遺跡、清水山Ⅰ遺跡、下富前遺跡、桃生田前遺跡について発掘調査が実施されている。一連の調査によって、多数の住居跡と豊富な遺物が発見されており、宮城県北部における当時の集落構成を考えるうえで良好な資料を提供している。即ち、35,000㎡を調査し、23棟の住居跡が検出された大境山遺跡（阿部・赤澤：1983）では、各住居跡が適度に散在する現象が顕著に認められているが、こうした傾向は前述の遺跡においても認めることができる。宮城県北部における集落の一タイプとして抽出されるものであろう。一方、集落以外の遺跡はほとんど確認されておらず、蔵骨器が出土した蒲盛遺跡（阿部・赤澤：1984）が墓制に関する遺跡として知られるのみである。

中世の城館は藤沢館跡などがあげられる。瀬峰川沿いの丘陵上に構築された単郭式の小規模のものである。下富前遺跡では14世紀初め頃の龍泉窯系青磁皿の破片が採集されており（佐々木・阿部：

1982)、発掘調査により小規模な建物跡、井戸跡や中世陶器が確認され、概ね13世紀から14世紀頃の屋敷跡と考えられる（安達訓仁：2000、本書所収)。また、荒町遺跡や泉谷遺跡などで中世陶器が採集されている。現在までのところ、中世の所産と考えられる塚には泉谷館跡（阿部・赤澤・佐藤：1987）から検出された方形の溝がある。堆積土の状況からマウンドをもつと推定され、出土遺物から鎌倉時代中期から後期にかけての宗教的な壇であると考えられる。その他に経塚と考えられる経壇遺跡、鎌倉時代の和鏡が出土した寺沢遺跡が知られている。なお、板碑については、大正年間20数基あることが知



№	遺跡名	種別	時代	№	遺跡名	種別	時代	№	遺跡名	種別	時代
1	王壇遺跡	塚、包含地	奈良・平安、中世（?）	26	杉ノ壇遺跡	塚	中世・近世	46	桃生田前遺跡	集落跡	奈良･平安､中世･近世
2	四ッ壇遺跡	塚、包含地	奈良・平安、中世（?）	27	下藤沢Ⅲ遺跡	集落跡､塚	奈良･平安､中世･近世	47	下富前遺跡	包含地	奈良・平安、中世
5	伊勢堂館跡	包含地､塚､城館	縄文、奈良・平安、中世	28	泉谷館跡	集落跡､塚､城館	古墳、中世・近世	48	伯耆ヶ崎遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
6	藤沢館跡	城館	中世	29	除館跡	城館	近世	49	中三代遺跡	集落跡	奈良・平安
7	殿上館跡	城館	縄文、中世	30	旗塚遺跡	包含地､塚	奈良･平安､中世･近世	50	長根遺跡	包含地	奈良・平安
11	的場山遺跡	包含地	縄文、奈良・平安	31	古塚遺跡	塚	中世・近世	56	五輪堂山遺跡	集落跡	奈良・平安
12	古館館跡	城館	中世	32	清水山Ⅰ遺跡	集落跡	奈良・平安	59	横森遺跡	包含地	奈良・平安
14	空堤遺跡	包含地	縄文（前）	33	下藤沢Ⅰ遺跡	集落跡	奈良・平安	60	ホイト遺跡	塚	中世・近世
15	寺山遺跡	包含地､寺院跡(?)	弥生、平安（?）	34	坂ノ下浦Ⅰ遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	61	北ノ沢遺跡	包含地	奈良・平安
16	砂田遺跡	包含地	奈良・平安	35	二ッ谷遺跡	集落跡	奈良・平安	62	清水山Ⅱ遺跡	塚	中世・近世
17	岩石Ⅰ遺跡	集落跡、塚	縄文(前･中)､弥生､古墳､奈良･平安､中世･近世	36	民生病院裏遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安	64	岩石Ⅱ遺跡	包含地	縄文（中）
18	下山遺跡	包含地	奈良・平安	37	八幡前遺跡	塚	中世・近世	65	寺沢遺跡	集落跡、塚	奈良･平安､中世･近世
19	三代遺跡	包含地	古墳、奈良・平安	38	長者原Ⅱ遺跡	集落跡	奈良・平安	66	蒲盛遺跡	火葬墓	奈良・平安
20	荒町遺跡	包含地	縄文､古墳､奈良･平安､中世	39	一本松遺跡	包含地	奈良・平安	67	寺浦遺跡	包含地	縄文
22	筒ヶ崎遺跡	包含地	縄文（前）、奈良・平安	40	大境山遺跡	集落跡	縄文､弥生､古墳､奈良･平安	68	清林壇遺跡	塚	近世・近代
23	泉谷遺跡	包含地	縄文、古墳、奈良・平安	42	坂ノ下浦Ⅱ遺跡	包含地	奈良・平安	70	桃生田遺跡	包含地	奈良・平安
24	長者原Ⅰ遺跡	包含地	奈良・平安	44	町田遺跡	包含地	奈良・平安	71	瀬峰一里塚	塚	近世
25	下藤沢Ⅱ遺跡	集落跡、塚	奈良・平安、近世	45	薬沢東遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安				

第２図 桃生田前遺跡・下富前遺跡の位置と周辺の遺跡

られていた（鈴木玄雄：1922）が、近年、破損したり所在不明となっているものがあり、現在では17基確認されているに過ぎない。

現在の瀬峰町は、近世においては奥州仙台領栗原郡の藤沢村、富村、中村に分かれていた。藤沢村には、栗原郡と登米郡を結ぶ佐沼街道（高清水宿～佐沼宿～登米宿）の宿駅、瀬嶺宿が設置された。この瀬嶺宿の西方2.5㎞、藤沢村の寺沢地内と富村の北ノ沢地内を横切る佐沼街道には、一里塚が保存されており、交通史上貴重な遺構である。泉谷館跡は、仙台藩士橋本氏（知行高80貫380文）の在郷屋敷である。昭和61・62年度にかけて発掘調査が実施され、６棟の掘立柱建物跡や西門跡、塀跡などが検出された（阿部・赤澤・佐藤：1987）。中村の荒町地区には、除と呼ばれる所がある。仙台藩士蟻坂氏の在郷屋敷で、寛永21（1644）年、所替となるまで居住したと伝えられる。町内には多数の塚が知られているが、確実に江戸時代とわかるものとしては、佐沼街道の一里塚、諏訪原経塚、清林壇、それに発掘調査によって盛土を伴う墓であることが判明した下藤沢Ⅱ遺跡（阿部・赤澤・佐藤：1988）及び下藤沢Ⅲ遺跡の塚群をあげることができるだけで、その大部分は所属年代が未だ明らかにされていない。

Ⅱ．調査に至る経緯

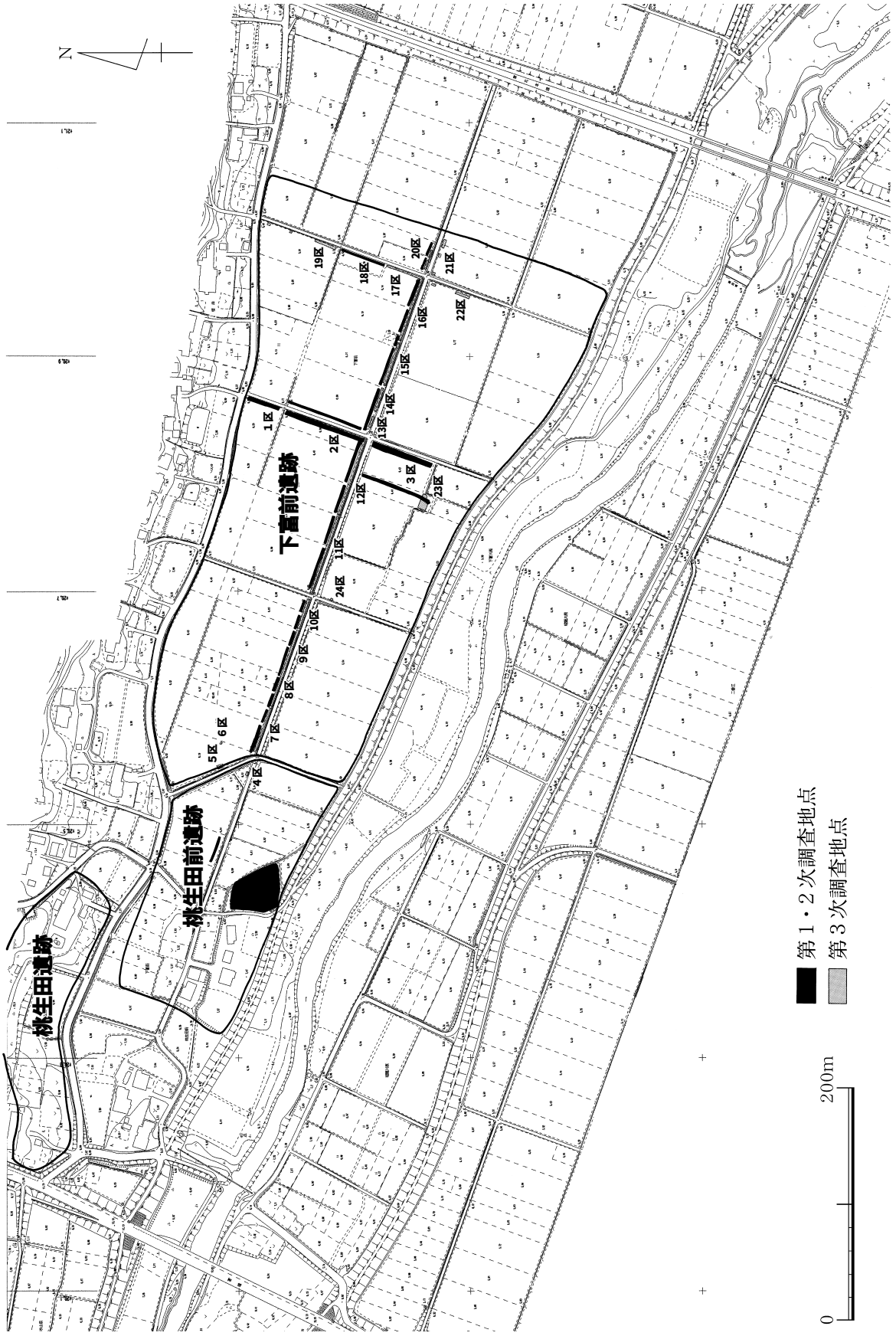
平成６年、宮城県農政部農地計画課より瀬峰町富地区県営ほ場整備事業の計画が持ち上がり、周知の遺跡である桃生田前遺跡、下富前遺跡が関わりを持つことが判明した。

そのため、平成８年４月に確認調査（第１次調査）を実施し、下富前遺跡では低地部からの遺構の検出はなかったが、微高地部の各トレンチから表土下約20～30㎝ のところで遺構面及び遺物包含層が確認され、土坑、溝跡、ピットなどが検出された。出土遺物には縄文土器、土偶、石器、土師器、須恵器、ふいごの羽口、鉄滓がある。この結果、下富前遺跡の範囲は微高地部分に広がることが想定され、以前青磁が採集されている（佐々木・阿部：1983）ことから、縄文時代・古代・中世の複合遺跡であることが確認できた。

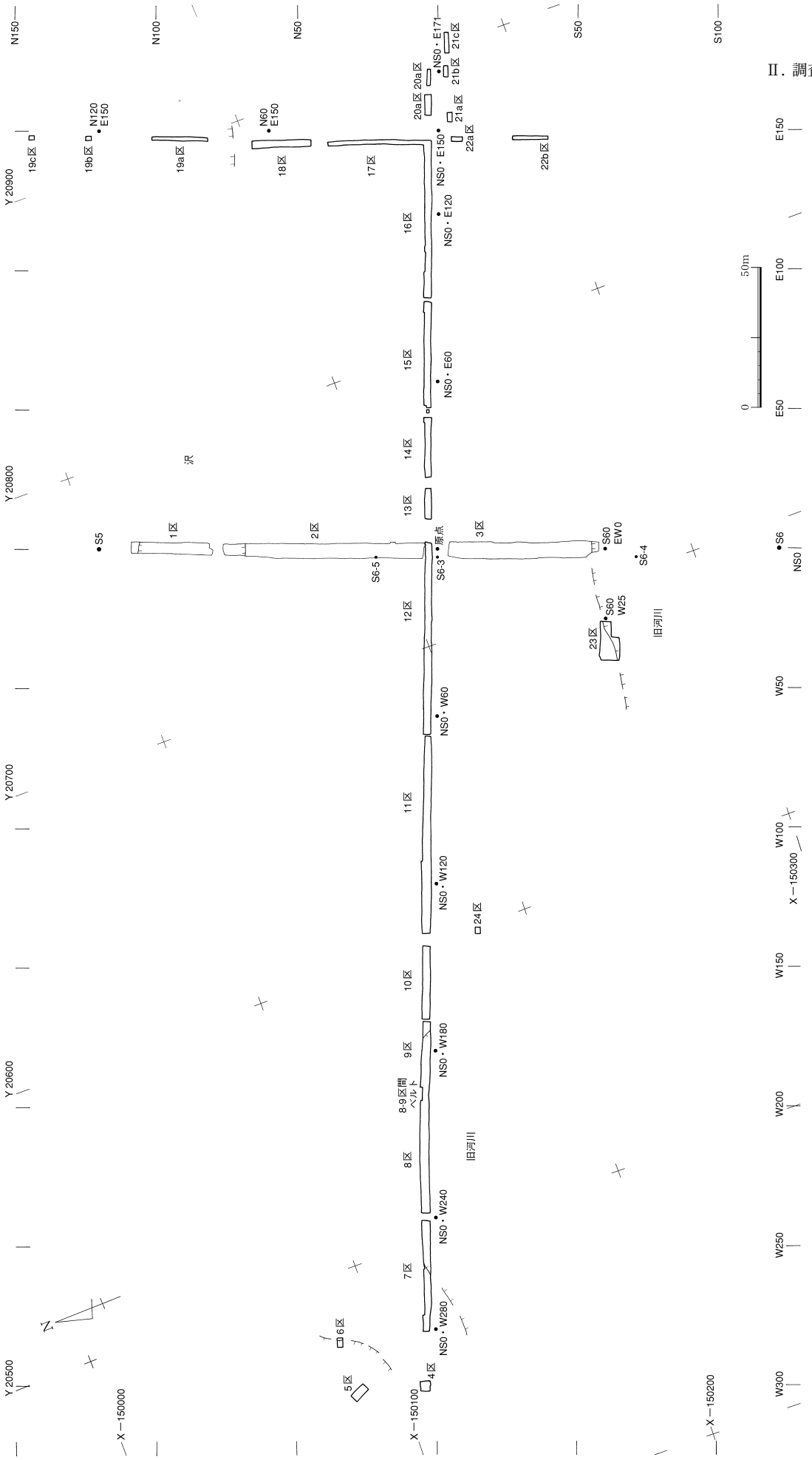
この成果を受け、宮城県教育委員会、宮城県築館農林振興事務所、瀬峰町産業課、瀬峰町教育委員会で遺跡の取り扱いについて協議が行われ、水路及び切土工が行われる部分は事前調査、パイプライン敷設（当初設計幅1.3m）は工事立合を実施し、田面部分は盛土工での対応となった。

水路部分の事前調査（第２次調査）は平成11年度に実施された。遺構は調査区中央付近から南側（２区南側から３区）の標高の高い部分に集中し、北側では希薄であった。竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土坑が検出され、出土遺物には土師器・須恵器・中世陶器・金属製品・木製品・石製品がある。古代の遺構は８～９世紀代の集落跡、中世の遺構は13～14世紀の屋敷跡と考えられた（安達訓仁：2000）。

その後、計画の概要が固まり、検討を行ったところ、パイプライン幅が当初の1.3mから2.2mに変更となったため、事前調査を実施することとした。また、遺構保護のための厚さを約30㎝ とし、田面の計画高と現田面および遺構面の標高について検討を行ったところ、ほとんどで十分な保護層がとれることを確認したが、一部十分な保護層がとれない地点や平成８年度の確認調査箇所が不足している地点


N
下高前遺跡
桃生田前遺跡
桃生田遺跡
1区
2区
3区
4区
5区
6区
7区
8区
9区
10区
11区
12区
13区
14区
15区
16区
17区
18区
19区
20区
21区
22区
23区
24区
第１・２次調査地点
第３次調査地点
0
200m

第３図 調査区位置図


N150
N100
N50
S50
S100
Y 20900
Y 20800
Y 20700
Y 20600
Y 20500
X－150000
X－150100
X－150200
X－150300
E150
E100
E50
W50
W100
W150
W200
W250
W300
NS0・E171
21c区
21b区
20a区
20a区
21a区
22a区
22b区
NS0・E150
NS0・E120
NS0・E60
NS0・W60
NS0・W120
NS0・W180
NS0・W240
NS0・W280
N120
E150
N60
E150
19c区
19b区
19a区
18区
17区
16区
15区
14区
13区
12区
11区
10区
9区
8区
7区
6区
5区
4区
1区
2区
3区
S5
S6-5
S6-3
原点
S60
EW0
S6-4
S6
NS0
S60
W25
23区
24区
8-9区間
ベルト
旧河川
旧河川
沢
N
0
50m

第４図 トレンチ配置図

があるとの認識に至った。これらをもとに宮城県教育庁文化財保護課、築館産業振興事務所、瀬峰町教育委員会、瀬峰町ほ場整備推進対策室で協議を行い、一部畦畔の位置を変更するなど計画変更に応じていただいた。そのため、平成13年度中にパイプライン敷設部分、切土工部分の事前調査及び確認調査を実施することとし、平成13年10月26日付けで築館産業振興事務所と委託契約を結んだ。

発掘調査は平成13年11月７日から実施された。11月13日までに表土除去が終了し、９日から遺構確認作業を行い、竪穴住居跡・竪穴遺構６棟、掘立柱建物跡４棟、井戸跡７基、土坑30基、溝跡25条、性格不明遺構１基、ピット261基を検出することができた。平面図作成、遺構の掘り下げを行い、雪や霜の被害にあいながら１月22日までに遺構の各種実測図、写真撮影（35㎜ カメラを用い、モノクロ、リバーサルフィルムを使用）等の記録化を終了し、器材の搬出を１月22日に行い調査を一切を終了することが出来た。その途中、一部道路際の壁が崩落する危険があるため11月27～29日まで４～９区などを埋め戻し、全ての調査区の埋め戻しは３月７日に終了することが出来た。

なお、事前調査ではあるが、調査にあたっては過去２回の成果から以下の点の解明を目指した。

①旧地形及び遺構の広がりの確認

②古代及び中世の集落構造の解明

③第１次調査で縄文時代の遺物が出土した地点の様相の確認

Ⅲ. 基本層序

基本層序は調査区が東西約500m、南北約230mと長いが、各調査区での状況はほぼ同様である。ここでは初めに東西方向の調査区（４、７～16、20～21区）の基本層序を説明し、南北方向の調査区については主な調査区（18区）についてのみ説明する。

東西方向（４、７～16、20～21区）の調査区の基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層　オリーブ黒色（5Y3/2）粘土で、しまり、粘性ともに普通である。下部に酸化鉄の集積が見られる。水田耕作土である。調査区全域、水路の北側に分布する。11区から東側の調査区においては調査区北側ではⅠ層直下が遺構検出面となる。

Ⅱ層　黒褐色（2.5Y3/2～7.5Y3/1）シルトで、しまり、粘性ともに普通である。地山粒を若干含む。水田下部に見られる水田造成時の整地層と考えられる。８～10区にのみ見られる。

Ⅲ層　黒褐色（10YR2/2）シルト～粘土質シルトである。上部に多数の木の根、下部に地山ロームブロックを多数含むものである。しまりがなく、ぱさぱさする。道路造成時の盛土である。

Ⅳ層　黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトである。しまり、粘性ともに普通である。地山土や炭化物を若干含むものである。14区では焼土、灰白色火山灰粒をまばらに含むものである。道路造成時の盛土である。

Ⅴ層　褐灰色（10YR4/1）粘土質シルト～黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトである。しまり、粘性ともにややある。７～９区付近では均一な層であり、下層のⅧ層を覆う。近世の遺物が出土する。

Ⅵ層　黒褐色（2.5Y3/1）粘土質シルト～黒褐色（10YR2/2）シルトである。しまり、粘性ともに普

通である。16区東側から20、21区に見られる。

Ⅶ層　黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトである。しまり、粘性ともにややある。９区東側から10区にかけて分布する。

Ⅷ層　３層（ａ～ｃ層）に分層された。ａ層は黒色（10YR1.7/1）シルト～黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト、ｂ層は黒褐色（10YR2/2）シルト、ｃ層は黒色（10YR2/1）細砂である。ｃ層は部分的に存在する。７区から10区付近に見られるもので、河川あるいは湿地の堆積層と考えられる。８区中央から９区付近にかけて多数の遺物が出土した。出土遺物には縄文土器、須恵器、土師器、中世陶器、近世陶磁器がある。なお、３層に分層を行っているが、ａ層とｂ層の相違は漸移的であるので本来同一の層である可能性もある。

Ⅸ層　黒色（10YR2/1）粘土質シルトである。しまりは普通で、粘性はややある。地山粒を若干含む地点もある。10区、15区、16区の一部に見られる。漸移層の可能性が考えられる。

Ｘ層　明黄褐色（10YR7/6）～にぶい黄褐色（10YR6/4）粘土でかたくしまる。下部には部分的に白色粘土層やグライ化した青白色粘土層が見られる。本遺跡での地山で、遺構は全てこの面で確認している。特に16区中央から東側では遺構検出面が白色粘土層であるため、大きく削平されていると考えられる。

南北方向の調査区では基本的にⅠ層直下で地山が確認されており、22区や24区では大きく削平されていると考えられる。18区では下部に基本層が残存する。

18区の基本層序は以下の通りである。

１層　オリーブ黒色（7.5Y3/3）シルト。しまり、粘性がなく、径５㎜大の地山粒をまばらに含む。耕作土である。

２層　黒褐色（2.5Y3/2）粘土質シルト。しまり、粘性ともにあまりない。地山ブロックを含むもので、特に東側壁面（農道側）に厚く見られる。道路造成時の整地層である。上記Ⅲ層に対応する。

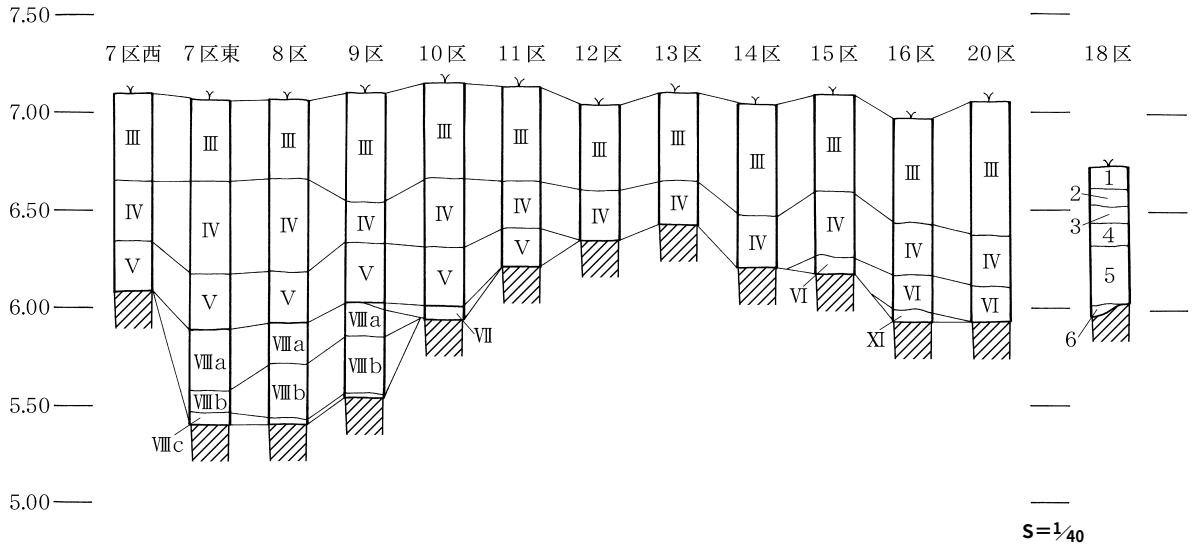
３層　黒褐色（2.5Y3/1）粘土質シルト。しまり、粘性ともにあまりなく、ぼそぼそする。近世～近代瓦出土。上記Ⅳ層に対応する可能性が考えられる。

４層　黒色（5Y2/1）粘土質シルト。しまりは普通で、粘性はある。下部に炭化物が見られる。

５層　黒色（10YR1.7/1）粘土質シルト。しまりはあまりなく、粘性はある。地山粒をまばらに含むものである。調査区北側では南側に比べ薄くなる。旧表土と考えられる。

６層　黒褐色（10YR3/1）シルト質粘土。しまりはあまりなく、粘性はややある。部分的に見られるもので、漸移層の可能性が考えられる。上記Ⅸ層に対応する。

７層　黄褐色（10YR5/6）シルト。堅くしまり、粘性は普通である。地山と考えられる。上記Ｘ層に対応する。



第５図 基本層序模式図

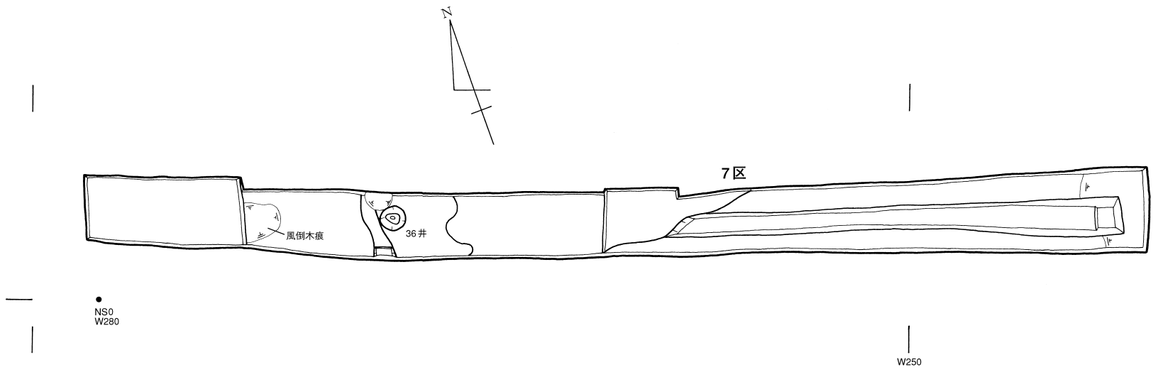
Ⅳ．検出された遺構と遺物

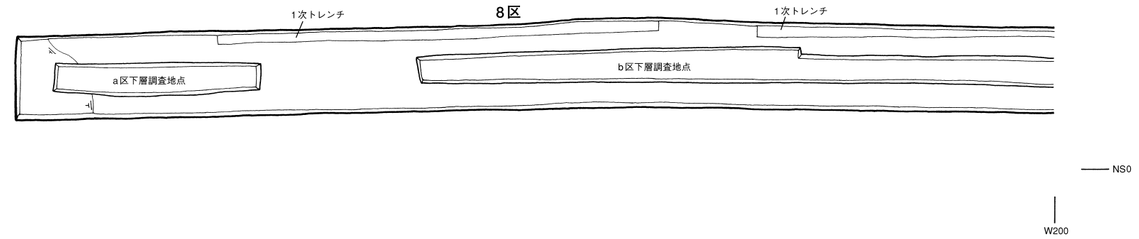
検出された遺構は、竪穴住居跡６棟、掘立柱建物跡４棟、井戸跡７基、土坑30基、溝跡25条、性格不明遺構１基、ピット261基（組み合うピットを含む）である。これらのほとんどは標高の高い９区東側から15区で確認されているが、第１次調査の際、９区中央付近で土坑２基が検出されている。今回の調査でも検出に努めたが、崩落防止のため調査区を縮小したために遺構を検出することは出来なかった。以下、主要な遺構について説明し、その他は表を用いて説明する。

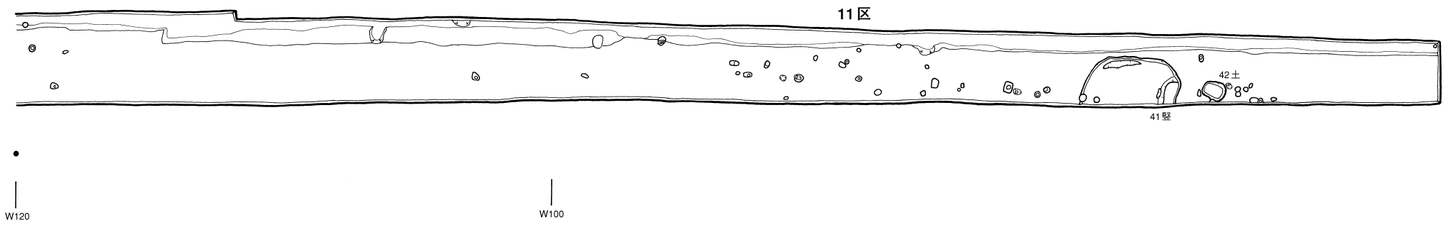
１．竪穴住居跡・竪穴遺構と出土遺物

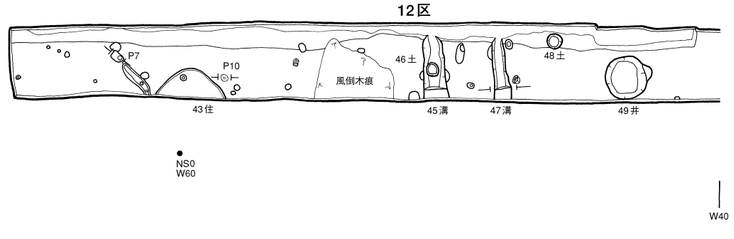
41号竪穴遺構

11区東側、W75～80・Ｎ２～3.5付近の基本層序Ｘ層で検出された。調査区壁際で検出されたため、平面形は判然としないが隅丸方形を呈すると考えられる。南北1.7m以上、東西3.5mである。西辺で方向を計るとＮ－47°－Ｅである。壁は最も保存状況の良い北辺で計ると0.20mである。床面からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は大別１層（層№１～２）確認された。黒色シルト質粘土～粘土質シルトであり、地山粒や炭化物を若干含むもので自然堆積と考えられる。床は掘方埋土からなる。床面レベルはほぼ平坦であるが、西側では高く盛り上がる。掘方底面は若干の凹凸が見られる。埋土は２層認められ、地山ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルト～黄灰色シルトである。周溝は北辺の一部及び東側の盛り上がりの下部の一部で検出された。北辺では長さ1.4m、最大幅0.3m、深さ0.04mである。堆積土は２層確認された。上層は黒色粘土質シルトで、自然堆積と考えられる。下層は黒褐色シルトで機能時のものであり、自然堆積である。その他の施設として東側に盛り上がりが見られる。一部掘りすぎではあるが、長軸0.86m以上、短軸0.42m、床面からの高さ0.22mをはかる。掘方埋土上層（層№６）で構築されており、上面はやや堅く締まる。



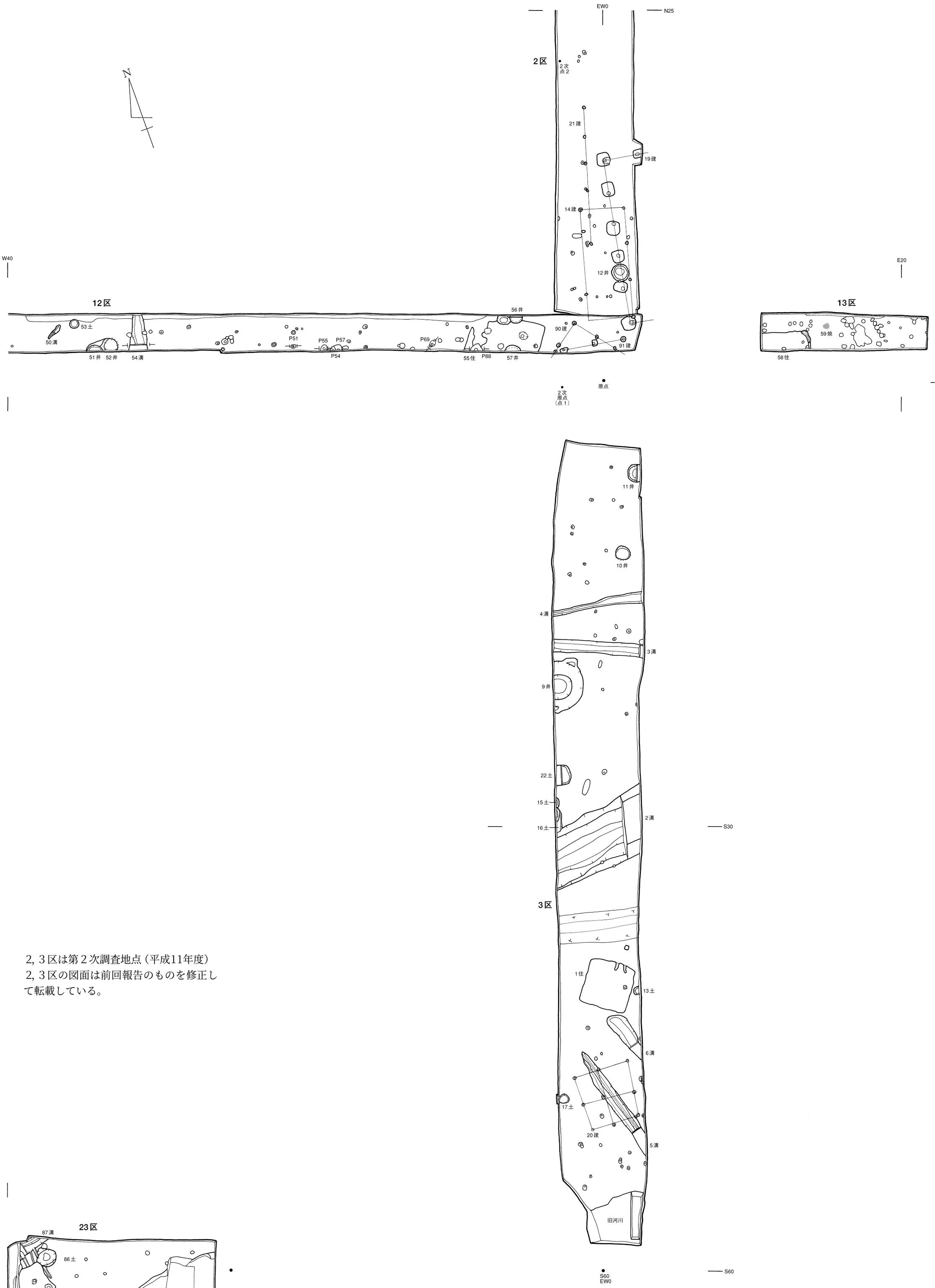






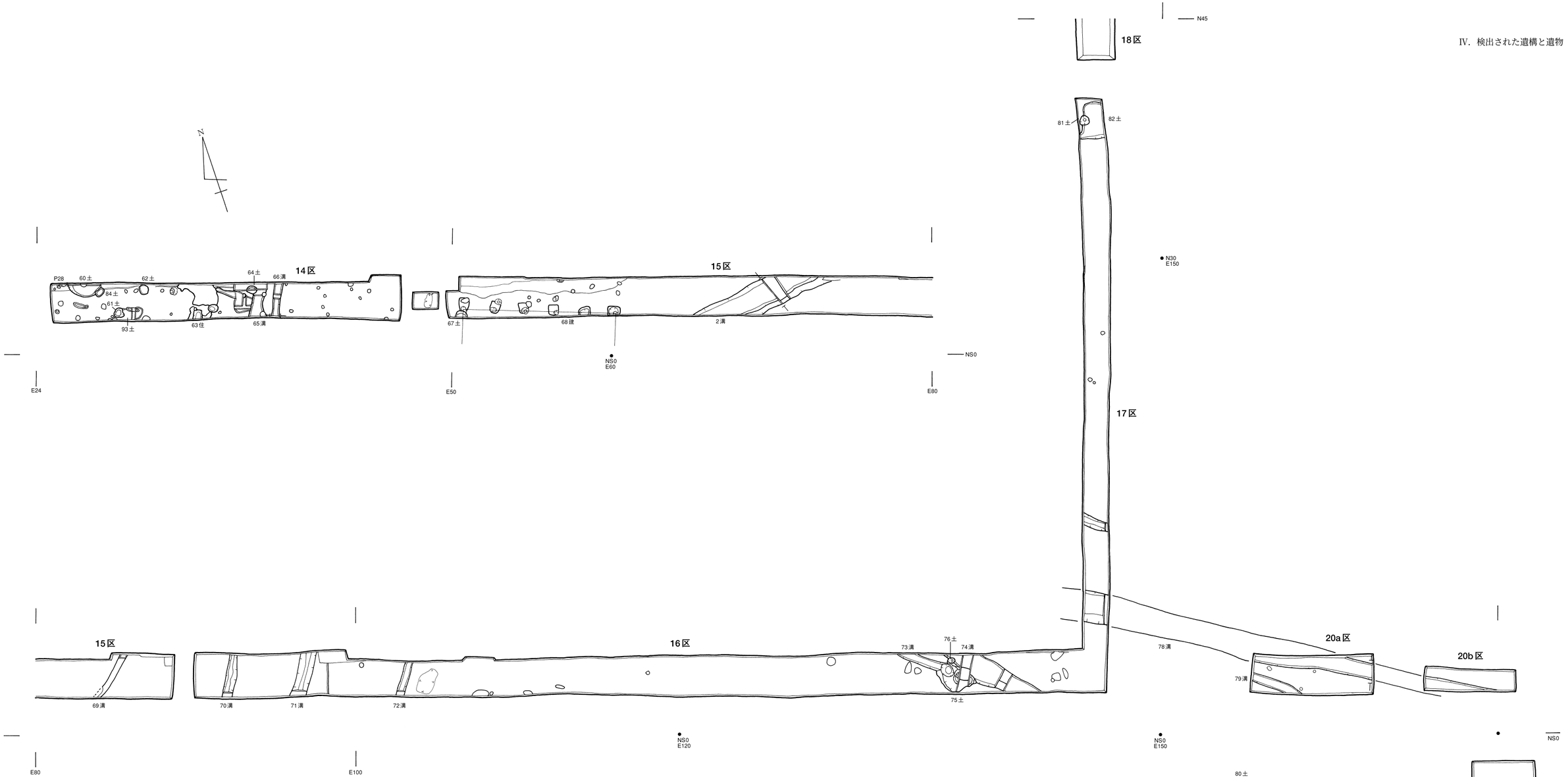
0 10m

第６図 遺構配置図（1）



2, 3区は第2次調査地点（平成11年度）
2, 3区の図面は前回報告のものを修正して転載している。

第7図 遺構配置図（2）


N45
18区
81土
82土
N
14区
P28
60土
62土
64土
66溝
84土
61土
93土
63住
65溝
15区
67土
68建
2溝
N30
E150
NS0
E60
NS0
E24
E50
E80
17区
15区
69溝
16区
70溝
71溝
72溝
73溝
76土
74溝
75土
78溝
20a区
79溝
20b区
NS0
E120
NS0
E150
NS0
80土
21b区
21a区
E80
E100
E150
E171
0
10m

第８図 遺構配置図（3）

遺物は堆積層からロクロ土師器坏・甕、非ロクロ土師器甕、須恵器坏が出土している。掘方埋土からロクロ土師器、非ロクロ土師器甕が出土している。いずれも細片である。第９図１はロクロ土師器坏底部片であり、底部にはヘラ記号「□」が見られる。

43号住居跡

12区西側、W58～61・Ｎ２～3.2の基本層序Ｘ層で検出された。平面形は、調査区南壁際で検出されたため詳細は不明であるが、隅丸方形であると推定される。東辺で1.50m分、北辺で1.74m分を検出した。東辺で方向を計るとＮ－27°－Wである。堆積土は１層確認され、黒色粘土質シルト～シルト質粘土である。自然堆積と考えられる。壁は残存状況が悪く、最も残りの良い北東隅で0.07mを計る。床面からほぼ垂直に立ち上がるものである。床は掘方埋土からなり、ほぼ平坦である。埋土は３層に地山ブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。掘方底面は凹凸が見られる。床面からは主柱穴や周溝は検出されていない。柱穴は１ヶ所確認された。北東隅付近に位置する。柱穴は円形で規模0.25m、深さ0.15mである。埋土は黒色～褐灰色シルト質粘土である。柱痕跡は径0.16～0.11m程で、堆積土は黒色粘土質シルトである。柱痕跡はやや北側に傾斜する。また、床面西側で灰黄褐色シルト層が検出された。炭化物、白色粘土を含むもので焼けて堅く締まる。径0.75～0.35mの不整形であり、厚さ0.08mである。

遺物は出土していない。

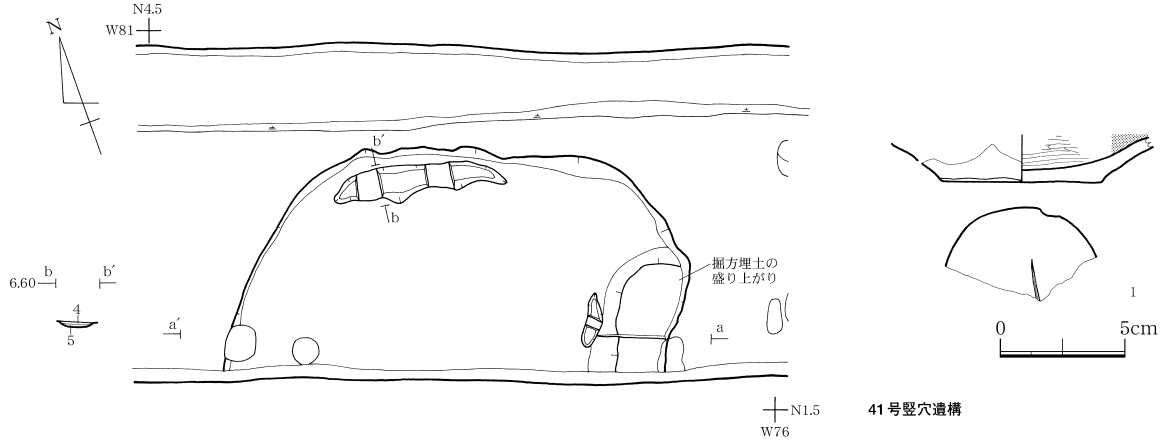
55号住居跡

12区東側、N1.5～4.5・W4～9.5の基本層序Ｘ層で検出された。56号井戸跡、57号井戸跡、ピットと重複し、これらより古い。調査区外に伸びるものであり、正確な平面形は不明であるが、正方形を呈すると考えられる。南北2.1m以上、東西4.92mである。東辺で方向を計るとＮ－34°－Wである。堆積土は１層確認された。調査区南壁及び平面でその一部を確認したに過ぎない。地山粒をまばらに含む黒褐色シルト質粘土である。自然堆積と考えられる。壁は南側壁面で見ると東側で0.14mである。床面から垂直に立ち上がる。床は掘方埋土からなる。削平のため残存状況は悪いが、残存する部分はほぼ平坦である。埋土は１層確認された。地山土、黒色土を多く含む暗褐色シルトである。掘方底面は凹凸が見られる。ピット１～２は主柱穴である。いずれも柱は抜き取られている。柱穴の平面形は楕円形であり、ピット１では規模0.6～0.4m、深さ0.38mである。埋土は地山土をまばらに含む黒褐色粘土である。柱痕跡は１ヶ所で確認された。径0.16m、深さ0.15mである。堆積層は黒褐色粘土である。カマドの下部と考えられる焼土、炭化物混じりの黄褐色シルトが北辺中央寄りやや西側で確認された。長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.09mの隅丸方形を呈する。

堆積層、カマド堆積層、掘方埋土から非ロクロ土師器甕が出土している。いずれも破片のため図示できない。また、住居跡上部の基本層序Ⅰ層やⅣ層から土師器、須恵器が出土しているが、本住居跡に伴うものかは不明である。

58号住居跡

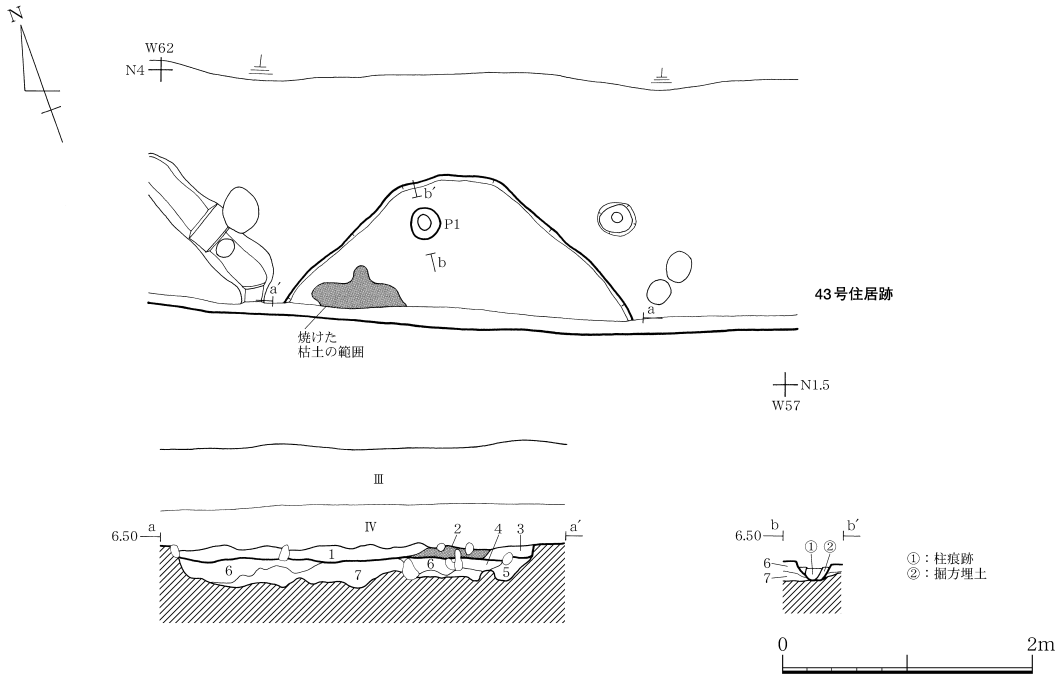
13区西端、E10.5～14・Ｎ２～３付近の基本層序Ｘ層で検出された。ピットと重複し、これらより古い。調査区壁際で確認されたため正確な平面形は不明であるが、方形であると考えられる。規模は南



41号竪穴遺構

№	土　色	土　性	備　考	
1	黒色2.5Y2/1	シルト質粘土	地山粒を少量含む	堆積土
2	黒色10YR1.7/1	粘土質シルト	地山粒、炭化物をまばらに含む	
3	黒色10YR1.7/1	粘土質シルト	5層(掘方埋土)起源の粒をまばらに含む(流出土)	
4	黒色10YR1.7/1	シルト質粘土		周溝(?)堆積土
5	にぶい黄褐色10YR6/4	粘　土	黒色土、灰褐色土を多く含む（流出土）	
6	黒褐色10YR3/1	粘土質シルト	地山ブロックを多く、黒色土をまばらに含む	掘方埋土
7	黄灰色2.5Y5/1	シ　ル　ト	地山ブロックを多く含む	

№	層位	遺物名	残存	器高	口径	底径	特　徴	登録№	図版
1	堆積土	ロクロ土師器坏	底部	－	－	6.4	外：ロクロナデ、灰黄褐（10YR5/2）～にぶい橙（10YR7/2）、底：ロクロナデ→一部ミガキ→ヘラ記号「□」、内：ヘラミガキ・黒色処理、黒（N1.5/）	R057	13-2



43号住居跡

№	土　色	土　性	備　考	
1	黒色2.5Y2/1	シルト質粘土	地山粒をまばらに含む	堆積土
2	灰黄褐色10YR4/3	シ　ル　ト	炭化物をまばら、白色粘土を若干に含む焼けてかたく締まる	
3	黒色2.5Y2/1	粘土質シルト	地山粒をまばらに含む	
4	黒褐色10YR3/2	シ　ル　ト	地山粒・黒色土粒をまばらに、焼土を少量含む	掘方埋土
5	黒褐色2.5Y3/2	シ　ル　ト	地山粒・焼土・黒色土粒をまばらに含む	
6	黒褐色10YR3/1	粘土質シルト	地山ブロック、黒色土粒を多く含む	
7	黒褐色10YR3/2	粘土質シルト	地山ブロックをまばらに含む	

第９図 住居跡と出土遺物（1）

北1.2m以上、東西3.2m以上である。東辺で方向を計るとＮ－19°－Ｅである。堆積土は大別１層（層№１～２）確認された。細かい地山粒を含む黒褐色粘土質シルトである。自然堆積と考えられる。壁は床面から垂直に立ち上がるもので、最も保存の良い北側では0.04mである。南側壁面では0.18mである。床面は掘方埋土と地山からなる。やや凹凸は見られるがほぼ平坦である。埋土は大別１層（層№３～５）確認された。黒褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土、褐灰色粘土質シルトである。掘方底面は凹凸が見られる。周溝は東辺で確認された。幅0.3～0.1m、深さ0.1mである。堆積土は黒褐色粘土質シルトであり、自然堆積と考えられる。

遺物は堆積土からロクロ土師器坏、非ロクロ土師器甕、須恵器坏、スサ入りの粘土塊、掘方埋土から非ロクロ土師器甕、縄文土器鉢体部片が出土している。ほとんどが破片であり、図示できたものは少ない（第10図１）。

63号住居跡

14区中央のＥ32～35、Ｎ2.5～4.5付近に位置する。基本層序Ｘ層で検出された。85号土坑と重複し、これより新しい。本住居跡は昭和30年代のほ場整備で削平されたため、平面形は不明である。堆積土は残存しておらず、不整形を呈した掘方埋土のみが検出された。したがって、正確な規模や方向は不明である。現状では南北2.95m以上、東西2.2m以上である。掘方底面は凹凸が見られ、検出面では基本層序Ｘ層が露出する部分もある。埋土は地山土を含む黒褐色シルト質粘土～黒褐色シルトである。

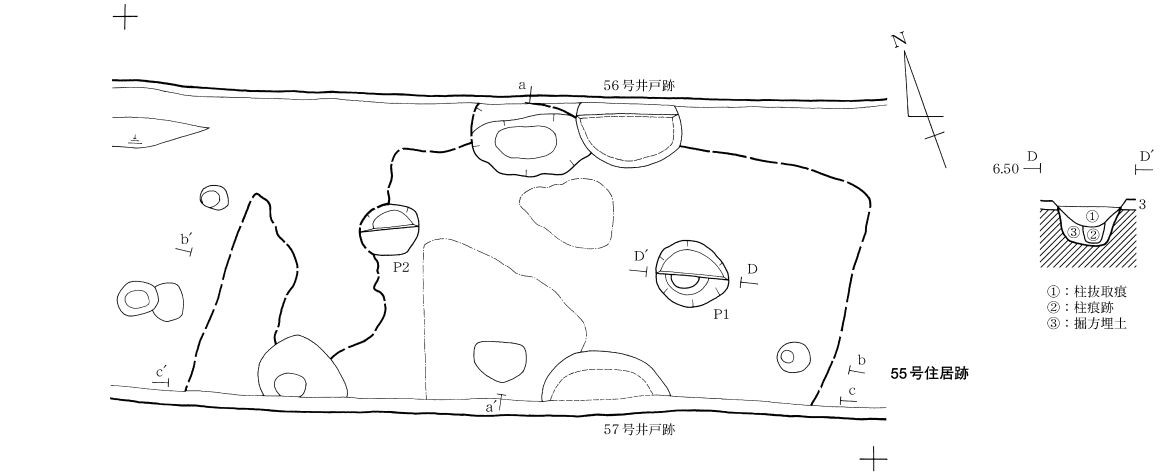
東辺中央付近に焼土や炭化物を含む黒褐色シルト質粘土層が検出された。カマド下部の堆積層と考えられる。平面形は円形で規模は長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.1mである。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。貯蔵穴状ピットは調査区壁際で検出された。調査区際であるため、平面形は不明であるが隅丸方形であると考えられる。規模は長軸0.6m以上、短軸0.6m、深さ0.24mである。底面は平坦で壁はやや急に立ち上がる。堆積土は２層確認され、黒褐色シルト質粘土～黄灰色シルトであり、炭化物、焼土、地山粒を含むものである。

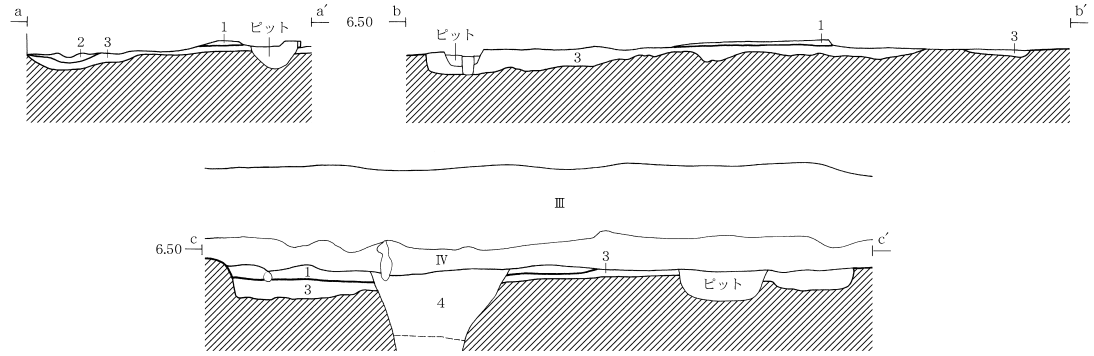
遺物はカマド堆積層から非ロクロ土師器甕、貯蔵穴状ピット堆積層から非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器、掘方埋土からロクロ土師器坏、非ロクロ土師器甕、赤焼き土器坏、須恵器坏が出土した（第11図１～２）。

なお、住居跡上層の基本層序Ⅳ層中で径0.2mほどの焼土が確認され、周囲から多数の土師器、須恵器が出土している（第30図９など）が、本住居跡に伴うものかは不明である。

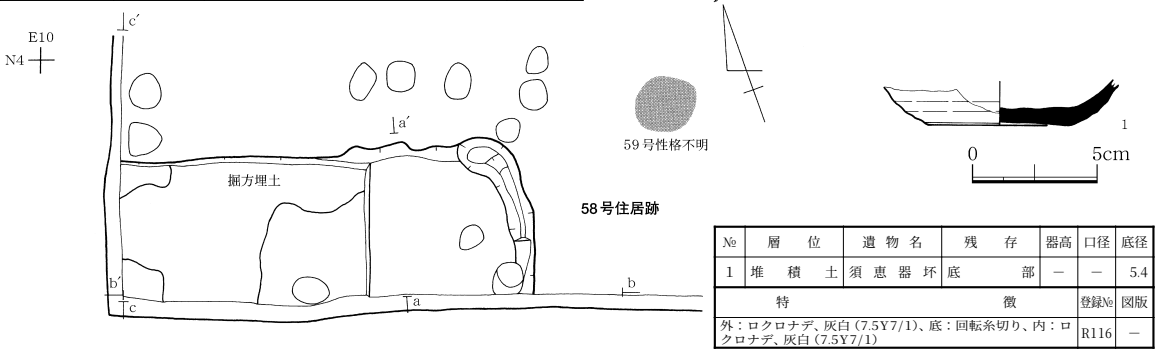
83号住居跡

23区西側、Ｓ59.5～63・W36～39付近の基本層序Ｘ層及び褐色土層上面で検出された。86号土坑、小溝と重複し、これらより古い。また、南側は近代以降の旧河川で削平を受けており、西側は昭和20～30年代の工事により削平を受けている。そのため、正確な平面形や規模は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈するものと見られ、南北3.75m以上、東西3.0m以上である。方向は北辺で計るとＮ－76°－Ｅである。堆積土は１層確認された。灰白色火山灰小ブロックを含む黒褐色シルト質粘土である。壁は床面から垂直に立ち上がるもので、最も保存状況の良い北辺では0.04mである。床は掘方埋土からなる。床面レベルはほぼ平坦であるが、西側では検出時に既に掘方埋土が露出する部分もあった。ま

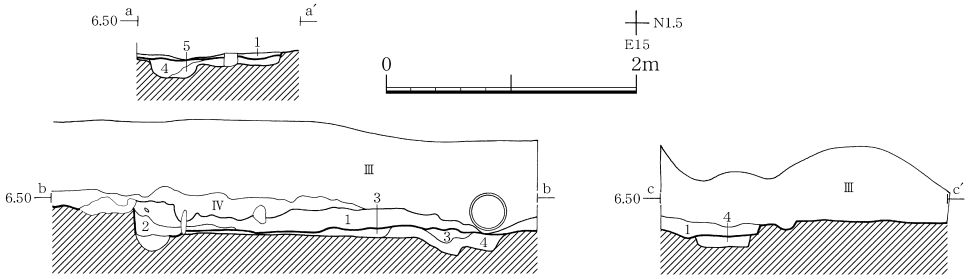




№	土　色	土　性	備　考	
1	黒褐色10YR3/1	粘土質シルト	地山粒をまばに含む堆積土	堆積土
2	黄灰色2.5Y2/1	シ　ル　ト	細かい地山粒・焼土粒・炭化物を多く含む	
3	暗褐色10YR3/3	シ　ル　ト	地山土・ブロック・黒色土を多く含む。堀方埋土	掘方埋土
4	黒褐色10YR3/2	シルト質粘土	地山粒を若干含む。	57号井戸



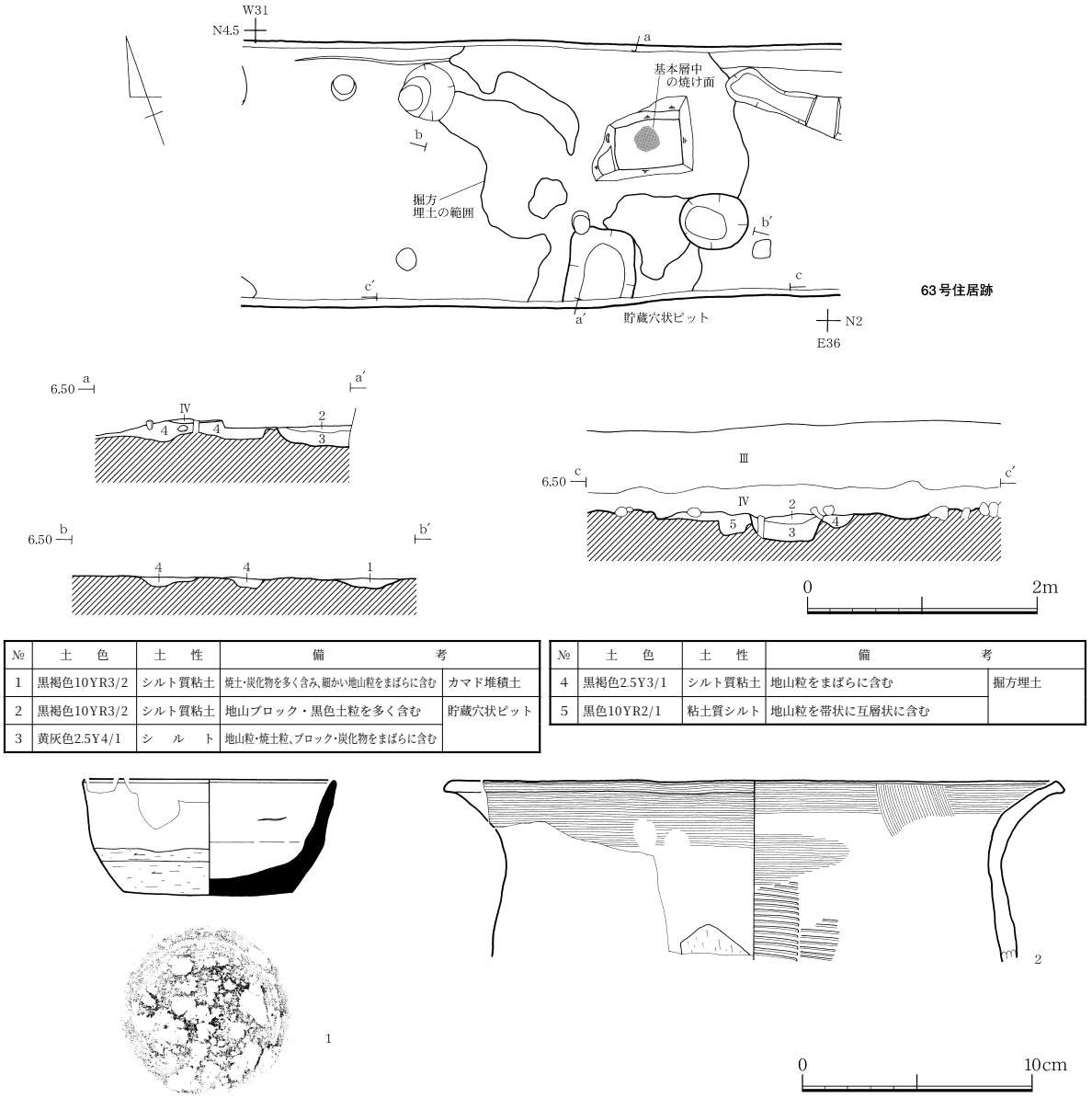
№	層　位	遺物名	残　存	器高	口径	底径
1	堆　積　土	須恵器坏	底　部	—	—	5.4
特　徴					登録№	図版
外：ロクロナデ、灰白（7.5Y7/1）、底：回転糸切り、内：ロクロナデ、灰白（7.5Y7/1）					R116	—



№	土　色	土　性	備　考	
1	黒褐色10YR2/2	シルト質粘土	細かい地山粒を若干含む　パサパサする	堆積土
2	黒褐色10YR2/2	シルト質粘土	細かい地山粒を少量含む	
3	黒色10YR2/1	粘土質シルト	地山粒、焼土、炭化物を多く含む、	掘方埋土

№	土　色	土　性	備　考	
4	にぶい黄褐色10YR5/3	粘　土	褐灰（10YR4/1）シルトを互層状に含む、	掘方埋土
5	褐灰色10YR4/1	粘土質シルト		

第10図 住居跡と出土遺物（2）



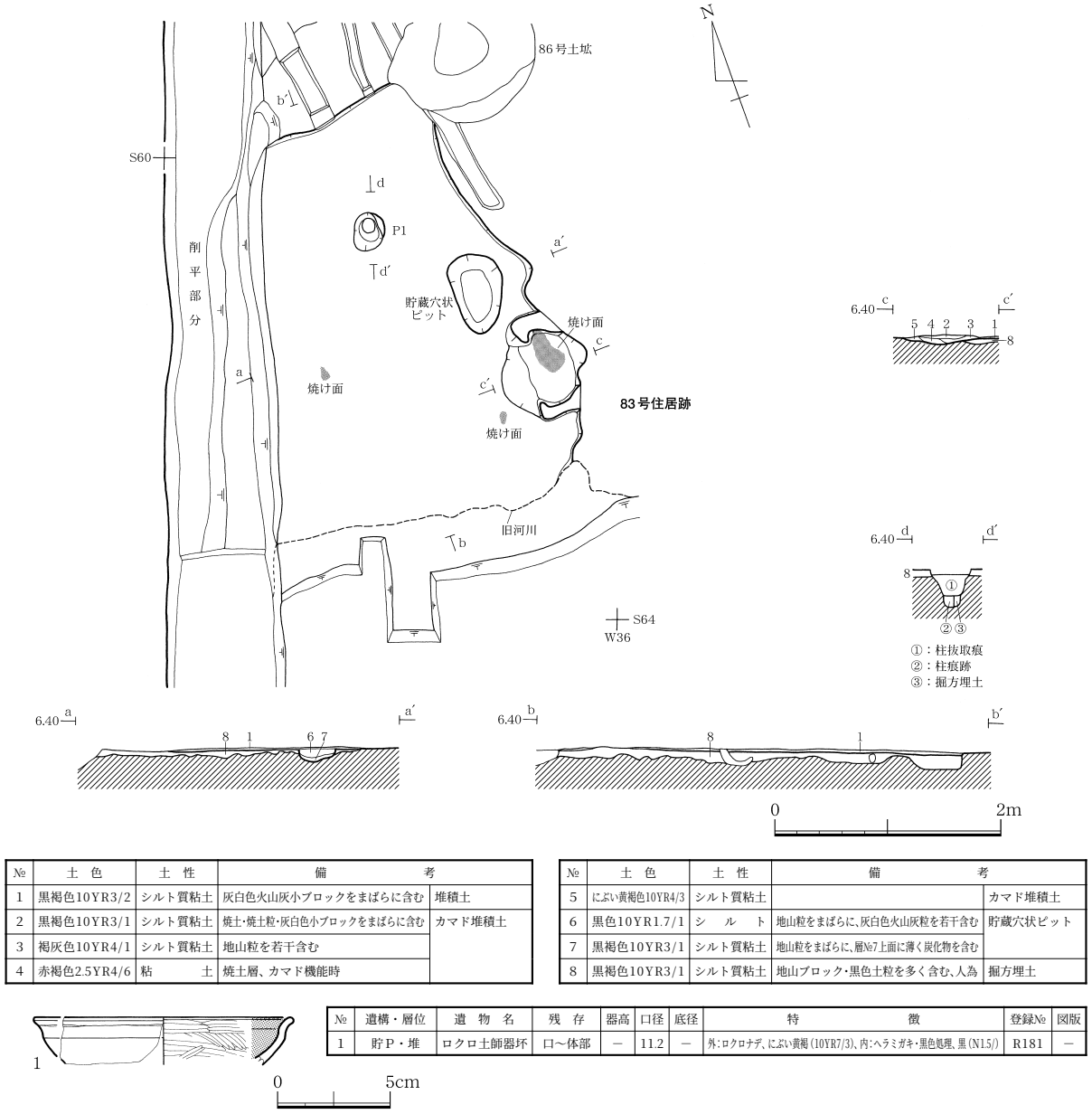
№	土　色	土　性	備　考	
1	黒褐色10YR3/2	シルト質粘土	焼土・炭化物を多く含み、細かい地山粒をまばらに含む	カマド堆積土
2	黒褐色10YR3/2	シルト質粘土	地山ブロック・黒色土粒を多く含む	貯蔵穴状ピット
3	黄灰色2.5Y4/1	シ　ル　ト	地山粒・焼土粒、ブロック・炭化物をまばらに含む	

№	土　色	土　性	備　考	
4	黒褐色2.5Y3/1	シルト質粘土	地山粒をまばらに含む	掘方埋土
5	黒色10YR2/1	粘土質シルト	地山粒を帯状に互層状に含む	

№	層　位	遺 物 名	残　存	器高	口径	底径	特　徴	登録№	図版
1	掘 方 埋 土	須 恵 器 坏	2/3	5.0	10.8	7.5	外：ロクロナデ、回転ケズリ、にぶい橙(7.5YR6/4)～灰褐(10YR5/1)、底：不明→回転ケズリ、内：ロクロナデ、橙(5YR6/6)	R032	－
2	掘 方 埋 土	非ロクロ土師器甕	口～体部	－	26.1	－	外：横ナデ、ヘラケズリ、にぶい黄橙（10YR4/3）、内：横ナデ、ハケメ、にぶい橙（7.5YR6/4）	R035	－

第11図 住居跡と出土遺物（3）

た、床面上では２ヶ所で焼け面が見られた。掘方底面は凹凸が見られる。埋土は地山粒を多く含む黒褐色シルト質粘土である。柱穴は１ヶ所確認された。ピット１は主柱穴と考えられる。柱穴は抜き取り痕のため正確な規模は不明ではあるが、隅丸方形であり、規模は0.3～0.25m、深さ0.34mである。埋土は黒褐色シルトである。柱痕跡は径0.12m程の円形であり、堆積土は黒褐色粘土質シルトである。カマドは東辺で検出された。燃焼部は奥行き0.81m、幅0.92m、深さ0.09mであり、底面へ向かいゆるやかに傾斜する。燃焼部側壁は褐色粘土及び黒色シルトで構築されている。燃焼部底面及び側壁の一部には火熱による焼け面が認められ、その上部には規模0.3～0.25m、厚さ0.08mの範囲で焼土が検出さ



№	土　色	土　性	備　　考	
1	黒褐色10YR3/2	シルト質粘土	灰白色火山灰小ブロックをまばらに含む	堆積土
2	黒褐色10YR3/1	シルト質粘土	焼土･焼土粒･灰白色小ブロックをまばらに含む	カマド堆積土
3	褐灰色10YR4/1	シルト質粘土	地山粒を若干含む	
4	赤褐色2.5YR4/6	粘　　土	焼土層、カマド機能時	

№	土　色	土　性	備　　考	
5	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト質粘土		カマド堆積土
6	黒色10YR1.7/1	シ　ル　ト	地山粒をまばらに、灰白色火山灰粒を若干含む	貯蔵穴状ピット
7	黒褐色10YR3/1	シルト質粘土	地山粒をまばらに、層№7上面に薄く炭化物を含む	
8	黒褐色10YR3/1	シルト質粘土	地山ブロック･黒色土粒を多く含む、人為	掘方埋土

№	遺構・層位	遺　物　名	残　存	器高	口径	底径	特　　徴	登録№	図版
1	貯Ｐ・堆	ロクロ土師器坏	口～体部	－	11.2	－	外：ロクロナデ、にぶい黄褐（10YR7/3）、内：ヘラミガキ・黒色処理、黒（N15/）	R181	－

第12図 住居跡と出土遺物（4）

れた。貯蔵穴状ピットはカマド左側で検出された。隅丸方形であり、規模は長軸0.7m、短軸0.45m、深さ0.13mを計る。底面は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。堆積土は２層確認された。黒色シルト～黒褐色シルト質粘土であり、いずれも自然堆積と考えられる。

遺物は検出面からロクロ土師器坏、非ロクロ土師器、貯蔵穴状ピット堆積層からロクロ土師器坏、掘方埋土からロクロ土師器坏、非ロクロ土師器甕、須恵器壺の破片が出土しているが、ほとんどが破片のため、図示できるものは少ない（第12図１）。

2．掘立柱建物跡と出土遺物

掘立柱建物跡は４棟確認された。ただし、調査区が狭いため、建物跡として組み合わなかったピットが多数存在する。それらの一部については断面図を提示する。なお、第２次調査で確認された19号建物跡南西隅柱の南側半分を検出したが、それ以上南側に伸びるかどうかは調査区の関係から確定することが出来なかった。そのため、前回の報告以上の事実を確認することが出来ないため、ここでの説明は省略する（註１）。

37号建物跡

９区東端から10区東側、W163～170・Ｎ３付近の基本層序Ⅹ層で確認された。重複関係を確認することは出来なかったが、35号溝跡と重複する。桁行（？）２間、梁行不明の側柱建物跡である。桁行は7.75m（西から3.94m＋3.83m）である。方向はＮ－16°－Ｅ（桁行＋90°）である。柱穴は３ヶ所確認された。円形～隅丸方形を呈し、規模は0.45～0.25m、深さは0.15～0.09mである。埋土は地山粒や黒色土粒を含む暗褐色～明黄褐シルトである。柱痕跡は３ヶ所で確認された。径0.16～0.10mの円形で、0.18～0.13mである。堆積土は黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

68号建物跡

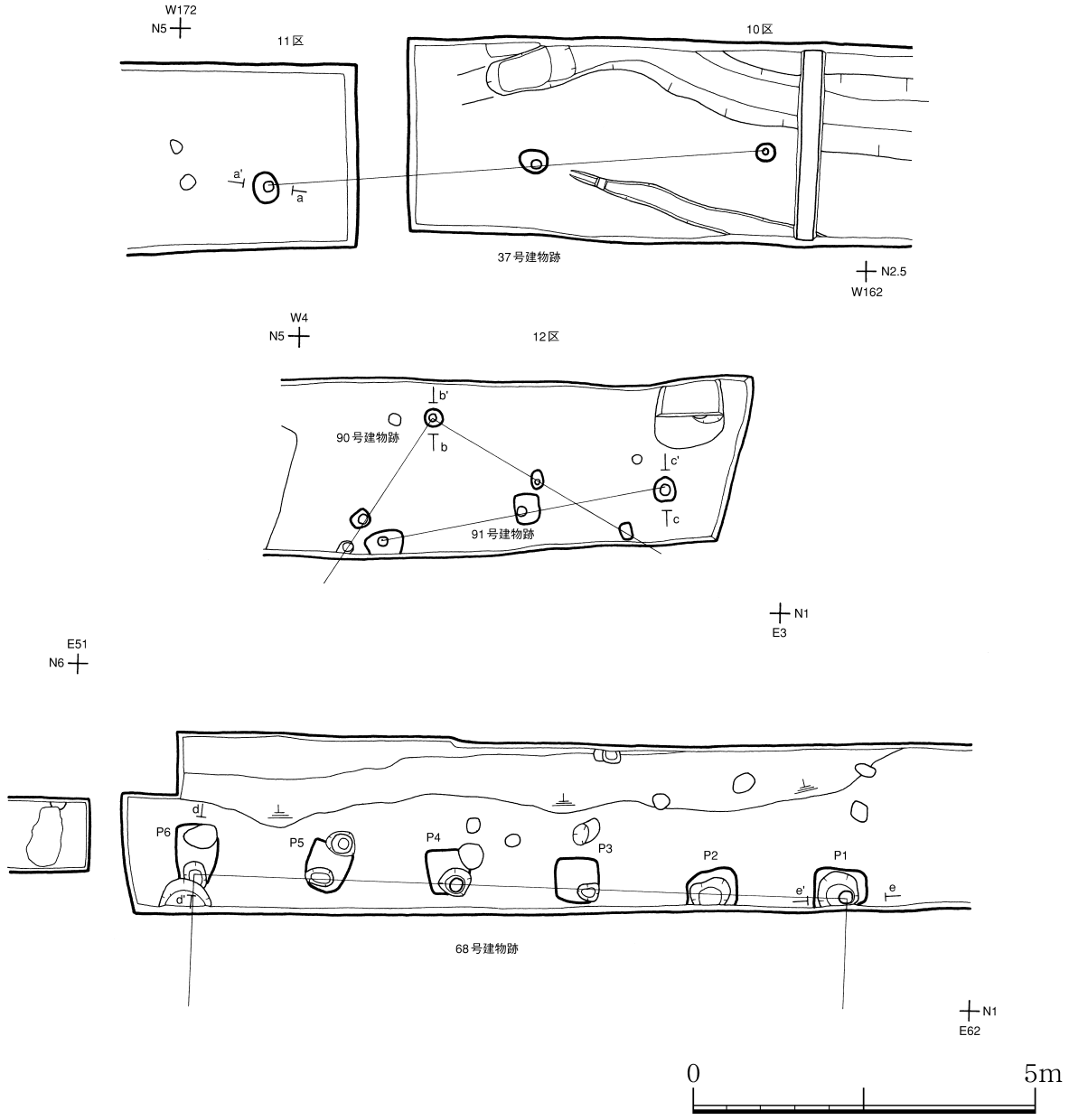
15区西側、Ｅ52～61・Ｎ2.5付近の基本層序Ⅹ層で確認した。67号土坑、ピットと重複し、これらより古い。桁行５間、梁行不明の側柱建物跡である。東西棟である。なお、第１次調査時に調査区北側の調査を行っているが、柱穴は確認されていないため、南側に展開するものと考えられる（註２）。桁行は総長9.52m（西側から1.89m＋1.92m＋1.94m＋1.80m＋1.98m）である。方向はＮ－20°－Ｅ（桁行＋90°）である。柱穴は６ヵ所確認された。いずれも方形を基調とし、0.85m以上～0.61mを計る。深さは0.44～0.12mである。ほとんどの柱穴（Ｐ１、２、５、６）で柱痕跡付近が深いもので、段掘り状に掘り込まれている。埋土は地山粒を含む黒褐色～黄褐色粘土である。抜取痕跡は６ヵ所で確認され、柱痕跡は２ヶ所で確認することが出来た。径0.22mほどの円形で、深さは0.28～0.26mである。堆積土は黒色粘土～シルト質粘土である。遺物はP4掘方埋土から非ロクロ土師器甕が出土しているが、小破片のため図示できなかった。

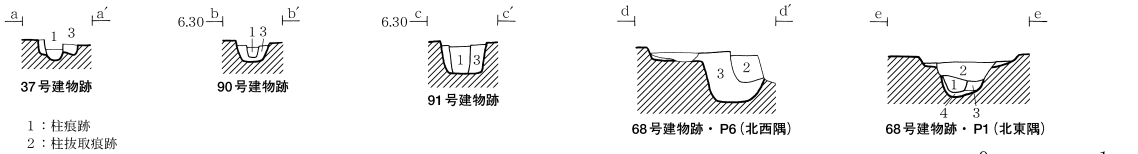
90号建物跡

12区東端、Ｗ４～Ｅ２・Ｎ２～４付近の基本層序Ⅹ層で確認された。桁行２間以上、梁行１間以上の側柱建物跡である。南北棟である。桁行は総長3.30m以上（西から1.80m＋1.50m＋α）である。梁行は1.80＋αmである。方向は西側柱列で計るとＮ－32°－Ｅである。柱穴は３ヶ所確認された。円形～隅丸方形を呈し、規模は0.30～0.18m、深さは0.26～0.09mである。埋土は黒色土を含む黒褐色シルト質粘土～明黄褐色粘土である。柱痕跡は３ヶ所で確認された。径0.15～0.08mの円形であり、深さは0.18～0.13mである。堆積土は黒色シルト～シルト質粘土である。遺物は出土していない。

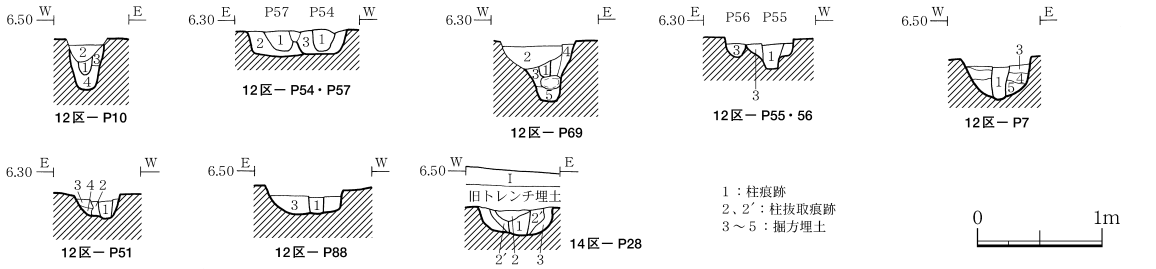
91号建物跡

12区東端、Ｗ３～Ｅ１・Ｎ２付近の基本層序Ⅹ層で確認された。桁行（？）２間以上、梁行不明の側柱建物跡である。桁行は4.2m（西から2.1m＋2.1m）である。方向はＮ－７°－Ｅ（桁行＋90°）である。柱穴は３ヶ所確認された。円形～隅丸方形を呈し、規模は0.58～0.34m、深さは0.34～0.16mであ





第13図 建物跡



第14図 ピット断面図

る。埋土は地山粒や灰褐色シルト粒を含む黒色シルト質粘土～明黄褐色粘土である。柱痕跡は３ヶ所で確認された。径0.20～0.18mの円形で、深さは0.34～0.16mである。堆積土は黒色～黒褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

註（１）なお、前回の事実報告（安達訓仁：2000）中に誤りがあったので、以下のように訂正する。
49頁４行目32～46㎝→64～92㎝
（２）その場合、桁行が２間あるいはそれ以上であるならば、位置的に２号溝跡と重複することとなる。68号建物跡が２号溝跡より新しい場合は、該当部分を整地している可能性も考えられる。

３．井戸跡と出土遺物

井戸跡は７基検出された。ほとんどが調査区壁付近で検出されているため、全体の平面形は不明であり、また、南側が農道であり崩落防止のため、ほとんどで完掘を行っていない。ここでは、主要なものについて報告する。

39号井戸跡

11区西側、W133・Ｎ２付近の基本層序Ｘ層で検出された。調査区壁際のため、完掘は行っていない。40号土坑と重複し、これより新しい。平面形は調査区外に伸びるため断定できないが、円形であると考えられる。長軸2.0m、短軸1.2m以上、深さ0.87m以上である。断面は漏斗状である。堆積層は大別２層であり、上層は黒色粘土質シルト～にぶい黄褐色粘土であり、下層は黒褐色粘土で機能時の堆積である。下層上面には人頭大の礫６点がみられ、投棄された可能性が考えられる。いずれも自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

49号井戸跡

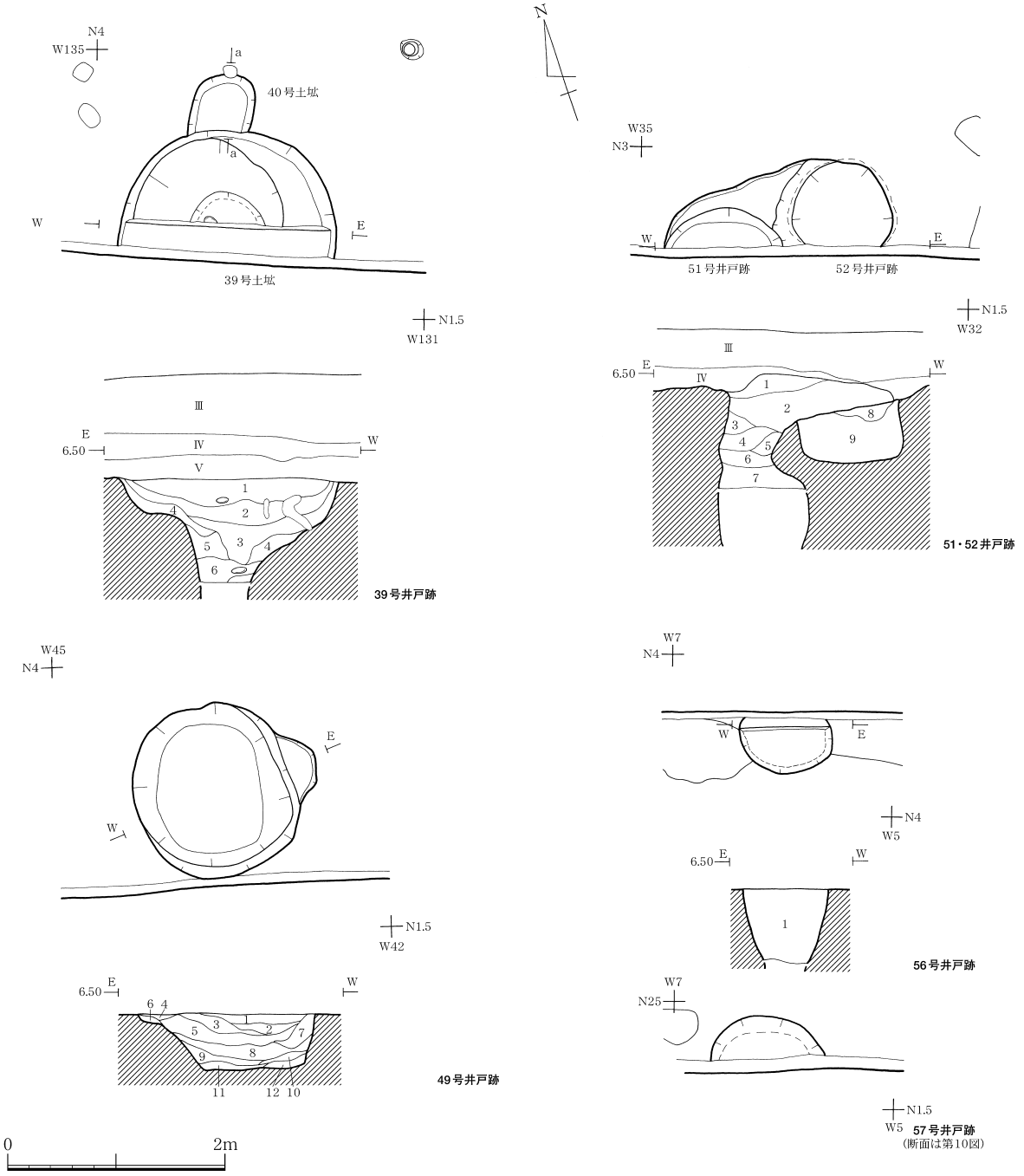
12区中央、W43・Ｎ２付近の基本層序Ｘ層で検出された。平面形は円形で長軸1.7m、短軸1.6m、深さ0.59mの円形を呈する。断面は逆台形状を呈する。堆積土は大別２層で上層（層№１～８）はオリーブ黒シルト質粘土～粘土で堆積土中には灰白色火山灰粒をまばらに含む。下層（層№９～12）はオリーブ黒細砂～粘土であり、機能時のものと考えられる。いずれもレンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。遺物は須恵器坏・甕、ロクロ土師器坏、高台付坏、非ロクロ土師器坏・甕が出土しているが、いずれも細片のため図示することは出来ない。

51号井戸跡

12区中央、W32・Ｎ２付近の基本層序Ｘ層で検出された。52号井戸跡と重複しこれより古い。平面形は円形を呈すると考えられ、長軸1.1m、深さ0.54mである。断面は箱形である。堆積土は大別１層で黒褐色粘土質シルト～黒色シルト質粘土である。自然堆積で機能時のものと考えられる。遺物は出土していない。

52号井戸跡

12区中央、W32・Ｎ２付近の基本層序Ｘ層で検出された。51号井戸跡と重複しこれより新しい。平面形は長楕円形を呈すると考えられ、長軸2.1mである。筒部は円形であり、長軸0.9mであり、深さ1.0m以上である。断面は円筒形である。堆積土は大別２層で上層（層№１～６）は黒褐色粘土～暗灰黄色粘土であり、地山土を多く含むもので人為堆積と考えられる。下層（層№７）は黒色粘土で機能時の堆



39号井戸跡			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒色 5Y2/1	粘土質シルト	地山粒を少量含む
2	黒色 2.5Y2/1	粘土質シルト	地山粒を若干含む
3	黒色 10YR2/1	シルト質粘土	
4	黒褐色 10YR3/1	粘　土	地山土を下部に斑状に含む
5	にぶい黄褐色 10YR6/4	粘　土	黒色土、灰褐色土を多く含む（流出土）
6	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	地山粒をまばらに含む、上部に礫６点あり（投棄か）
49号井戸跡			
№	土　色	土　性	備　考
1	オリーブ黒 5Y3/1	シルト質粘土	
2	黒色 10YR1.7/1	粘　土	地山土をまばらに含む
3	黒色 2.5Y2/1	粘　土	地山ブロックをまばらに含む、層№５より多い
4	オリーブ黒 5Y3/2	粘　土	地山粒を若干含む
5	黒褐色 2.5Y3/1	粘　土	地山粒のブロック、灰白色火山灰粒含む
6	黒褐色 10YR3/1	シ　ル　ト	細かい地山粒を若干含む
7	黒灰色 10YR4/1	粘土質シルト	下部に地山粒を多く含む
8	オリーブ黒色 5Y3/1	粘　土	地山土をまばらに含む
9	オリーブ黒色 5Y3/1	細　砂	地山粒を若干含む
10	灰色 2.5Y4/1	粘　土	層№９を縞状に含む
11	オリーブ黒色 7.5Y3/1	粘　土	地山粒をまばらに含む
12	黒褐色 10YR3/1	シ　ル　ト	地山粒をまばらに含む

51号・52号井戸跡				
№	土　色	土　性	備　考	
1	黒褐色 10YR3/2	粘　土	地山粒を若干に含む	52井戸
2	褐灰色 10YR4/1	粘土質シルト	地山ブロックをまばらに含む	
3	暗灰黄色 2.5Y4/2	粘　土	地山粒を若干含む	
4	黒褐色 2.5Y3/2	粘　土	地山粒をまばらに含む　炭化物若干含む	
5	黒褐色 2.5Y3/2	粘　土	地山粒をまばらに含む　炭化物若干含む	
6	黒褐色 2.5Y3/2	粘　土	地山粒をまばらに含む　炭化物若干含む	
7	黒色 2.5Y4/1	粘　土	地山土を少量含む	
8	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	３～５㎜大の地山粒を含む	51井戸
9	黒色 10YR1.7/1	シルト質粘土	地山粒をまばらに含む　機能時	
57号井戸跡				
№	土　色	土　性	備　考	
1	黒褐色 2.5Y3/1	シルト質粘土	地山粒をまばらに含む	

第15図　井戸跡

積であり、自然堆積と考えられる。遺物は須恵器甕口縁部が出土しているが、破片のため図示できない。

56号井戸跡

12区東側、Ｗ６・Ｎ５付近の55号住居跡上面、基本層序Ｘ層で検出された。55号住居跡と重複しこれより新しい。平面形は円形を呈すると考えられ、長軸0.8m、深さ0.69m以上である。断面は円筒形である。堆積土は１層で黒褐色シルト質粘土であり、地山粒をまばら含む。自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

57号井戸跡

12区東側、Ｗ６・Ｎ２付近の55号住居跡堆積層上面で検出された。55号住居跡と重複しこれより新しい。平面形は円形を呈すると考えられ、長軸1.1m、深さ0.56m以上である。断面は円筒形である。堆積土は１層で黒褐色シルト質粘土であり、地山粒を若干含む。自然堆積と考えられる。

遺物は非ロクロ土師器破片が出土している。55号住居跡出土の非ロクロ土師器と接合するもので、55号住居跡から流れ込みであると考えられる。遺物は細片のため図示することが出来ない。

４．土坑と出土遺物

土坑は30基確認された。ここでは、重複や出土遺物のあるものについて報告し、その他は表で示す。

23号土坑

10区中央、W153・Ｎ２付近の基本層序Ｘ層、38号土坑堆積層上面で検出された。38号土坑と重複し、これより新しい。平面形は隅丸方形であると考えられる。長軸2.6m、短軸1.6m以上、深さ0.29mである。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は大別１層（層№１～６）で黒色粘土質シルト～褐色粘土で、自然堆積と考えられる。遺物は縄文土器、非ロクロ土師器、ロクロ土師器、礫が出土しているが、いずれも細片のため図示することは出来ない。

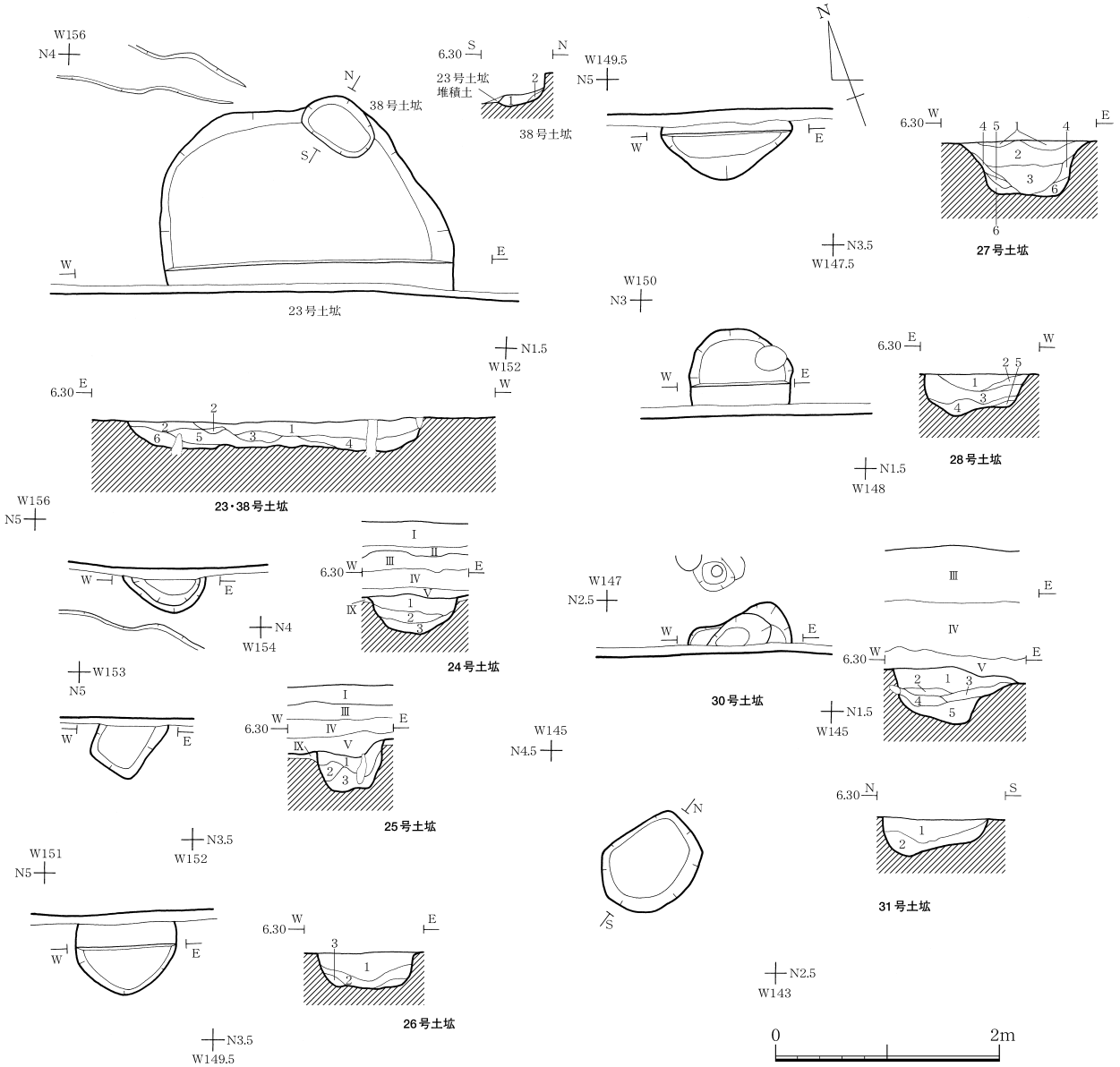
24号土坑

10区中央、W155・N4.5付近の基本層序Ⅸ層で検出された。壁際で検出されため正確な平面形は不明であるが、隅丸方形を呈すると考えられる。長軸0.4m以上、深さ0.29mである。底面は皿状で壁は急な角度で立ち上がるものである。堆積土は大別２層に分層された。上層（層№１～２）は黒色粘土質シルト～黒褐色粘土で自然堆積と考えられる。下層（層№３）は褐灰色粘土で地山土を多く含むもので、機能時のもので自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

25号土坑

10区中央、W154・N4.5付近の基本層序Ⅸ層で検出された。壁際で検出されため正確な平面形は不明であるが、隅丸方形を呈すると考えられる。長軸0.6m以上、短軸0.55m、深さ0.35mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がるものである。堆積土は大別２層に分層された。上層（層№１～２）は黒色粘土質シルト～粘土で自然堆積と考えられる。下層（層№３）は黒褐色粘土で地山土を多く含むもので、機能時のもので自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

26号土坑



23号土坑			
№	土色	土性	備考
1	黒色 10YR2/1	粘土質シルト	地山粒・炭化物を若干含む
2	黒色 10YR2/1	シルト	地山粒をまばらに含む
3	黒褐色 10YR3/1	粘土	地山粒を若干含む
4	黒色 2.5Y2/1	シルト	地山ブロックをまばらに含む(壁崩落土)
5	黒色 10YR2/1 明黄褐色 10YR6/6	シルト質粘土 粘土	互層、炭化物をまばらに含む
6	褐色 10YR4/4	粘土	黒色土・地山粒をまばらに含む
24号土坑			
№	土色	土性	備考
1	黒色 10YR2/1	粘土質シルト	地山粒を若干含む
2	黒褐色 10YR3/1	粘土	地山ブロックをまばらに含む
3	褐灰色 10YR5/1	粘土	地山粒・地山ブロックを多く含む、人為
25号土坑			
№	土色	土性	備考
1	黒色 10YR2/1	粘土質シルト	地山粒を若干含む
2	黒色 10YR1.7/1	粘土	地山粒、炭化物を若干含む
3	黒褐色 10YR3/1	粘土	地山粒・ブロック、黒色土粒を含む、人為
26号土坑			
№	土色	土性	備考
1	黒色 10YR2/1	シルト質粘土	地山粒、焼土、炭化物を若干含む
2	黒色 10YR1.7/1	シルト質粘土	地山ブロックを若干含む
3	褐灰色 10YR4/1	粘土	地山土を多く含む
27号土坑			
№	土色	土性	備考
1	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	
2	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	地山粒・黒色土粒を若干含む
3	黒褐色 10YR3/1	粘土	
4	灰黄褐色 10YR5/2	粘土	
5	黒褐色 10YR3/2	粘土	
6	にぶい黄褐色 10YR6/4	粘土	
28号土坑			
№	土色	土性	備考
1	黒褐色 10YR3/1	シルト質粘土	地山粒・黒色土粒をまばらに含む、人為
2	黒褐色 2.5Y3/1	シルト質粘土	細かい地山粒を若干含む、人為
3	黒褐色 2.5Y3/1	シルト質粘土	地山土を多く、黒色土粒若干含む、人為
4	黒色 2.5Y2/1	粘土	地山土を若干含む
5	褐灰色 10YR4/1	粘土	地山粒を多く含む
30号土坑			
№	土色	土性	備考
1	黒色 10YR2/1	粘土	地山粒を若干含む
2	黒色 10YR2/1	粘土	地山粒をまばらに含む
3	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	
4	黒色 10YR1.7/1	粘土	
5	黒色 10YR2/1	粘土	地山粒・炭化物を若干含む
31号土坑			
№	土色	土性	備考
1	黒色 10YR2/1	粘土	地山粒、地山ブロックを少量、斑状に含む
2	黒色 10YR1.7/1	粘土	地山粒をまばらに含む
38号土坑			
№	土色	土性	備考
1	黒色 10YR2/1	粘土	
2	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘土	地山粒・黒色土粒を多く含む

第16図 土坑 (1)

10区中央、W150・N4.5付近の基本層序Ⅹ層で検出された。壁際で検出されため正確な平面形は不明であるが、円形を呈すると考えられる。長軸0.9m、短軸0.7m以上、深さ0.31mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がるものである。堆積土は大別２層に分層された。上層（層№１～２）は黒色粘土質シルト～粘土で、地山土や焼土、炭化物を若干含むもので自然堆積と考えられる。下層（層№３）は褐灰色粘土で地山土を多く含み、機能時のもので自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

27号土坑

10区中央より東側、W148・N4.5付近の基本層序Ⅹ層で検出された。壁際で検出されため正確な平面形は不明であるが、隅丸方形を呈すると考えられる。長軸0.85m以上、短軸0.8m以上、深さ0.45mである。底面はほぼ平坦で、壁は急な角度で立ち上がるものである。堆積土は大別２層に分層された。上層（層№１～３）は黒褐色粘土質シルト～黒褐色粘土で、自然堆積である。下層（層№４～６）は灰黄褐色～にぶい黄褐色粘土で機能時のもので自然堆積である。遺物は出土していない。

28号土坑

10区中央より東側、W149・N2.5付近の基本層序Ⅹ層で検出された。ピットと重複し、これより古い。壁際で検出されため正確な平面形は不明であるが、円形を呈すると考えられる。長軸0.9m、短軸0.7m以上、深さ0.35mである。底面はやや凹凸はあるが平坦で、壁は急な角度で立ち上がるものである。堆積土は大別２層に分層された。上層（層№１～３）は黒褐色シルト質粘土で、地山土や黒色土を含むもので人為堆積である。下層（層№４～６）は黒褐色～褐灰色粘土で機能時のもので自然堆積である。遺物は出土していない。

30号土坑

10区中央より東側、W146・Ｎ２付近の基本層序Ⅹ層で検出された。壁際で検出されため正確な平面形は不明である。長軸0.93m、深さ0.43mである。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がるものである。堆積土は大別１層で黒色粘土～黒褐色粘土質シルトで自然堆積である。遺物は出土していない。

31号土坑

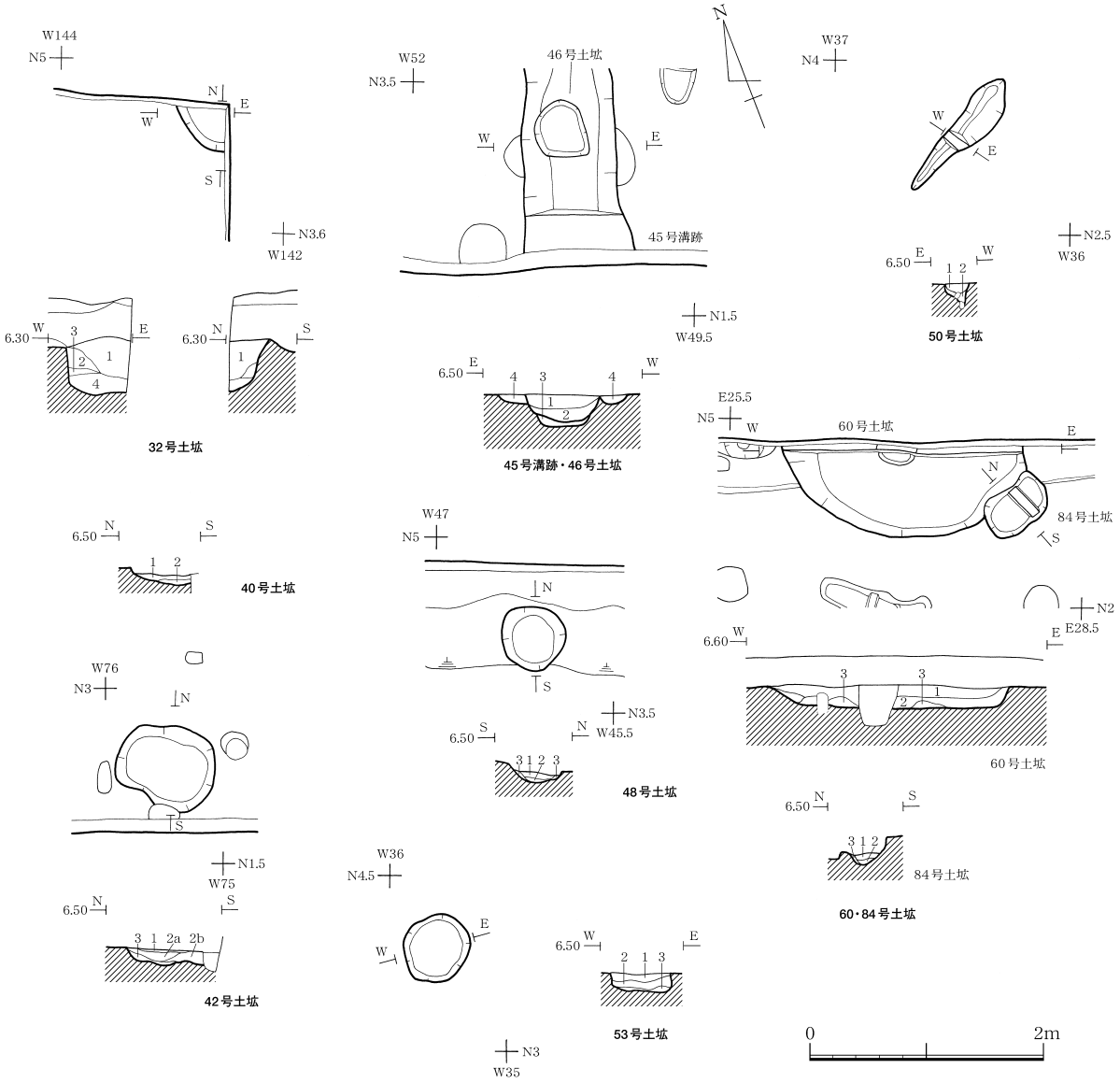
10区東側、W144・Ｎ３付近の基本層序Ⅹ層で検出された。平面形は隅丸方形である。長軸0.94m、短軸0.73m、深さ0.35mである。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がるものである。堆積土は大別１層で黒色粘土で自然堆積である。遺物は出土していない。

32号土坑

10区東側、W143・N4.5付近の基本層序Ⅹ層で検出された。平面形は隅丸方形である。長軸0.45m以上、深さ0.50mである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がるものである。堆積土はは大別２層に分層された。上層（層№１～３）は黒褐色粘土質シルトで、自然堆積である。下層（層№４）は黒褐色粘土で地山土をまばらに含み、機能時のもので自然堆積である。遺物は縄紋土器体部片、土師器の可能性のある小片が出土している。

38号土坑

10区中央、W153.5・N3.5付近の基本層序Ⅹ層で検出された。23号土坑と重複し、これより古い。平面形は隅丸方形で、長軸0.7m、短軸0.3m、深さ0.32mである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立



32号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒色 10YR2/1	シルト質粘土	地山粒をまばらに含む
2	黒色 10YR2/1	シルト質粘土	地山粒、ブロックをまばらに含む
3	黒色 10YR1.7/1	粘　土	地山粒を若干含む
4	黒褐色 10YR3/1	粘　土	地山ブロック・黒色土をまばらに含む、人為？
40号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	地山粒をまばらに含む
2	褐灰色 10YR4/1	シルト質粘土	地山粒をまばらに含む
42号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色 7.5YR3/1	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む
2a	黒色 10YR2/1	粘土質シルト	地山土、ブロックを多く含む、人為
2b	黒色 10YR2/1	粘土質シルト	細かい地山粒を斑状に含む
3	黒色 2.5Y2/1	粘土質シルト	
45号溝跡・46号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色 10YR2/2	粘　土	地山粒を若干含む　45 溝
2	黒褐色 10YR2/1	粘　土	地山粒を若干含む
3	褐灰色 10YR4/1	粘土質シルト	細かい地山粒を若干含む　46 土
4	黒褐色 10YR3/1	シ　ル　ト	地山粒を若干含む　ピット

48号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒色10YR2/1	シ　ル　ト	地山粒を若干含む
2	黒褐色10YR3/1	粘土質シルト	地山粒を若干含む
3	黒色10YR2/1	粘土質シルト	地山粒をまばらに含む
50号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色10YR3/1	シ　ル　ト	
2	黒色10YR1.7/1	シ　ル　ト	
53号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒色2.5YR2/1	粘土質シルト	
2	黒色7.5Y2/1	粘　土	地山粒を若干含む
3	褐灰色10YR4/1	粘土質シルト	地山粒をまばらに含む
60号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	褐灰色10YR4/1	粘土質シルト	地山粒を若干含む
2	黒褐色10YR3/1	シルト質粘土	焼土を少量、炭化物をまばらに含む
3	黒色10YR2/1	シルト質粘土	地山粒をまばらに含む
84号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色10Y3/1	シルト質粘土	細かい地山粒を若干含む
2	黒褐色10YR3/1	粘土質シルト	地山粒を多く、炭化物を若干含む
3	褐灰色10YR4/1	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む、機能時

第17図 土坑 (2)

ち上がるものである。堆積土は大別１層で黒色～にぶい黄褐色粘土で自然堆積である。遺物は出土していない。

40号土坑

11区西側、W134・N3.5付近の基本層序Ｘ層で検出された。39号井戸跡と重複し、これより新しい。平面形は隅丸方形で、長軸0.53m以上、短軸0.57m、深さ0.16mである。底面は皿状で、壁はゆるやかに立ち上がるものである。堆積土は大別２層で上層（層№１）は黒褐色粘土質シルトで自然堆積である。下層（層№２）は褐灰色シルト質粘土で機能時のもので自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

42号土坑

11区東側、W75・N2付近の基本層序Ｘ層で検出された。ピットと重複し、これより古い。平面形は隅丸方形で、長軸0.85m、短軸0.61m、深さ0.14mである。底面は凹凸があり、壁はゆるやかに立ち上がるものである。堆積土は大別２層で上層（層№１～２）は黒褐色シルト質粘土～黒色粘土質シルトで地山土を含むもので人為堆積である。下層（層№２）は黒褐色粘土質シルトで機能時のもので自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

46号土坑

12区中央付近、W49.5・Ｎ３付近の45号溝跡底面で検出された。45号溝跡と重複し、これより古い。平面形は隅丸方形で、長軸0.47m、短軸0.43m、深さ0.07mである。底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がるものである。堆積土は１層である。褐灰色粘土質シルトで機能時のもので自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

48号土坑

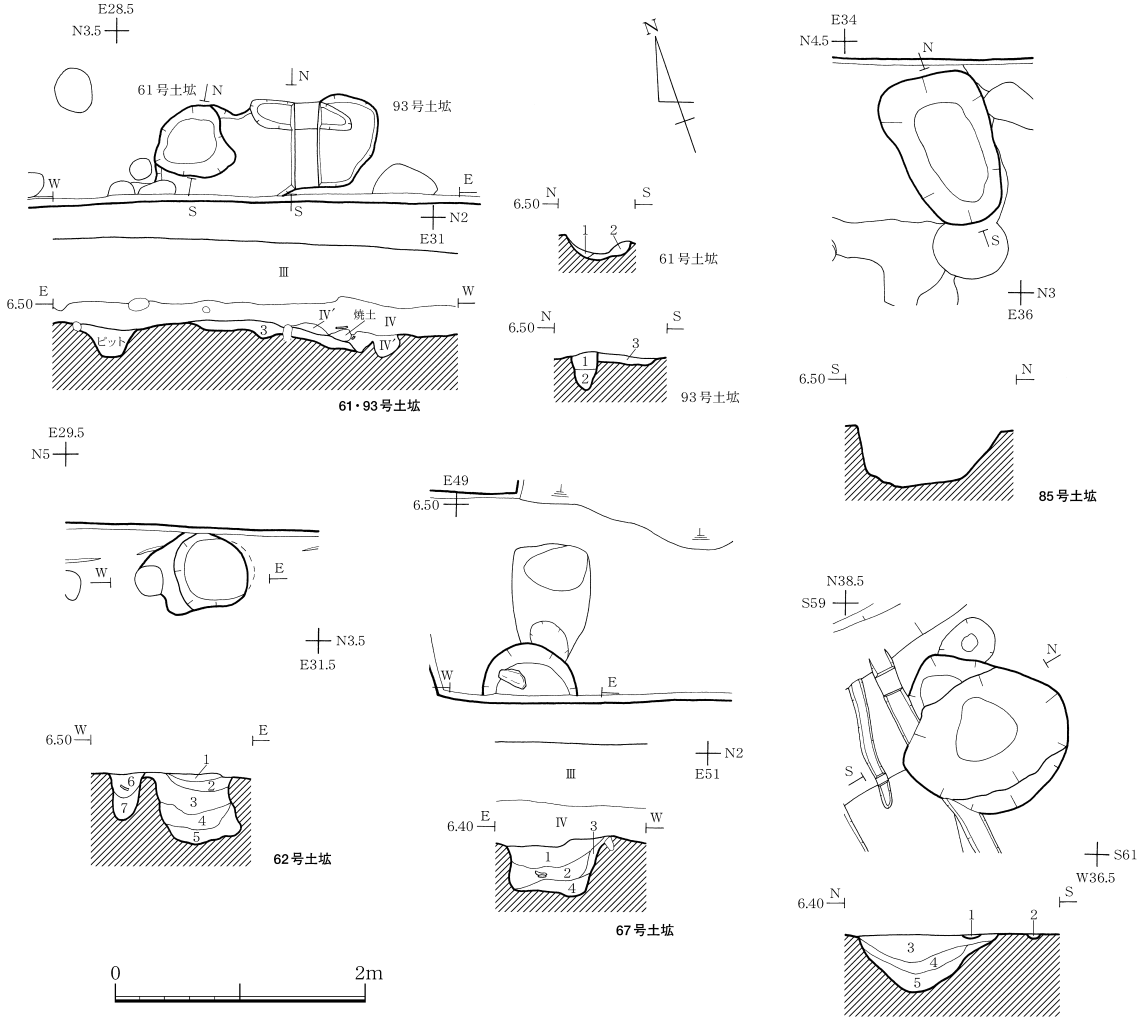
12区中央付近、W46・Ｎ４付近の基本層序Ｘ層で検出された。平面形は円形で、長軸0.57m、短軸0.54m、深さ0.16mである。底面は皿状であり、壁はゆるやかに立ち上がるものである。堆積土は大別１層である。黒色シルト～黒・黒褐色粘土質シルトで自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

50号土坑

12区中央付近、W36・N3.5付近の基本層序Ｘ層で検出された。平面形は溝状で、長軸1.23m、短軸0.30m、深さ0.20～0.10mである。底面は平坦であり、壁は西側では垂直に立ち上がり、東側ではゆるやかに立ち上がるものである。堆積土は大別１層である。黒褐色～黒色シルトで自然堆積と考えられる。形態から縄文時代のＴピットの可能性もあるが残存状況が悪いため不明である。遺物は出土していない。

53号土坑

12区中央、W35.5・Ｎ４付近の基本層序Ｘ層で検出された。平面形は円形で、長軸0.60m、短軸0.55m、深さ0.16mである。底面は平坦であり、壁は垂直に立ち上がるものである。堆積土は大別２層である。上層（層№１～２）は黒色粘土質シルト～粘土で自然堆積と考えられる。下層（層№３）は褐灰色粘土質シルトであり、機能時のものであり自然堆積と考えられる。遺物は須恵器甕体部片が出土しているが、小片のため図示できない。



61号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒色 10YR2/1	シルト質粘土	地山粒・炭化物を多く含むを若干含む
2	にぶい黄褐色 10YR3/1	シルト質粘土	地山粒をまばらに含む
93号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	地山粒若干含む　溝跡
2	褐灰色 10YR4/1	シ　ル　ト	地山粒をまばらに含む　溝跡
3	灰黄色 10YR4/2	シルト質粘土	地山土・黒色土を多く含む　93土
62号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	黄灰色 2.5Y4/1	シルト質粘土	炭化物を若干含む、廃絶時
2	黄灰色 2.5Y4/1	シルト質粘土	焼土・炭化物を下部に、地山粒をまばらに含む
3	黒褐色 10YR3/2	シルト質粘土	細かい地山粒を若干含む
4	黒褐色 10YR3/1	シルト質粘土	地山粒・焼土粒、ブロック・炭化物をまばらに含む
5	黒色 10Y2/1	シ　ル　ト　質	地山ブロックをまばらに含む

64号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒色 2.5Y2/1	質粘土シルト	地山ブロックをまばらに含む
2	褐灰色 10YR4/1	シルト質粘土	細かい地山粒をまばらに含む
3	黒褐色 10YR3/1	粘　土	地山粒を多く含む
4	黄灰色 2.5YR4/1	シルト質粘土	地山ブロックをまばらに含む、機能時
5	褐灰色 10Y2/1	シルト質粘土	地山粒をまばらに含む、機能時
67号土坑土層注記			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒色 10YR2/1	粘　土	炭化物・焼土粒を多く含む
2	黒褐色 10YR3/2	シルト質粘土	地山粒をまばらに含む
3	黒褐色 10YR3/1	粘　土	
4	黒色 10YR2/1	シルト質粘土	地山粒をまばらに含む
86号土坑			
№	土　色	土　性	備　考
1	灰色 5Y4/1	粘土質シルト	小溝
2	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	地山粒、小溝
3	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	86 土
4	黒褐色 2.5Y3/1	粘土質シルト	86 土
5	黒褐色 2.5Y3/2	粘土質シルト	黄灰色土粒含む　86 土

第18図 土坑 (3)

60号土坑

14区西端、Ｅ27・Ｎ４付近の基本層序Ｘ層で検出された。平面形は円形で、長軸2.05m、深さ0.24mである。底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がるものである。堆積土は大別１層である。褐灰色粘土質シルト～黒褐色・黒色シルト質粘土であり、自然堆積と考えられる。

遺物はロクロ土師器坏・高台付坏・甕、非ロクロ土師器甕、赤焼き土器坏、須恵器甕、鉄滓、炭化材、礫が出土している。いずれも破片であり、完形に復元できるものはない（第23図１～５）。

なお、60号土坑は１次調査の際、北側半分を確認しているが、掘り込みを行っていない。ロクロ土師器などが出土しており、第３次調査出土資料と接合を試みたが接合するものはなかった。

61号土坑

14区中央、Ｅ29・Ｎ2.5付近の基本層序Ｘ層、93号土坑堆積層上面で検出された。93号土坑と重複し、これより新しい。平面形は調査区壁際で検出されたため詳細は不明であるが、不整円形であると考えられる。長軸0.62m、短軸0.55m、深さ0.38mである。底面は皿状で壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は大別１層で黒色～にぶい黄褐色シルト質粘土であり自然堆積と考えられる。遺物は赤焼き土器坏、非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器坏・長胴甕が出土している（第23図11～12）。

62号土坑

14区中央、Ｅ30.5・Ｎ４付近の基本層序Ｘ層で検出された。ピットと重複し、これより古い。平面形は円形で西側には段が付く。長軸0.81m、円形の部分では0.60～0.55m、深さ0.59mである。底面は皿状で、壁は急に立ち上がるもので一部オーバーハングする。堆積層は大別２層である。上層（層№１～３）は黄灰色～黒褐色粘土質シルトで自然堆積である。下層（層№４～５）は黒褐色～黒色粘土質シルトであり、機能時のもので自然堆積と考えられる。

遺物はロクロ土師器坏・鉢・甕、非ロクロ土師器甕、赤焼き土器坏、焼けた礫、炭化物が出土している（第23図６～10）。

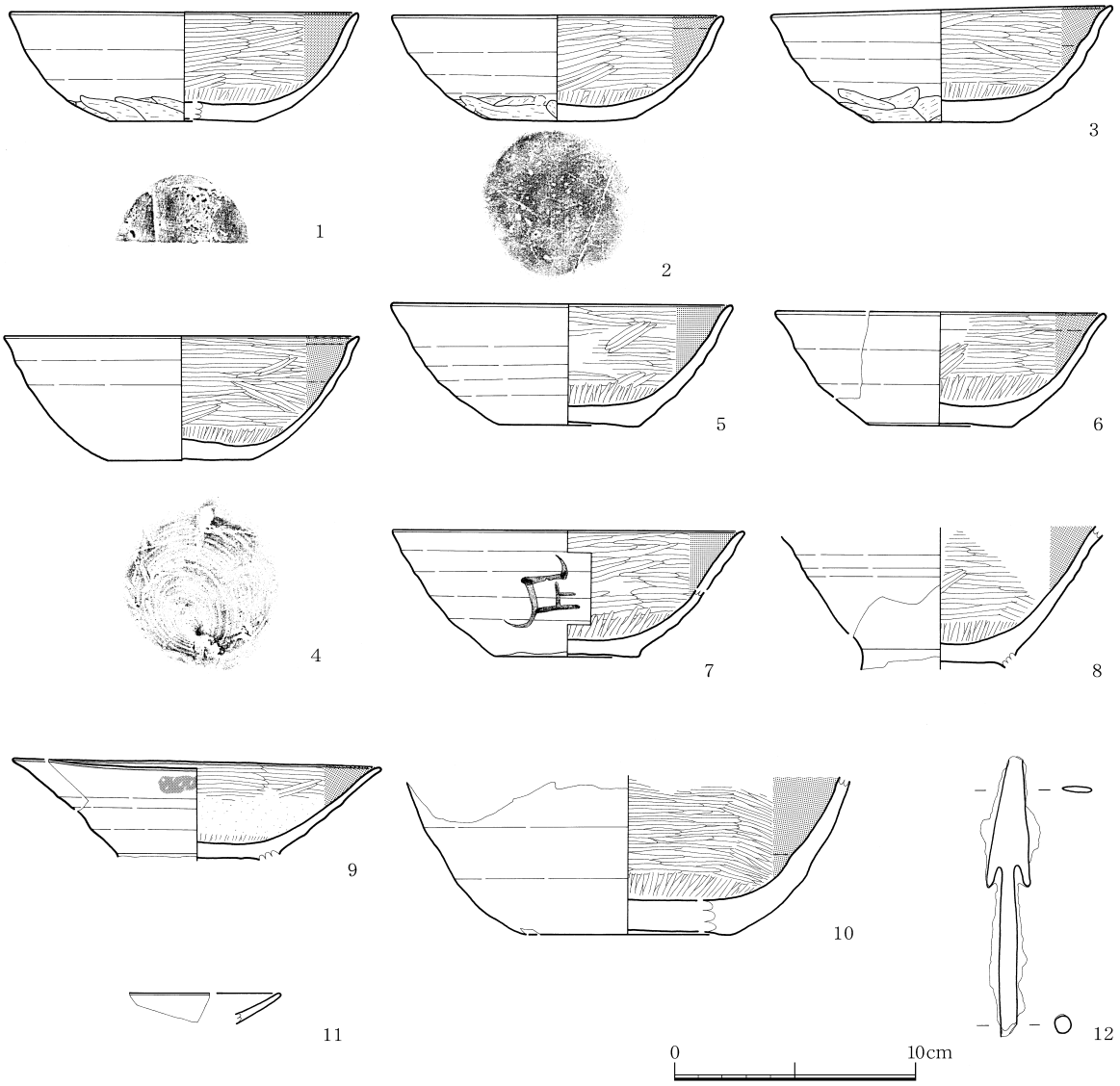
67号土坑

15区西端、Ｅ49.5・Ｎ2.5付近の基本層序Ｘ層で検出された。68号建物跡Ｐ６と重複し、これより新しい。平面形は円形である。長軸0.74m、深さ0.46mである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積層は大別１層である。黒褐色粘土～黒褐色シルト質粘土で西側方向から東側方向へ堆積するもので人為堆積と考えられる。炭化物や焼土粒を含むもので、出土した須恵器甕体部片（第20図９）は火を受けたものとみられる。

遺物はロクロ土師器坏・高台付坏・鉢・甕、非ロクロ土師器甕、赤焼き土器坏、須恵器坏・壺・甕、緑釉陶器皿、鉄鏃、スサ入り粘土塊、粘板岩が出土している（第19～21図）。

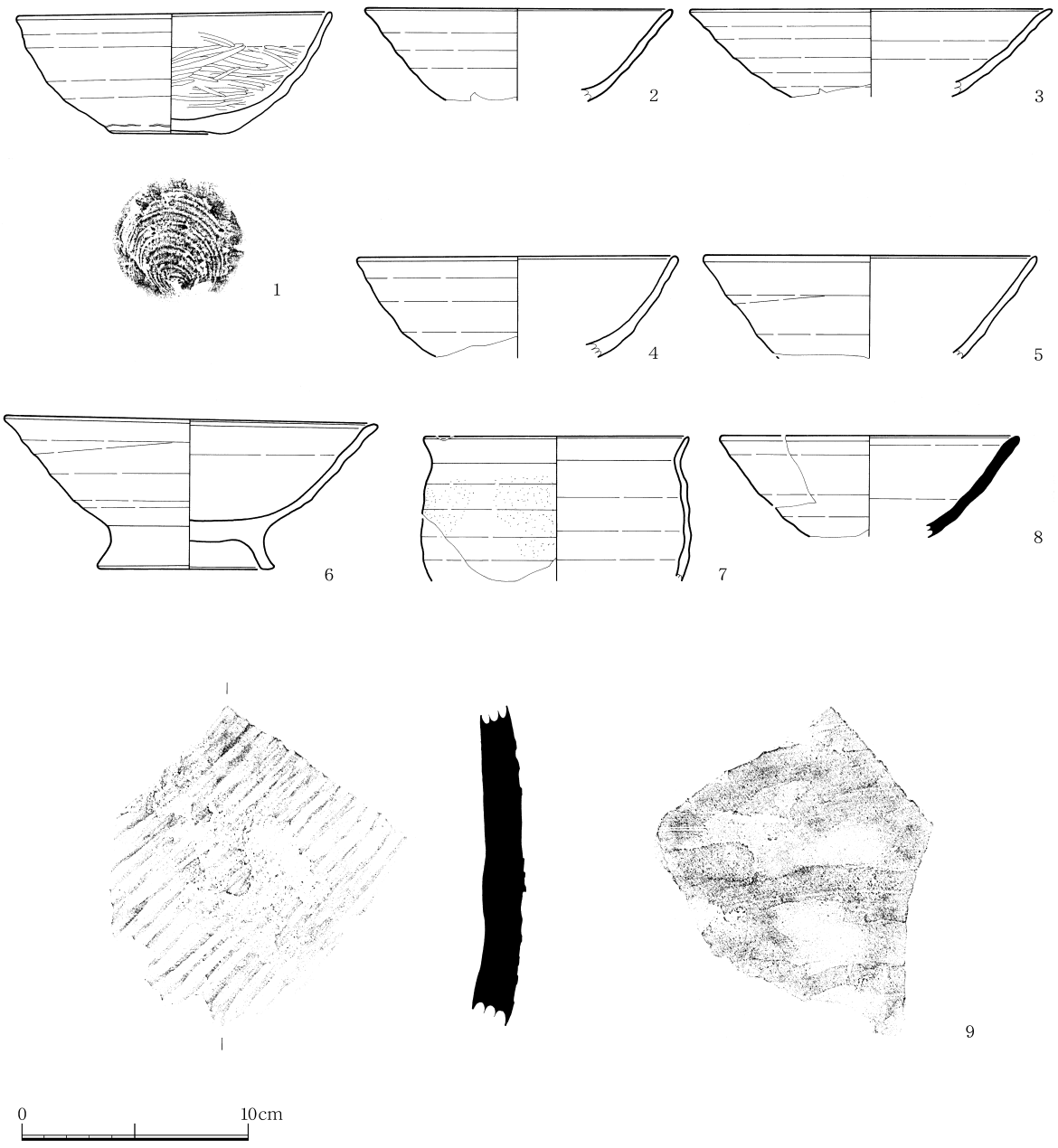
75号土坑

16区東側、Ｅ136・Ｎ３付近で基本層序Ｘ層で検出された。77号土坑、74号溝跡、73号溝跡と重複し、これらより古い。平面形は円形と考えられるが、他の遺構との重複が著しく判然としない。長軸2.62m、短軸1.50m以上、深さ0.40mである。底面は皿状で壁は北から東側ではやや急に、南から西側ではゆるやかに立ち上がるもので、南側の一部ではオーバーハングする。堆積土は大別２層で上層（層№



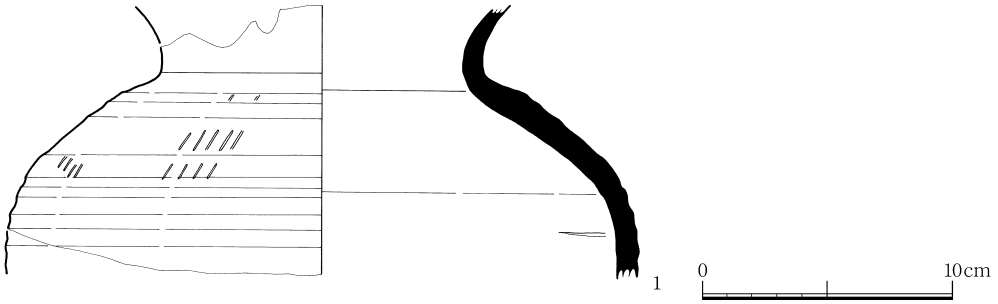
№	層位	遺物名	残存	器高	口径	底径	特徴	登録№	図版
1	堆積土	ロクロ土師器坏	½	4.6	14.4	6.2	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ、明赤褐（2.5YR5/6）、底：不明→手持ちヘラケズリ、内：ロクロナデ→ヘラミガキ（放射状、粗い）・黒色処理、黒（N1.5/　）	R017	12-1
2	堆積土	ロクロ土師器坏	完形	4.4	13.8	6.2	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ、明赤褐（2.5YR5/6）、底：回転糸切り→手持ちヘラケズリ、内：ロクロナデ→ヘラミガキ（放射状、粗い）・黒色処理、黒（N1.5/　）	R015	12-2
3	堆積土	ロクロ土師器坏	完形	4.8	14.6	5.9	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ、にぶい黄橙（7.5YR7/4）、底：不明→手許ちヘラケズリ、内：ロクロナデ→ヘラミガキ（放射状、粗い）・黒色処理、黒（N1.5/　）、	R016	12-3
4	堆積土	ロクロ土師器坏	完形	5.2	14.8	6.0	外：ロクロナデ、灰白（10YR8/4）、底：回転糸切り、内：ロクロナデ→ヘラミガキ（放射状、粗い）・黒色処理、黒（N1.5/　）	R014	12-4
5	堆積土	ロクロ土師器坏	ほぼ完形	5.0	14.0	5.9	外：ロクロナデ、にぶい黄橙（10YR7/3）、底：回転糸切り、内：ロクロナデ→ヘラミガキ（放射状、粗い）・黒色処理、黒（N1.5/　）	R012	12-5
6	堆積土	ロクロ土師器坏	⅔	4.8	13.6	6.1	外：ロクロナデ、にぶい赤褐（5Y5/4）～にぶい黄橙（10YR7/2）、底：回転糸切り、内：ロクロナデ→ヘラミガキ（放射状、粗い）・黒色処理、黒（N1.5/　）	R010	12-6
7	堆積土	ロクロ土師器坏	⅘	5.2	14.6	6.0	外：ロクロナデ、体部に墨書「□」、にぶい黄橙（10YR7/3）、底：回転糸切り、内：ロクロナデ→ヘラミガキ（放射状、粗い）・黒色処理、黒（N1.5/）	R018	12-7
8	堆積土	ロクロ土師器高台付坏	体～底部⅔	—	—	—	外：ロクロナデ、にぶい黄橙（10YR7/3）、底：回転糸切り、内：ロクロナデ→ヘラミガキ（放射状、粗い）・黒色処理、黒（N1.5/）	R011	12-8
9	検出面	ロクロ土師器高台付坏	口～底部⅗	—	15.0	—	外：ロクロナデ、にぶい黄橙（10YR7/3）、口縁部付近に黒色の汚れあり（油煙？）、底：回転糸切り、内：ロクロナデ→ヘラミガキ（放射状、粗い）・黒色処理、黒（10YR1.7/1）	R019	12-9
10	堆積土	ロクロ土師器鉢	体下～底部½	—	—	8.6	外：ロクロナデ、にぶい黄橙（10YR7/3）、底：ナデ？、内：ロクロナデ→ヘラミガキ（放射状、粗い）・黒色処理、黒（N1.5/　）	R009	—
11	堆積土	緑釉陶器皿	口縁部小破片	—	—	—	内外：ロクロナデ、濃緑色、胎土：密で堅い、灰（5Y4/1）、産地：京都周辺か	R006	12-13
12	堆積土	鉄鏃	先端及び柄の一部欠損	—	—	—	長：11.6以上、幅：最大1.6、最小：0.7、厚：最大0.7、最小：0.3、柄部：断面円形	R174	12-14

第19図 67号土坑出土遺物（1）



№	層　位	遺 物 名	残　存	器高	口径	底径	特　徴	登録№	図版
1	堆　積　土	赤焼き土器坏	完形	5.2	13.8	4.8	外：ロクロナデ、にぶい黄褐（10YR7/2）～褐灰（10YR5/1）、底：回転糸切り、内：ロクロナデ→一部ヘラミガキ、にぶい黄橙（10YR7/4）	R003	12-10
2	堆　積　土	赤焼き土器坏	口～体部	－	13.8	－	外：ロクロナデ、橙（5YR6/6）、内：ロクロナデ、橙（5YR6/6）	R023	－
3	堆　積　土	赤焼き土器坏	口～体部2/5	－	15.8	－	外：ロクロナデ、橙（5Y6/6）、内：ロクロナデ、橙（5Y6/6）	R022	－
4	堆　積　土	赤焼き土器坏	口～体部	－	14.0	－	外：ロクロナデ、内：ロクロナデ、	R021	－
5	堆　積　土	赤焼き土器坏	口～体部	－	14.6	－	外：ロクロナデ、内：ロクロナデ	R024	－
6	堆　積　土	赤焼き土器高台付坏	完形	6.7	16.2	7.6	外：ロクロナデ、橙（5YR6/6）、底：回転糸切り、内：ロクロナデ、橙（5YR6/6）	R013	12-11
7	堆　積　土	ロクロ土師器甕	体下～底部	－	11.6	－	外：ロクロナデ、灰褐（5YR7/2）、内：ロクロナデ、黒褐（5YR3/1）～明赤褐（5YR5/6）	R008	－
8	堆　積　土	須 恵 器 坏	頸～体部1/3	－	13.0	－	外：ロクロナデ、灰白（2.5Y7/1）、内：ロクロナデ、灰白（2.5Y7/1）	R007	－
9	堆　積　土	須 恵 器 甕	体部破片	－	－	－	外：平行タタキ、灰黄（2.5Y7/2）～黒褐（2.5Y3/1）、内：押さえ痕、ナデ、灰黄（7.5YR6/2）	R005	－

第20図 67号土坑出土遺物（2）



№	層　位	遺 物 名	残　存	器高	口径	底径	特　徴	登録№	図版
1	堆　積　土	須 恵 器 甕	頸～体上部½	－	－	－	外：平行タタキ→ロクロナデ、灰白（10Y7/1）、内：ロクロナデ、黄灰（2.5Y5/1）～灰白（10Y7/1）	R004	12-12

第21図 67号土坑出土遺物（3）

１）は黒色シルトであり自然堆積である。下層（層№２～３）は黒褐色シルト質粘土～褐灰色粘土で地山ブロックを多く含むもので、人為堆積と考えられる。遺物は出土していない。

77号土坑

16区東側、E136・N4.5付近で基本層序Ⅹ層で検出された。75号土坑より新しく、74号溝跡より古い。平面形は円形であり、長軸0.54m、短軸0.37m、深さ0.25mである。底面は皿状で壁はゆるやかに立ち上がる。基本層序Ⅹ層を底面とし、基本層序Ⅹ層及び75号土坑堆積層を壁とする。堆積土は１層で黒褐色シルト質粘土であり自然堆積である。遺物は出土していない。

80ａ・ｂ号土坑

21ａ区、E154・Ｓ３付近の基本層序Ⅵ層上面で確認された。平面形は隅丸方形であり、掘り直されいる。古い方をａ期、新しい方をｂ期とする。ａ期の具体的な規模は不明であるため、ｂ期を中心に説明する。長軸1.15m、短軸0.95m以上、深さ0.56mである。底面は皿状であるが凹凸が見られ、壁はやや急に立ち上がり、中位から外に開きながら立ち上がるものである。堆積土は大別２層に分層された。層№１～３はｂ期のもので黒褐色～黒色粘土質シルトで自然堆積と考えられる。ａ期では底面からゆるやかに立ち上がるもので一部オーバーハングする。堆積土は大別１層で層№４～８はａ期のもので黒褐色～褐灰色粘土質シルト～粘土で自然堆積と考えられる。

遺物はｂ期堆積土から非ロクロ土師器坏、甕が出土している（第23図13）。80号土坑は基本層序Ⅵから掘り込まれており近年のものと考えられ、これらの遺物は上層（層№１）からの出土のため、流れ込んだものと考えられる。

81号土坑

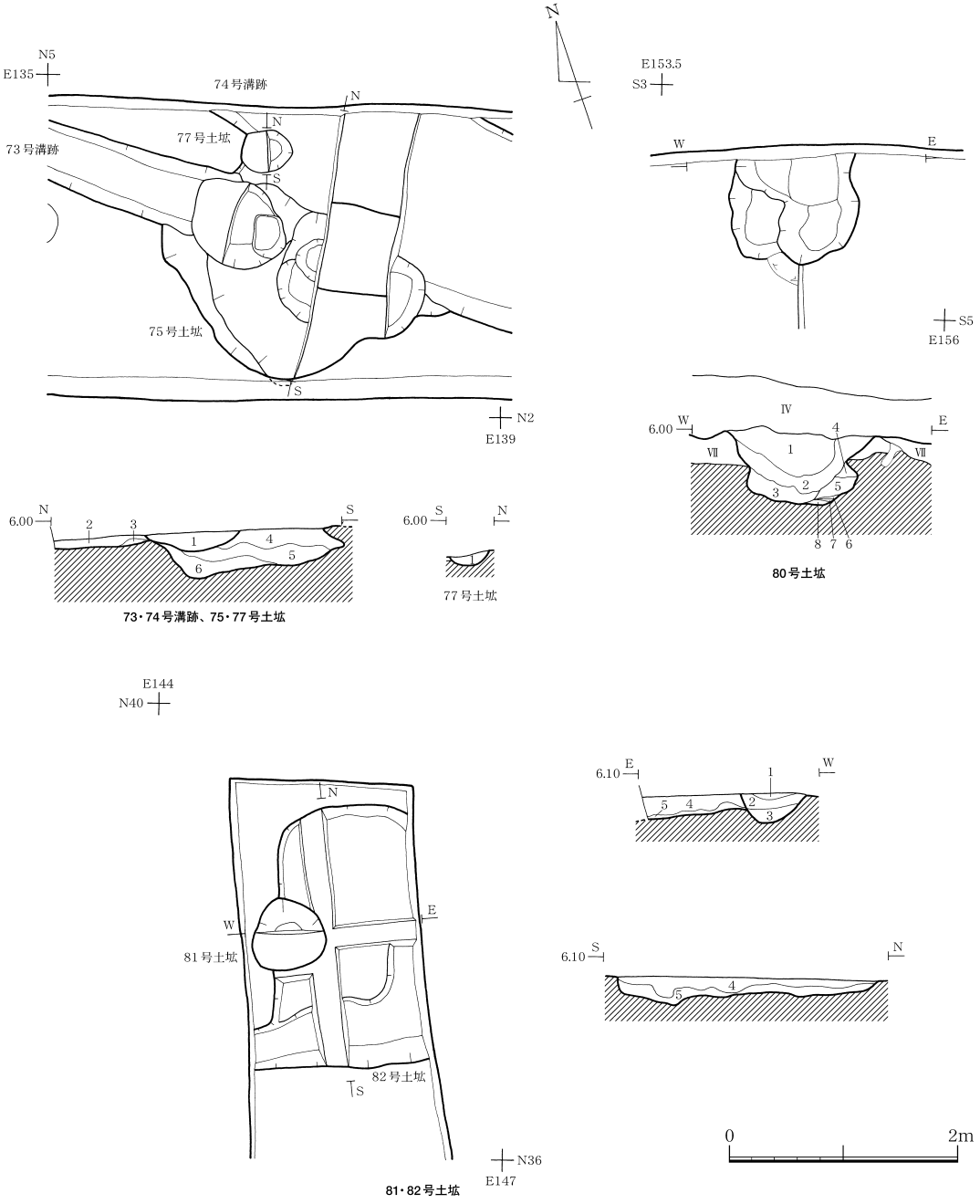
17区北端、W143・N38付近の基本層序Ⅹ層で検出された。82号土坑と重複し、これより古い。

平面形は円形を呈すると考えられる。長軸0.65m、短軸0.55m、深さ0.26mである。底面は皿状で

壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は大別１層で黒色粘土質シルトで自然堆積である。遺物は出土していない。

82号土坑

17区北端、W144・N37～39付近の基本層序Ⅹ層、81号土坑上面で検出された。81号土坑と重複し、



73・74号溝跡、75号土坑				
№	土　色	土　性	備　考	
1	黒色 10YR2/1	シルト質粘土	自然	73 溝
2	黒色 2.5Y2/1	粘土質シルト	自然	74 溝
3	黒褐色 10YR3/1	シルト質粘土	地山粒・ブロックをまばらに含む、機能時	
4	黒色 10YR1.7/1	シ　ル　ト	自然	75 土
5	黒褐色 10YR3/1	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む、人為	
6	褐灰色 10YR5/1	粘　土	地山ブロックを多く含む、人為	

77号土坑土層注記				
№	土　色	土　性	備　考	
1	黒褐色 10YR2/1	シルト質粘土	地山粒を若干含む、自然	

80号土坑				
№	土　色	土　性	備　考	
1	黒褐色 10YR1.7/1	粘土質シルト	地山粒を若干含む	a期
2	黒褐色 10YR2/1	粘土質シルト	地山粒を若干含む	
3	黒色 2.5Y2/1	粘土質シルト		
4	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト		b期
5	黒色 10YR2/1 灰黄褐色 10YR5/2	粘土質シルト 粘　土	}互層	
6	黒色 10YR2/1	シ　ル　ト		
7	褐灰色 10YR4/1	シルト質粘土		
8	褐灰色10YR5/1	粘　土	地山粒を帯状に含む	

81・82号土坑				
№	土　色	土　性	備　考	
1	黒色 10YR2/1	粘土質シルト	自然	81 土
2	黒褐色 10YR3/1	シ　ル　ト	細かい地山粒をまばらに含む、自然	
3	黒色 2.5Y2/1	シルト質粘土	自然	
4	黒色 10YR1.7/1	シルト質粘土	地山ブロックを多く含む、人為	82 土
5	黒色 2.5Y2/1	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む、人為	

第22図 土坑 (4)

これより新しい。平面形は調査区の関係から判然としないが、隅丸方形を呈すると考えられるが、西側は張り出す。長軸2.32m、短軸1.45m、深さ0.24～0.16mである。底面は南側に段が見られるほかは平坦で壁はやや急からゆるやかに立ち上がる。堆積土は大別１層で地山ブロックを多く含む黒色シルト質粘土～粘土質シルトで人為堆積である。遺物は出土していない。

84号土坑

14区西側、E28・N４付近の基本層序Ⅹ層で検出された。60号土坑と重複し、これより古い。平面形は隅丸方形であり、長軸0.60m、短軸0.40～0.35m、深さ0.24mである。底面は皿状で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は大別２層で上層（層№１～２）は黒褐色シルト質粘土～粘土質シルトで自然堆積と考えられる。下層（層№３）は褐灰色シルト質粘土であり、機能時の堆積であり自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

85号土坑

14区中央付近、E35.5･N４付近の基本層序Ⅹ層で検出された。63号竪穴住居跡と重複し、これより古い。平面形は隅丸方形で、長軸1.25m、短軸0.75m、深さ0.50mである。底面は平坦であり、壁はやや急に立ち上がるものである。堆積土は湧水が著しく詳細な記録を作成することが出来なかったが、大別２層に分層出来る。上層は黒色粘土質シルトである。下層は黒色土であり、地山土を多く含み堅く締まる。人為堆積の可能性が考えられる。

遺物は非ロクロ土師器坏・甕、ロクロ土師器甕、粘土塊が出土している。85号土坑及び63号竪穴住居跡堀方埋土出土の土師器は接合するものがあり、その他同一個体と考えられるものも含む。また、周辺の基本層からも同一個体と考えられる土師器破片が出土している。

86号土坑

23区西側、W37･S60付近の基本層序Ⅹ層で確認された。83号住居跡より新しく、小溝より古い。平面形は円形で、長軸1.42m、短軸1.36m、深さ0.54mである。底面は皿状で壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は大別２層で上層（層№１～２）は黒褐色粘土質シルトである。下層（層№３）は黒褐色粘土質シルトであり機能時の堆積と考えられる。いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

93号土坑

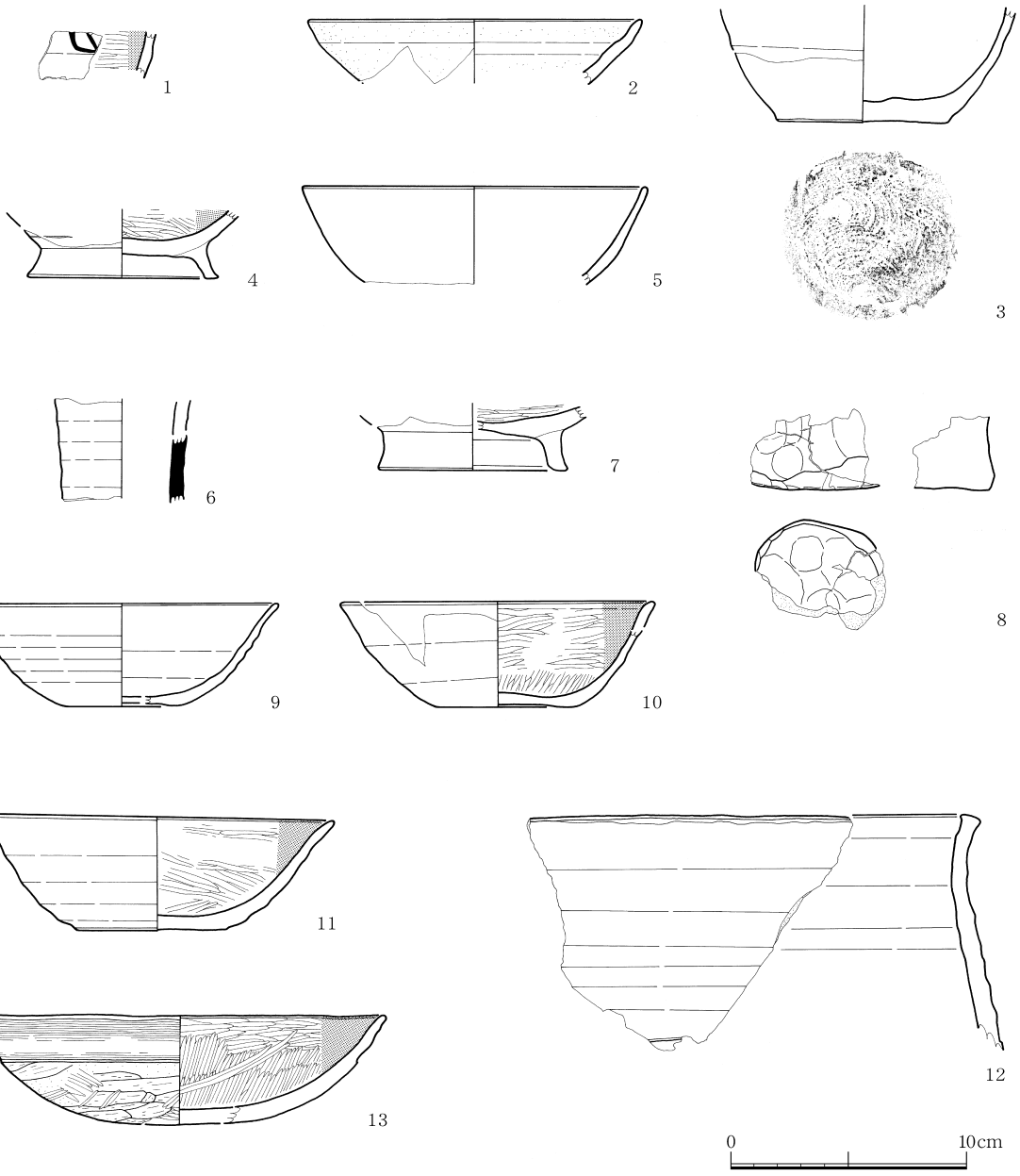
14区中央、E30･N２付近の基本層序Ⅹ層で検出された。61号土坑、溝跡と重複し、これらより古い。平面形は調査区壁際で検出されたため詳細は不明であるが、不整形であると考えられる。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は１層で灰褐色シルト質粘土質であり地山土・黒色土を多く含むもので人為堆積と考えられる。遺物は出土していない。

５．溝跡と出土遺物

溝跡は25条確認された。ほとんどの遺構が南北方向のもので約２m分を調査したに過ぎない。ここでは主な溝跡についてのみ説明し、他は表を用いて提示する。

２号溝跡

14区中央付近、N2.5～５・E66～74付近の基本層序Ⅹ層で検出した東西方向の溝跡である。5.2m



№	地区・層位	遺　物　名	残　存	器高	口径	底径	特　　徴	登録№	図版
1	60号土坑堆積土	ロクロ土師器坏	体部破片	－	－	－	外：ヨコナデ、にぶい黄橙（10YR6/4）、墨書「□」、内：ヘラミガキ・黒色処理、黒（N1.5/）	R189	13-1
2	60号土坑堆積土	赤焼き土器坏	口縁部⅓	－	14.0	－	外：ロクロナデ、浅黄橙（10YR8/3）、内：ロクロナデ、浅黄橙（10YR8/3）	R188	－
3	60号土坑堆積土	ロクロ土師器甕	底部	－	－	7.2	外：ロクロナデ、灰黄褐（7.5YR7/6）、底：回転糸切り、内：ロクロナデ、橙（7.5YR7/6）	R049	13-9
4	60号土坑堆積土	ロクロ土師器 高台付坏	体下～底部	－	－	8.0	外：ロクロナデ、にぶい黄橙（10YR6/3）、底：回転糸切り、内：ヘラミガキ、赤（10R5/6）～にぶい橙（7.5YR7/3）	R046	－
5	60号土坑堆積土	赤焼き土器坏	口縁部	－	14.4	－	外：ロクロナデ、浅黄橙（10YR8/3）、内：ロクロナデ、浅黄橙（10YR8/3）	R190	－
6	62号土坑堆積土	須恵器壺	頸部破片	－	－	－	外：ロクロナデ、オリーブ黒（7.5Y3/1）、内：ロクロナデ、オリーブ黒（7.5Y3/1）	R034	13-12
7	62号土坑堆積土	ロクロ土師器 高台付坏	底部	－	－	－	外：ヘラケズリ、にぶい黄橙（10YR7/4）、内：摩滅、にぶい赤褐（5YR5/4）	R027	－
8	62号土坑堆積土	土製支脚	破片	－	－	－	ナデ、にぶい黄橙（10YR7/2）	R054	13-14
9	62号土坑堆積土	赤焼き土器坏	½	4.3	13.0	4.8	外:ロクロナデ、橙（7.5YR7/6）～浅黄橙（7.5YR8/3）、底:回転糸切り、外:ロクロナデ、橙（7.5YR7/6）～浅黄橙（7.5YR8/3）	R047	－
10	62号土坑堆積土	ロクロ土師器坏	完形	4.5	13.2	7.0	外：ロクロナデ、にぶい黄橙（10YR6/3）、底：回転糸切り、内：ヘラミガキ・黒色処理、黒（N1.5/）	R044	13-6
11	61号土坑堆積土	ロクロ土師器坏	⅗	4.8	14.8	6.3	外：ロクロナデ、にぶい黄橙（10YR6/3）、底：回転糸切り、内：ヘラミガキ・黒色処理、黒（N1.5/）	R048	13-4
12	61号土坑堆積土	ロクロ土師器甕	口縁部破片	－	－	－	外：ロクロナデ、橙（7.5YR6/6）、内：ロクロナデ、橙（7.5YR6/6）	R051	－
13	80b号土坑堆積土	非ロクロ土師器坏	½	4.6	17.2	6.8	外：横ナデ、ヘラケズリ、一部ミガキ、灰白（2.5Y8/1）～灰黄（2.5Y7/2）、口縁部に黒色物質付着、内：ヘラミガキ・黒色処理、黒（N1.5/）	R001	13-5

第23図　60・61・62・80・84号土坑出土遺物

分を確認した。第１、２次調査時にも確認されており、全長120m以上になるものと考えられる。１次調査は14区北側の調査を実施しており、２号溝跡はゆるやかに弧をえがきながら、東側に伸びる（図版９）。方向はN－81°－Eである。溝跡は２時期を確認した。古い方をA期、新しい方をB期とする。なお、この区分は２次調査で３時期確認されたA～C期にそれぞれ対応する。

A期は幅はB期と重複するため判然としないが、上幅２m以内、下幅1.25mと考えられる。深さは0.55mである。底面は平坦で壁はやや急に立ち上がり、南側では中位から外側に開きながら立ち上がる。堆積土は１層（層№４）確認され、地山土を多く含む黒褐色粘土質シルトであり、自然堆積と考えられる。遺物は非ロクロ土師器甕破片が出土している。

B期は上幅1.84m、下幅0.20m、深さは0.55mである。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。底面レベルは２次調査では4.78m、３次調査では5.60mであることから、東側から西側に傾斜するものである。堆積土は大別１層（層№１～３）で、細かい地山粒を若干含む黒色～黒褐色粘土質シルトであり、自然堆積と考えられる。遺物は非ロクロ土師器坏・甕、ロクロ土師器坏、高台付坏、須恵器稜碗・甕、縄文土器、鉄滓が出土している。第24図に図示した遺物以外は破片のため図示することができなかった。

33号溝跡

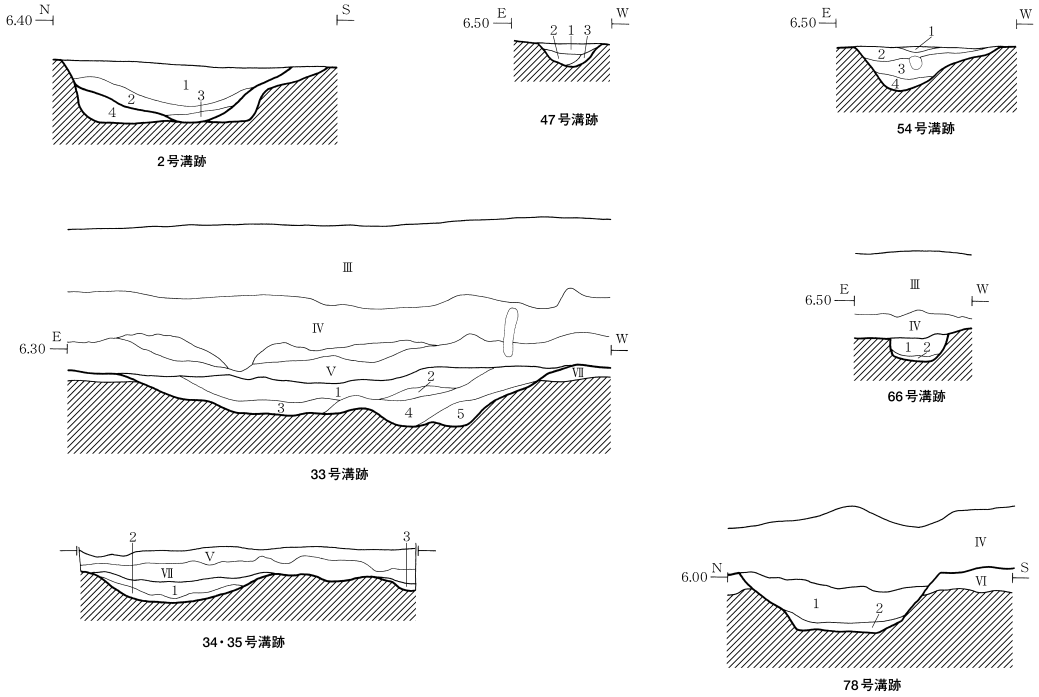
10区中央付近、N２～５・W157～160.5の基本層序Ⅶ層で確認された南北溝である。34号溝跡、溝跡と重複し、これらより新しい。3.2m分を検出した。最大幅2.7m、深さ0.48～0.31mである。断面形は段掘り状で壁はゆるやかに立ち上がる。方向はN－25°－Eである。堆積層は大別１層（層№１～６）で黒～黒褐色粘土質シルト～シルトであり、いずれも自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

34号溝跡

９区東端から10区中央付近、N３～５･W160～168の基本層序Ⅷ･Ⅹ層で確認された東西溝である。33号溝跡と重複し、これより古い。3.2m分検出した。上幅1.3～0.35m、深さ0.21～0.07mである。平面形はゆるやかに蛇行するもので、西端では土坑状に落ち込む。なお、９区東端では断面で確認している。底面は皿状で壁はゆるやかに立ち上がる。底面レベルは東側から西側からへ傾斜するものである。堆積土は大別１層（層№１～２）で黒褐色シルト～粘土質シルトであり、自然堆積と考えられる。遺物はロクロ土師器坏・高台付坏が出土しているが、いずれも破片のため図示することはできない。

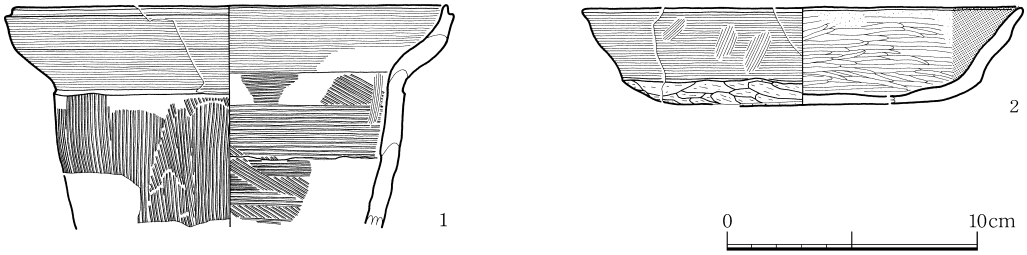
45号溝跡

12区中央、N２～4.5・W50～51の基本層序Ⅹ層で確認された南北溝である。ピットより古く、46号土坑、ピットより新しい。2.4m分検出した。上幅0.7～0.3m、深さ0.21～0.17mである。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。基本層序Ⅹ層を壁、底面とする。検出された長さが些少であるため、底面レベルの傾斜方向は不明である。N－17°－Eである。堆積土は大別１層（層№１～２）で黒褐色粘土であり、自然堆積と考えられる。遺物は須恵器坏、ロクロ土師器が出土しているが、いずれも破片のため図示することはできない。



2号溝跡				
№	土　色	土　性	備　考	
1	黒色 2.5Y2/1	粘土質シルト	細かい地山粒・地山ブロックを若干含む	b期
2	黒色 10YR1.7/1	シルト質粘土	細かい地山粒を若干含む	
3	黒褐色 2.5Y3/1	粘土質シルト	細かい地山粒を若干含む	
4	黒褐色 10YR3/1	シルト質粘土	細かい地山粒、地山ブロック、黒色土を多く含む	a期
33号溝跡				
№	土　色	土　性	備　考	
1	黒褐色 2.5Y3/1	粘土質シルト	地山粒をまばらに含む	
2	黒色 2.5Y2/1	粘土質シルト	炭化物、材を若干含む	
3	黒褐色 2.5Y3/1	シ　ル　ト	地山粒をまばらに含む	
4	黒色 10YR2/1	粘土質シルト	地山粒をまばらに含む	
5	黒色 2.5Y2/1	粘土質シルト		
34号溝跡				
№	土　色	土　性	備　考	
1	黒褐色 10YR2/2	シ　ル　ト		
2	黒褐色 10YR3/1	シルト質粘土	地山粒を若干含む	
35号溝跡				
№	土　色	土　性	備　考	
3	オリーブ黒色 5Y3/2	シルト質粘土		

47号溝跡			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒色 2.5Y2/1	粘　土	地山粒を若干含む
2	黒褐色 10YR3/1	粘　土	地山粒を若干含む
3	褐灰色 2.5Y3/1	粘　土	2層との境の3層の上面に、地山粒を縞状に含む
54号溝跡			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒色 2.5Y2/1	粘土質シルト	
2	オリーブ黒色 5Y3/1	シ　ル　ト	地山粒・黒色土粒を若干含む
3	オリーブ黒色 5Y3/2	粘土質シルト	
4	黒色 2.5Y2/1	粘　土	地山粒をまばらに含む。機能時
66号溝跡			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色 2.5Y3/1	シルト質粘土	細かい地山粒を若干含む
2	黒褐色 10YR3/1	粘土質シルト	地山粒を若干含む
78号溝跡			
№	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色 10YR3/1	シ　ル　ト	地山土をまばらに含む
2	褐灰色 10YR4/1	シ　ル　ト	地山粒を多く含む、機能時



№	地区・層位	遺　物　名	残　存	器高	口径	底径	特　徴	登録№	図版
1	2 b 溝・堆	非ロクロ土師器甕	口～体部	5.2	13.8	4.8	外：横ナデ、ハケメ、灰褐（7.5YR6/2）～にぶい橙（5YR6/4）、内：横ナデ、ハケメ、にぶい橙（5YR6/4）	R057	13-10
2	2 b 溝・堆	非ロクロ土師器坏	1/4	3.9	17.4	10.4	外：横ナデ、ヘラケズリ、にぶい黄橙（10YR7/4）、底：ヘラケズリ、にぶい黄橙（10YR7/4）、内：ヘラミガキ・黒色処理、黒（N1.5/）～にぶい黄橙（10YR7/3）	R055	－

第24図 溝跡と出土遺物

47号溝跡

12区中央、Ｎ２～4.5・W47.5～48.5の基本層Ｘ層で確認された南北溝である。ピットより新しい。3.2m分検出した。底面は皿状で壁はゆるやかに立ち上がる。検出された長さが些少であるため、底面レベルの傾斜方向は不明である。方向はＮ－15°－Ｅである。堆積土は大別２層で上層は（層№１～２）で黒色～黒褐色粘土であり、自然堆積と考えられる。下層は褐灰色粘土で機能時の堆積であり、自然堆積と考えられる。遺物は赤焼き土器坏、ロクロ土師器坏、非ロクロ土師器甕が出土しているが、いずれも破片のため図示することはできない。

54号溝跡

12区中央、N30.5～32・W2.5～4.5の基本層序Ｘ層で確認された南北溝である。ピットより古い。2.3m分検出した。上幅1.3～0.6m、深さ0.34～0.26mである。底面は平坦で壁はやや急に立ち上がる。底面レベルは南側から北側に傾斜する。方向はＮ－17°－Ｅである。堆積土は大別２層で上層（層№１～３）は黒色粘土質シルト～オリーブ黒シルト～粘土質シルトであり、自然堆積と考えられる。下層（層№４）は地山粒をまばらに含む黒色粘土であり、機能時の堆積で自然堆積と考えられる。遺物は非ロクロ土師器甕・坏が出土しているが、細片のため図示することはできない。

73号溝跡

16区東側、N2.5～５・Ｅ133.5～141.5の基本層序Ｘ層で確認された東西溝である。74号溝跡、75号土坑と重複し、これらより新しい。7.7m分を検出した。上幅0.70～0.50m、深さ0.18～0.07mである。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。底面レベルは西から東へ傾斜するものである。方向はＮ－56°－Wである。堆積層は１層で黒色シルト質粘土であり、自然堆積と考えられる。遺物は須恵器甕、ロクロ土師器坏が出土しているが、細片のため図示することはできない。

74号溝跡

16区東側、N2.5～５・Ｅ136.5～142.5の基本層序Ｘ層で確認された東西溝である。73号溝跡より古く、75号土坑、76号土坑より新しい。2.3m分を検出した。幅0.70m、深さ0.18～0.07mである。底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。底面レベルは西から東へ傾斜するものである。方向はＮ－46°－Wである。堆積層は１層で黒色シルト質粘土であり、自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

78号溝跡

17区南側、21a・b区、N2.5～９・Ｅ145～171の基本層序Ⅵ・Ｘ層で確認された東西溝である。26.5m分を検出した。幅1.94～1.0m、深さ0.48～0.14mである。21a区で基本層序Ⅵ層から掘り込まれることが確認された。したがって、78号溝跡は近年のものであると考えられる。底面は平坦で壁はやや急に立ち上がる。底面レベルは西から東へ傾斜するものである。方向はＮ－54°－Wである。堆積層は大別２層で上層（層№１）は黒褐色シルトであり、自然堆積と考えられる。下層（層№２）は地山粒をまばらに含む灰褐色シルトで機能時の堆積であり、自然堆積である。遺物は土師器、磁器が出土しているが、細片のため図示することはできない。

6．性格不明遺構

59号性格不明遺構

13区中央付近、N3.6、E15に位置する。基本層序Ⅹ層で確認した。平面形は円形で、規模は0.53m～0.45m、深さ0.04mの範囲で火を受けて赤変する。にぶい褐色シルトである。遺物は出土していない。

7．7～9区下層（Ⅷ層）出土遺物

遺跡範囲の西側付近に設けた７～９区では基本層序Ⅷａ～ｃ層（以下、下層と呼ぶ）で少量の土師器片や須恵器片、中世陶器、近世陶器とともに多量の縄文土器片、石器、剥片が出土した。特に８区中央付近から９区西側付近でそのほとんどが出土している。この地点付近が最も標高が低い地点（標高約5.40～5.60mほど）である。縄文土器片は早期から中期後半までと時間幅があるもので、また、同一層中より古代、中世、近世の遺物が出土することから、下層は旧河川あるいは湿地状の低地部分への近世頃の再堆積層と考えられる。

縄文土器はテン箱1.5箱分出土している。ここでは、特徴の判明する遺物について図示する。

第24～28図は縄文土器である。完形品はないが、いずれも深鉢であると考えられる。第24図１～20は口縁部片である。平口縁と波状口縁がある。無紋で粘土紐の積み上げ痕跡が明瞭なもの（７、８）、縄紋が施紋されるもの（１～６）、山形状の沈線が３段に渡り施紋されるもの（４）、格子状の粘土紐が貼付されるもの（12、18）、口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させ、上下から刺突により鋸歯状の装飾帯を作り、体部に山形状の粘土紐が貼付されるもの（14～17）、口縁部に渦巻状の突起が貼付されるもの（19、20）、粘土紐貼付後、粘土紐上に沈線が施され、口唇部に盲孔がみられるもの（13）がある。また、動物顔面形の突起を持つ縄文土器深鉢口縁部片がある（第28図１）。

第25図、第26図１～13は体部片である。胎土に繊維を含むもので縦走撚糸紋が施されるもの（第26図１）、縄紋が施されるもの（第26図１～10、12）、縄紋施紋の後２条の沈線が施されるもの（第26図９）、粘土紐（山形紋、幾何学紋など）が施されるもの（第25図）、縄紋施紋後に沈線と隆線で区画されるもので区画内は擦り消されるもの（第26図13）がある。

第26図14～21は底部片である。大型ものと小型のものがある。底部にはナデ調整のものと網代痕跡、スダレ状圧痕のものがみられる。

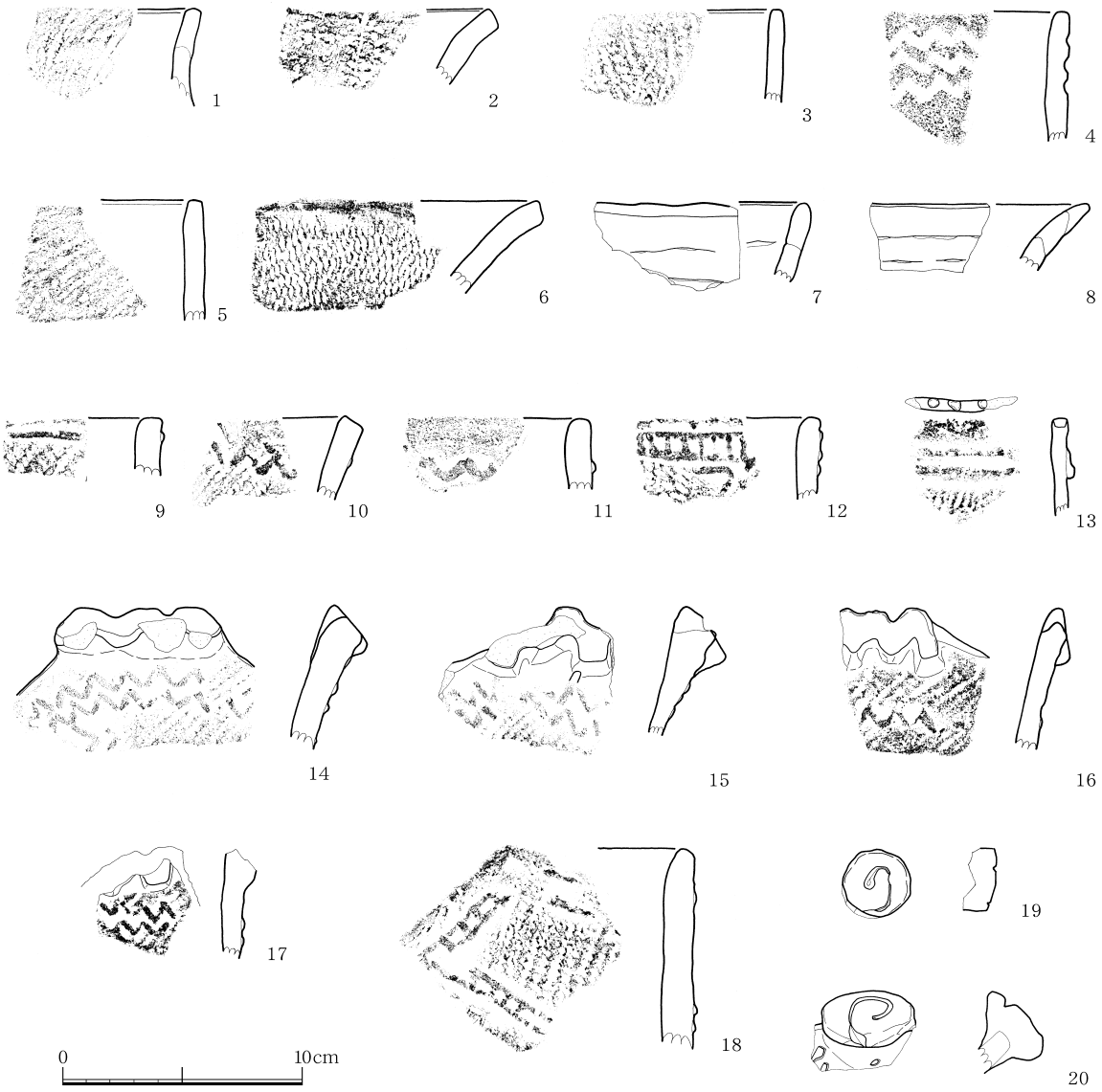
次に縄文土器の特徴や類例から編年的な位置を考える。

【早期後葉から前期前葉】

胎土に繊維を含むもので、縦走する撚糸紋が施されるものである（第27図１）。第１次調査でも口縁部片が１点出土している。これらは小片のため、詳細な位置づけは出来ないが胎土に繊維を含むことから概ね縄文時代早期後葉から前期前葉頃（山内清男：1929）に位置づけられるものと考えられる。

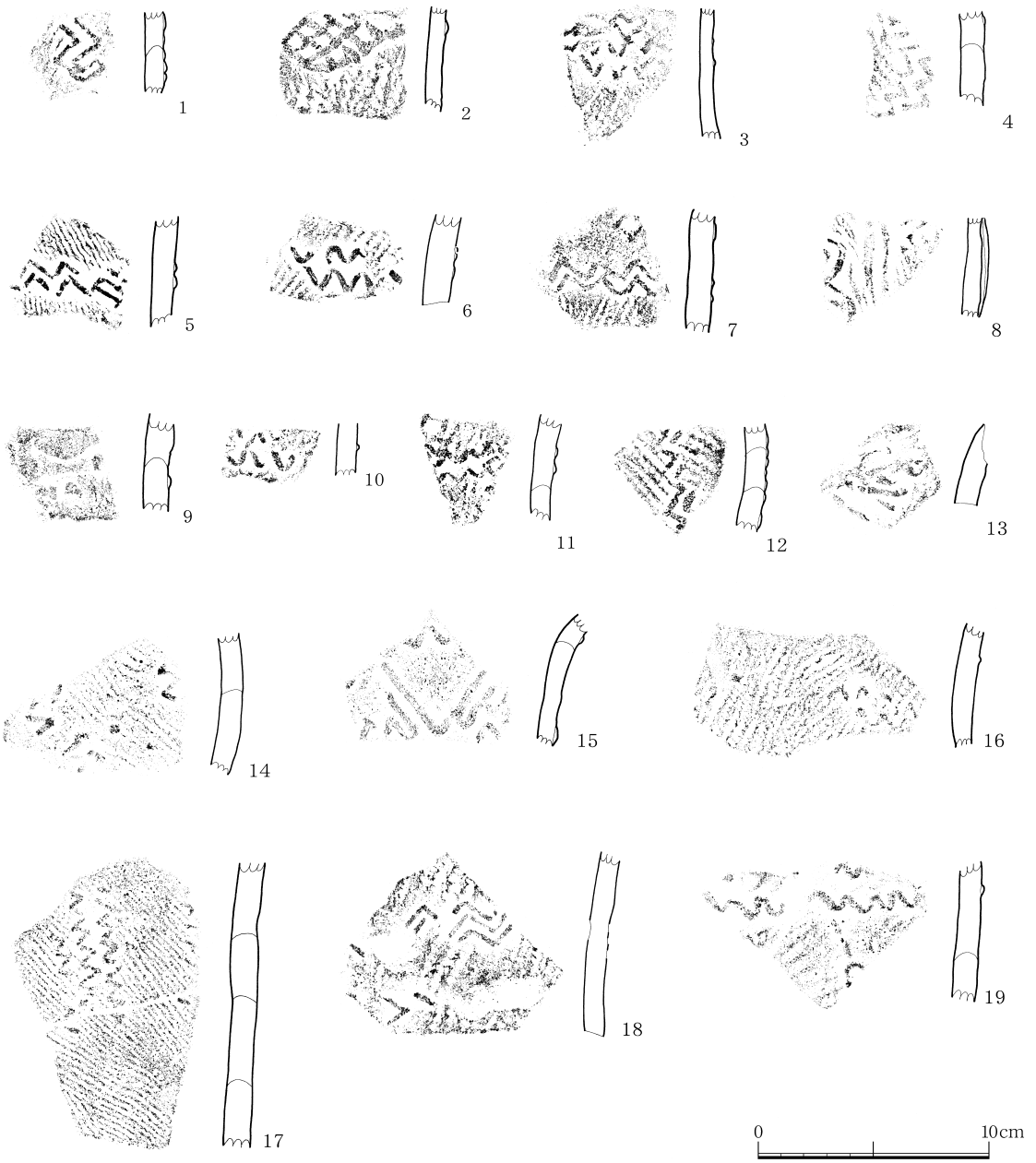
【前期後半】

地紋として斜縄紋が施され、粘土紐が貼り付けられるものである。文様は小波状の山形紋や梯子文、幾何文がみられる（第25図12、18、第26図２、15、19）。このような特徴をもつ土器は迫町糠塚遺跡（興野義一：1980）などで出土しており大木４式と考えられる（興野義一：1968）。



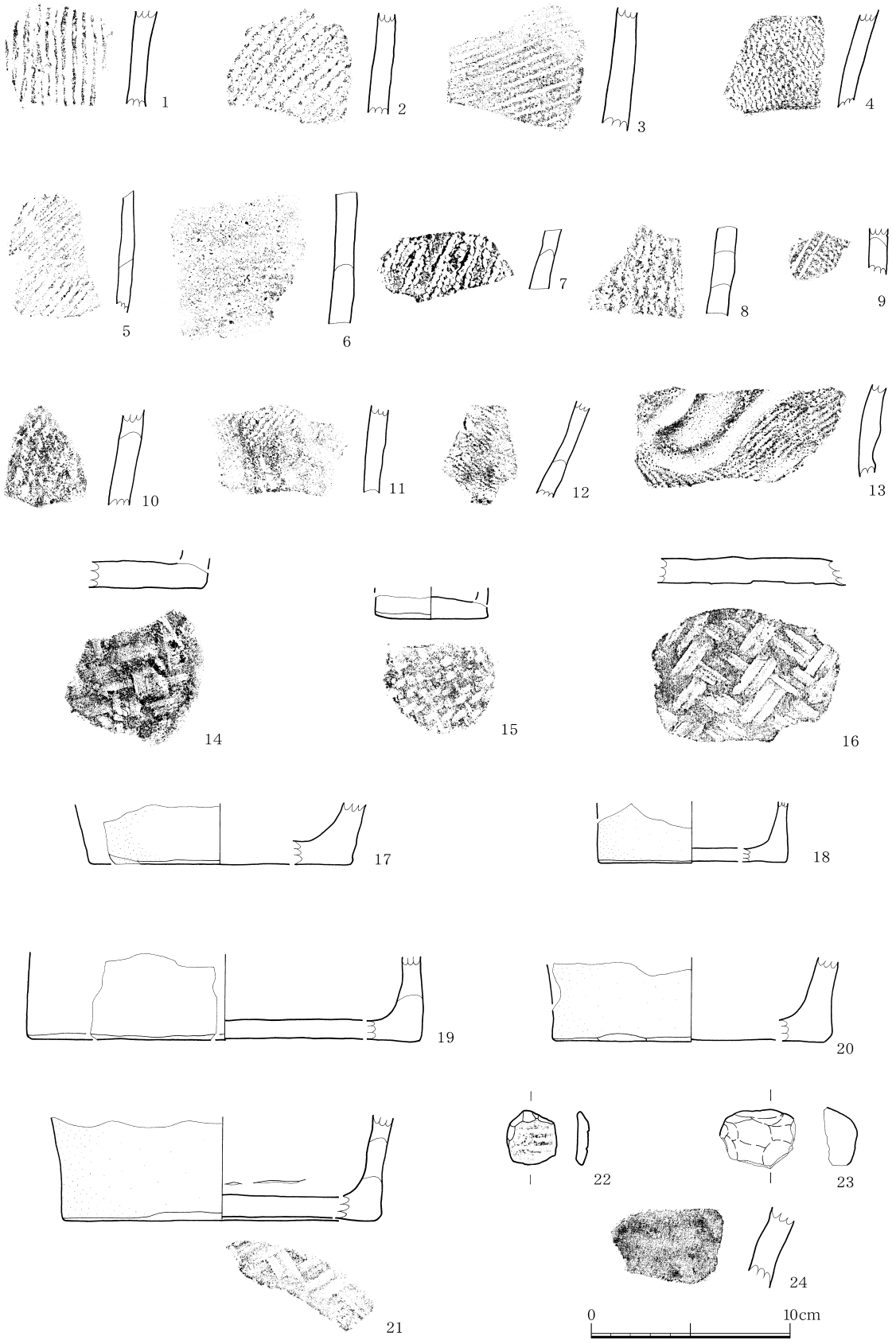
№	地区・層位	遺 物 名	残 存	特 徴	登録№	図版
1	8-9区間ベルト・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部：平口縁、外：ＬＲ縄文、にぶい黄橙（10YR6/8）、内：ヨコナデ、にぶい黄橙（10YR6/8）	R161	14-1
2	９区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部：平口縁、外：不明縄文、浅黄橙（10YR8/3）、内：摩滅、浅黄橙（10YR8/3）	R194	14-9
3	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部：平口縁、外：ＬＲ縄文、にぶい橙（7.5YR6/6）、内：摩滅、にぶい褐（7.5YR6/3）～にぶい橙（7.5YR6/4）	R082	－
4	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部：平口縁、外：山形状沈線（３条）、摩滅、赤褐（5YR4/6）、内：摩滅、褐（7.5YR4/4）～黒（7.5YR2/1）、軟質	R060	－
5	8-9区ベルト・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部：平口縁、外：ＬＲ縄文、にぶい橙（7.5YR6/4）、内：ヨコナデ、にぶい橙（7.5YR6/4）	R064	14-6
6	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部：平口縁、外：ＬＲ縄文、にぶい赤褐（5YR5/4）、内：ヨコナデ、にぶい橙（5YR6/3）	R076	14-30
7	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部：平口縁、外：無紋、粘土紐積上痕、摩滅、灰黄褐（10YR5/2）～灰褐（10YR4/1）、内：摩滅、橙（10YR6/6）	R080	14-7
8	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部：平口縁、外：無紋、粘土紐積上痕、摩滅、にぶい黄褐（10YR7/2）～橙（5YR7/6）、内：摩滅、浅黄橙（10YR8/3）	R061	14-3
9	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部：平口縁、外：ＬＲ縄紋、直線状粘土紐貼付、褐灰（7.5YR5/1）、内：摩滅、橙（7.5YR7/6）	R105	14-4
10	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部：平口縁、外：ＬＲ縄文、山形状粘土紐貼付（２段）、灰褐（5YR5/2）、内：摩滅、にぶい赤褐（5YR5/4）	R112	14-11
11	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部:平口縁、外:ナデ、山形状粘土紐貼付（２条単位、１条目は剥離）、灰黄褐(10YR5/2)、内:ヨコナデ、灰黄褐(10YR4/2)～にぶい橙(7.5YR7/4)	R109	14-2
12	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部：平口縁、外：ＬＲ縄紋、格子状粘土紐貼付、褐灰（10YR4/1）、内：摩滅、灰黄褐（10YR6/2）	R095	14-10
13	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部:平口縁、外:Ｌ撚糸紋(縦位)、粘土紐貼付の後半裁竹管状工具により沈線、口唇部に盲孔、褐灰(7.5YR4/1)～にぶい赤褐(5YR5/4)、内:摩滅、にぶい赤褐(5YR5/4)	R066	14-12
14	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部:波状口縁、外:鋸歯状装飾帯、ＬＲ縄紋、山形状粘土紐貼付(横、縦、２条)、にぶい黄橙(10YR7/2)、内:摩滅、灰黄褐(10YR6/2)	R107	14-13
15	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部:波状口縁、外:鋸歯状装飾帯、ＬＲ縄紋、山形状粘土紐貼付(横、２条)、灰褐(5YR5/2)～黒(10YR1.7/1)、内:ナデ、にぶい赤褐(5YR5/4)	R075	14-14
16	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部:波状口縁、外:鋸歯状装飾帯、ＲＬ縄紋、山形状粘土紐貼付(横、１条？)、にぶい黄褐(10YR7/3)、内:摩滅、にぶい黄褐(10YR7/3)	R074	14-18
17	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部:波状口縁、外:鋸歯状装飾帯、ＬＲ縄紋、山形状粘土紐貼付(横、２条)、にぶい黄褐(10YR7/3)～褐灰(10YR4/1)、内:摩滅、にぶい(10YR6/3)	R108	14-17
18	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部:波状口縁、外:ＬＲ縄文、菱形に格子状粘土紐を貼付、にぶい黄褐(10YR7/4)、内:ヨコナデ、にぶい黄褐(10YR6/4)内:摩滅、にぶい(10YR6/3)	R078	14-19
19	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	渦巻状突起、浅黄橙（10YR8/3）～灰褐（10YR6/1）	R111	14-16
20	８b区・下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	外：渦巻状突起、粘土紐貼付、にぶい黄橙（10YR7/4）、内：ナデ、にぶい黄橙（10YR7/4）	R101	15-2

第25図　７～９区下層（基本層序Ⅷ層）出土遺物（1）



№	地区・層位	遺　物　名	残　存	特　　徴	登録№	図版
1	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：LR縄紋カ、雷光状粘土紐貼付、黄灰（2.5T4/1）～浅黄橙（10YR8/4）、内：摩滅、にぶい黄橙（10YR7/4）	R106	14-15
2	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：LR縄文、楕円形の格子状粘土紐貼付、にぶい黄橙（10YR7/3）、内：摩滅、灰黄褐（10YR6/2）	R083	14-20
3	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：LR縄紋、山形状粘土紐貼付（横、縦、2条？）、にぶい黄橙（10YR7/3）、内：横ナデ、にぶい黄橙（10YR7/4）	R146	－
4	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：LR縄紋、山形状粘土紐貼付（横、縦、2条？）、明黄褐（10YR7/6）、内：摩滅、にぶい黄橙（10YR7/2）	R156	14-22
5	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：R撚糸紋、山形状粘土紐貼付（横、2条）、にぶい黄橙（10YR7/3）、内：ナデ、灰黄（2.5Y7/2）	R065	14-23
6	8-9区ベルト・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：LR縄紋、山形状粘土紐貼付（横、2条）、褐灰（10YR5/1）、内：横ナデ、にぶい黄橙（10YR7/3）	R119	14-24
7	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：R撚糸紋カ、山形状粘土紐貼付（横、2条）、褐灰（10YR4/1）、内：摩滅、にぶい黄橙（10YR6/3）	R079	14-25
8	8-9区ベルト・下層	縄文土器深鉢	体　部	外:L撚糸紋(縦位),山形状粘土紐貼付(縦、2条),直線状粘土紐貼付(縦、1条)の後半裁竹管状工具による沈線,にぶい赤褐(10YR4/3),内:摩滅,暗褐(10YR3/3)～黒褐(10YR3/1)	R062	14-26
9	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：無紋、粘土紐積上痕、粘土紐貼付、灰黄褐（10YR6/2）、内：摩滅、灰黄褐（10YR5/2）	R077	14-27
10	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：ナデカ、山形状粘土紐貼付（横、2条）、にぶい黄橙（10YR7/2）、内：横ナデ、灰黄（2.5Y6/2）	R072	14-28
11	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：不明縄紋、山形状粘土紐貼付、にぶい黄橙（10YR7/3）、内：摩滅、浅黄橙（10YR8/3）	R059	14-21
12	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：RL縄紋、山形状粘土紐貼付（縦、2条）、浅黄橙（10YR7/4）、内：灰黄褐（10YR7/2）	R155	14-25
13	8-9区ベルト・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：LR縄紋カ、粘土紐貼付、黒褐（2.5Y3/1）～浅黄（2.5Y7/3）、内：横ナデ、黄灰（2.5Y7/3）	R070	14-8
14	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：LR縄紋、山形状粘土紐貼付（縦）、浅黄橙（10YR8/3）、内：摩滅、にぶい黄橙（10YR7/2）	R147	14-36
15	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：LR縄紋、山形状粘土紐貼付、にぶい黄橙（10YR7/3）、内：摩滅、にぶい黄橙（10YR6/3）	R084	14-31
16	8-9区ベルト・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：LR縄紋、山形状粘土紐貼付（黄、2条）、赤灰（2.5YR4/1）、内：摩滅、灰黄褐（10YR6/2）	R073	14-37
17	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：R撚糸紋、山形状粘土紐貼付（縦、3条）、浅黄橙（10YR8/3）、内：ナデ、にぶい黄橙（10YR7/2）	R093	14-32
18	8b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：LR縄紋、山形状粘土紐貼付（横、縦、3条）、浅黄（2.5Y7/2）、内：摩滅、黄灰（2.5YR7/2）	R159	14-38
19	8-9区ベルト・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：LR縄紋、山形状粘土紐貼付（横、縦）、にぶい黄橙（10YR7/2）、内：横ナデ、褐灰（7.5YR5/1）	R071	14-40

第26図　7～9区下層（基本層序Ⅷ層）出土遺物（2）



第27図　７～９区下層（基本層序Ⅷ層）出土遺物（3）

№	地区・層位	遺　物　名	残存	特　　徴	登録	図版
1	８b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：R撚糸紋（縦位）、浅黄橙（7.5YR8/3）、内：横ナデ、灰白（10YR8/2）、胎土：繊維を含む	R086	14-23
2	8-9区間ベルト・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：ＬＲ縄紋、にぶい褐（7.5YR5/4）～褐灰（7.5YR4/1）、内：摩滅、灰黄褐（10YR6/2）～褐灰（10YR4/1）	R069	14-35
3	８b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：附加条紋、にぶい黄褐（10YR7/4）～黒褐（2.5YR3/1）、内：摩滅、黄灰（2.5Y6/1）	R094	－
4	8-9区間ベルト・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：ＲＬＲ縄文、にぶい橙（7.5YR6/4）、内：横ナデ、灰褐（7.5YR5/2）	R067	14-34
5	８a区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：ＬＲ縄文、褐灰（7.5YR5/1）～黒褐（7.5YR3/1）、内：ナデ、にぶい赤褐（5YR4/4）	R133	14-39
6	7区・廃土	縄文土器深鉢	体　部	外：摩滅、浅黄（2.5Y8/3）、内：横ナデ、黒（2.5Y2/1）	R171	14-41
7	８b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：ＬＲＬ縄文、灰黄褐（10YR6/2）、内：横ナデ、にぶい黄橙（10YR7/3）	R110	－
8	８b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：ＬＲ縄文カ、にぶい黄橙（10YR7/2）、内：摩滅、にぶい黄橙（10YR7/2）	R152	－
9	８b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：Ｌ撚糸紋→平行沈線（２条）、内：摩滅、浅黄橙（10YR8/3）	R153	－
10	８b区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：Ｌ縄文カ、にぶい黄橙（10YR7/4）、内：横ナデ、にぶい黄褐（10YR5/3）～褐灰（10YR5/1）	R145	－
11	8-9区間ベルト・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：ＬＲ縄紋、ケズリ、にぶい赤褐（5YR5/4）、内：ナデ、黒（10YR1.7/1）	R068	－
12	8-9区間ベルト・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：Ｌ縄紋、ナデ、にぶい赤褐（5YR4/3）～褐灰（5YR4/1）、内：ナデ、灰褐（5YR4/2）	R149	－
13	９区・下層	縄文土器深鉢	体　部	外：ＬＲ縄紋、隆線・沈線による区画（区画内は縄紋スリ消し）、灰黄褐（10YR6/2）、内：摩滅、明赤褐（2.5YR5/6）	R096	14-42
14	８b区・下層	縄文土器深鉢	底　部	外：摩滅、灰黄褐（10YR5/2）、底：網代痕跡、灰黄褐（10YR5/2）、内：ナデ、にぶい黄橙（10YR6/2）	R115	14-44
15	８b区・下層	縄文土器深鉢	底　部	外：横ナデ、灰黄褐（10YR6/2）、底：スダレ状圧跡、灰黄褐（10YR6/2）、内：ナデ、にぶい黄橙（10YR6/3）、底径：5.6	R092	14-43
16	８b区・下層	縄文土器深鉢	底　部	底：網代痕跡、灰黄（2.5Y6/2）、内：ナデ、灰黄（2.5Y6/2）	R089	14-45
17	８b区・下層	縄文土器深鉢	底　部	外：摩滅、明赤褐（5YR5/6）、底：ナデ、にぶい黄橙（10YR8/3）、内：摩滅、黄灰（2.5Y6/1）～黒褐（2.5Y5/3）、底径：13.0	R114	－
18	８b区・下層	縄文土器深鉢	底　部	外：摩滅、にぶい黄橙（10YR6/3）、底：ナデ、にぶい黄橙（10YR6/3）、内：ナデ、灰黄褐（10YR5/2）、底径：9.4	R098	－
19	８b区・下層	縄文土器深鉢	底　部	外：摩滅、明黄褐（10YR7/6）、底：ナデ、明黄褐（10YR7/6）、内：ナデ、褐灰（10YR4/1～5/1）、底径：19.6	R081	－
20	８b区・下層	縄文土器深鉢	底　部	外：摩滅、橙（5YR6/6）、底：摩滅、橙（5YR6/6）、内：摩滅、橙（5YR6/6）、底径：13.4	R091	－
21	８b区・下層	縄文土器深鉢	底　部	外：摩滅、明黄褐（10YR7/6）、底：網代痕跡、明黄褐（10YR7/6）、内：横ナデ、黒色物質付着、にぶい黄橙（10YR6/3）、底径：15.4	R085	－
22	不明・廃土	土器片製円板	完　形	長：2.5、幅：2.5、厚：0.5、色調：黄灰（2.5Y5/1）～灰黄（2.5Y7/2）、素材：縄文土器（撚糸紋）	R176	－
23	８b区・下層	土　製　品	破　片	長：(2.9)、幅：(3.7)、厚：(1.6)、色調：橙（5YR6/6）～褐灰（10YR5/1）、ナデ、穿孔（？）	R088	－
24	８b区・下層	中世陶器甕	体　部	外：ロクロナデ、灰褐（10YR6/2）、内：ロクロナデ、灰黄褐（7.5YR4/2）、産地：東海系	R104	－

第１表　7～9区下層（基本層序Ⅷ層）出土遺物（3）観察表

№	地区・層位	遺　物　名	残　存	特　　徴	登録№	図版
1	８b区下層	縄文土器深鉢	口 縁 部	口縁部：波状口縁？、動物顔面形突起、ＬＲ縄紋、ナデ、オサエ痕	R120	15-1

第28図　7～9区下層（基本層序Ⅷ層）出土遺物（4）

鋸歯状の装飾帯をもつもので、体部は地紋に斜縄紋の後横走あるいは縦走する山形文を呈する粘土紐が２段あるいは３段にわたり貼付されるもの（第25図14～17、第26図３～６、10～14、16～18）や雷光状のもの（第26図１）のものがある。また、山形文が沈線で施されたものもある（第25図４）。このような特徴をもつ土器は迫町糠塚遺跡、南方町長者原遺跡などで出土しており、また、七ヶ浜町大木貝塚など仙台湾周辺の諸遺跡でも出土するもので、大木５式と考えられる（興野：1969）。また、大木５式には第25図７、８のような無紋で粘土紐積み上げ痕が明瞭なものが伴うとされる。

粘土紐貼付後、粘土紐上に沈線が施され、口唇部に盲孔がみられるもの（第25図13）や地紋に縦走する撚糸紋が施され、その後縦走する直線紋、山形紋等の粘土紐が貼付される。粘土紐上は半裁竹管状の工具による沈線が施される（第26図８）。このような特徴を持つ土器は岩手県北上市滝ノ沢遺跡（北上市教育委員会：1980）で出土しており、大木５式と考えられるものである。

動物顔面形の突起が突く口縁部片は胎土や縄紋原体が上記の大木４～５式期のものと類似している。特徴は頭部に耳あるいは目を思わせる２個の円柱状の突起がみられ、この突起の頂部は指オサエにより平坦となる。また、中央に鼻や口を表す盛り上がりが見られるが、その周囲には目などを表現し

たものは見られない。動物顔面は土器の外側を向くものである。クマあるいはカエルを表現した可能性があり、特に２個の円柱状の突起が目を表現したものであれば、カエルの可能性が高いと考えられるが、断定は避けたい。

動物顔面形の突起がつく土器は内側を向くものが多く、また縄紋時代中期以降弥生時代までみられるものである（註１）。宮城県内で動物顔面あるいは獣面が外側を向く例としては豊里町沼崎山遺跡包含層出土のカエルと比定された大木６式のもの（佐々木・遊佐：1980、東北歴史資料館：1996）や白石市小梁川遺跡包含層出土のものがあげられる（宮城県教育委員会：1986）（註２）。

【中期末葉】

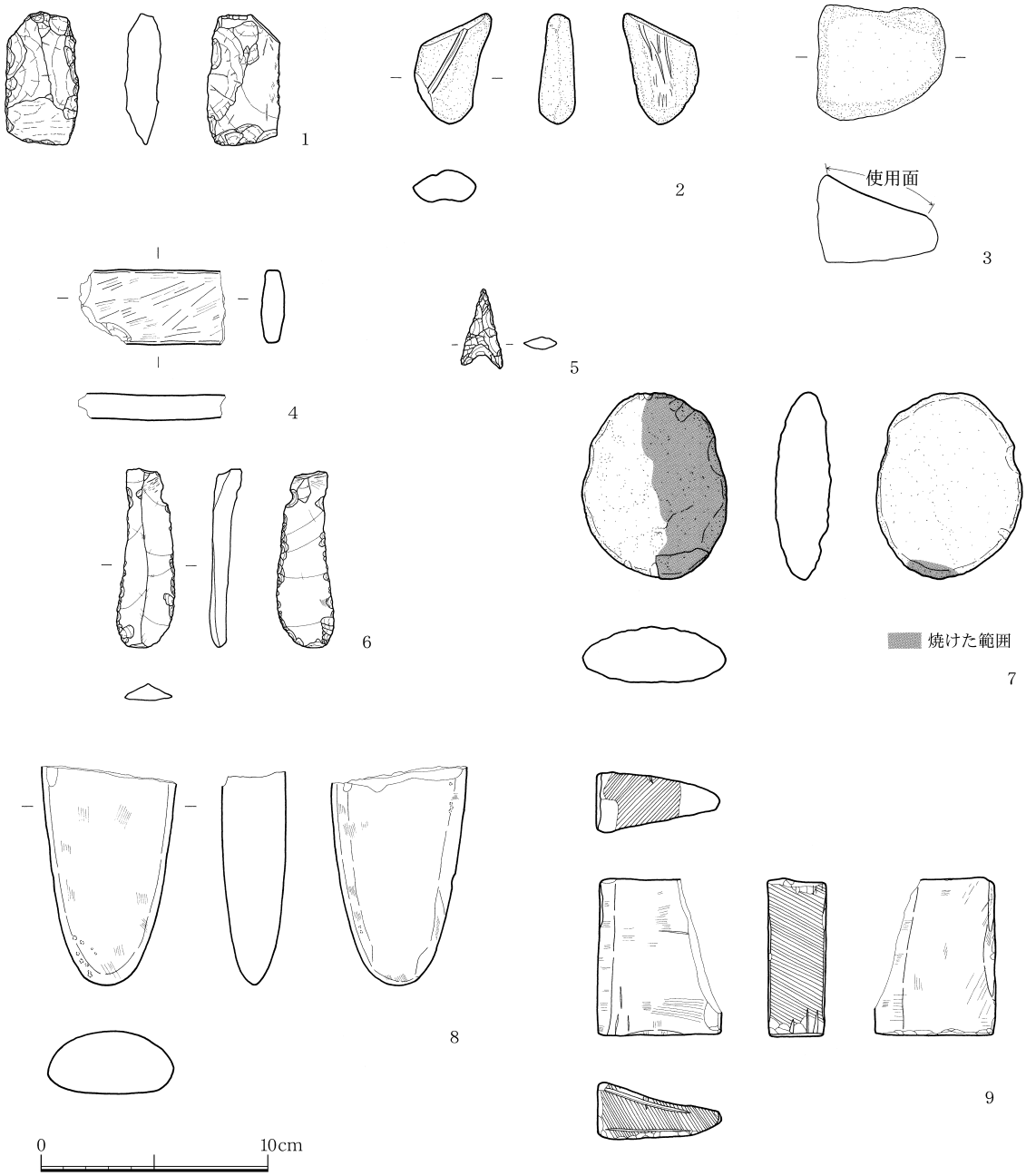
縄紋施紋後に沈線と隆線で区画されるもので区画内は擦り消されるもの（第26図13）がある。内面は摩滅しており調整は不明である。大木10式と考えられる（興野義一：1984）。

第26図22、23は土製品である。22は縄文土器を素材とした土器片製円板である。縄紋土器鉢体部片が転用されている。23は約1/3のみが残存するもので、穿孔されたと見られる部分も若干残存することから土錘の可能性が考えられる。時期は不明である。

第29図は縄文時代の石器である。２は２面に溝を持つ砥石である。形態から玉類などを研磨する際に用いたものであろう。３は石皿と考えられる破片である。内面は使用による摩滅が見られる。６は石匙である。先端は欠損する。剥片採取時の剥離面と２次加工の剥離面とでは風化の度合いが異なっている。４は砥石であるが、形態から縄文時代以降のものであろう。この他に敲石や剥片が出土しているが、表と写真図版で提示する。

註１　近年北海道・東北地方の動植物意匠遺物の集成が『東北民俗学研究』第６号（東北学院大学民俗学ＯＢ会：1998）、『動物デザイン考古学』（斎野裕彦：1999）で行われている。

註２　動物の顔面が外側を向く突起の類例については宮城県教育庁文化財保護課相原淳一氏、須田良平氏にご教授いただいた。



№	地区・層位	遺物名	残存	長	幅	厚	重	特徴	登録№	図版
1	8-9区間ベルト・下層	スクレーパー	完形	5.9	3.3	1.4	32.4	石材：粘板岩、打点・原礫面あり	R132	15-3
2	8-9区間ベルト・下層	砥石	ほぼ完形	4.9	2.3	1.6	23.6	石材：砂岩、2面に擦痕あり	R127	15-7
3	8b区・下層	石皿	破片	(5.7)	(5.1)	(3.8)	116.1	石材：砂岩、1面は使用に撓り摩滅している。	R099	15-9
4	8-9区間ベルト・下層	砥石？	両端欠損	(6.4)	3.3	1.1	35.9	石材：粘板岩、1面研磨	R116	15-6
5	8-9区間ベルト・下層	石鏃	完形	3.5	1.5	0.6	1.9	石材：頁岩	R183	－
6	8-9区間ベルト・下層	石匙	刃部先端欠損	(7.9)	2.5	0.9	17.6	石材：頁岩、打点あり、剥離面と2次加工面の風化度合いが異なる	R118	15-4
7	23区旧河川・堆積層	石錘	ほぼ完形	8.2	6.5	2.4	144.6	石材：安山岩、側面に抉り？あり、両面の一部に焼けた痕跡ある	R144	15-8
8	8b区・下層	磨製石斧	刃部欠損	(9.6)	6.0	1.8	238.1	石材：砂岩、4面研磨、擦痕はあまりはっきりしないが、つるつるする	R102	－
9	不明・廃土	砥石	ほぼ完形	6.9	5.5	2.6	130.6	石材：凝灰岩、2面研磨、3側面ケズリ痕跡	R177	－

第29図　7～9区（基本層序Ⅷ層）、23区河川及び廃土出土石製品

地区・層位	器種	長	幅	厚	重	特　　徴	No	図版
8-9区間ベルト・下層	磨　石	(5.7)	7.3	5.7	244.1	石材：安山岩、使用による摩滅	R063	－
8-9区間ベルト・下層	磨　石	(2.5)	(5.0)	(2.8)	41.0	石材：流紋岩、擦痕あり	R090	－
8-9区間ベルト・下層	磨　石	(8.1)	5.7	3.6	216.6	石材：凝灰岩（軟質）、摩滅	R100	15-12
８ｂ区・下層	磨　石	(4.2)	6.5	4.7	127.7	石材：花崗閃緑岩、４面を磨いている	R113	－
８ｂ区・下層	磨　石	(6.7)	5.0	0.9	17.6	石材：砂岩、使用による摩滅あり。制作時の痕跡は不明。	R117	15-11
８ｂ区・下層	磨　石	(8.1)	6.2	2.9	207.8	石材：安山岩、２面に擦痕あり	R121	15-10
８ｂ区・下層	磨　石	(5.1)	5.4	2.8	94.8	石材：砂岩、先端に敲打痕？あり	R126	15-13
不明・廃土	磨　石	(6.4)	3.4	2.5	80.1	石材：安山岩、１面のみ磨いている	R141	15-14
９区・下層	磨　石	(3.3)	5.0	1.5	33.1	石材：泥岩、２面を磨いてる	R195	－
８ｂ区・下層	剥　片	3.7	3.6	0.8	13.6	石材：頁岩、３方向からの剥離	R087	15-24
９区・下層	剥　片	3.4	3.8	0.8	9.4	石材：流紋岩、打点あり	R103	15-18
8-9区間ベルト・下層	剥　片	5.0	4.1	1.2	16.8	石材：頁岩、打点あり	R122	15-20
8-9区間ベルト・下層	剥　片	3.6	5.4	0.6	16.7	石材：頁岩、打点３カ所	R123	15-22
8-9区間ベルト・下層	剥　片	3.1	2.7	0.6	3.8	石材：頁岩、２次加工ある剥片	R124	－
8-9区間ベルト・下層	剥　片	4.5	2.9	1.1	14.9	石材：頁岩	R125	－
8-9区間ベルト・下層	剥　片	3.4	3.9	1.2	15.5	石材：頁岩、中間より欠損	R128	15-23
8-9区間ベルト・下層	剥　片	5.5	3.6	0.9	15.5	石材：頁岩	R129	15-23
8-9区間ベルト・下層	剥　片	3.1	1.5	0.2	2.0	石材：頁岩、中間より欠損、２次加工ある剥片	R130	－
8-9区間ベルト・下層	剥　片	5.5	3.4	1.0	19.4	石材：流紋岩、先端欠損	R134	15-16
8-9区間ベルト・下層	剥　片	2.7	1.7	0.1	1.2	石材：頁岩	R135	15-15
8-9区間ベルト・下層	剥　片	3.8	3.5	0.7	6.9	石材：頁岩、打点あり	R137	15-19
７区・不明	剥　片	4.3	5.7	0.8	19.4	石材：頁岩、打点あり	R138	15-21
８区・不明	剥　片	3.9	4.8	1.0	19.2	石材：頁岩、打点２カ所、原礫面残存	R139	－
20a区・廃土	剥　片	3.8	3.5	0.7	6.9	石材：頁岩、打点あり、２次加工ある剥片、抉りあり、未製品?	R137	－
23区・旧河川堆積土	剥　片	3.0	2.5	0.8	5.7	石材：流紋岩、打点あり、先端欠損	R143	15-17
23区・褐色土	剥　片	3.0	3.1	0.5	7.6	石材：頁岩、２次加工ある剥片	R180	－
不明・廃土	剥　片	1.4	2.0	0.2	1.4	石材：頁岩	R184	－
16区・73溝堆積土	剥　片	3.0	2.1	1.0	5.4	石材：頁岩、打点あり、中間より欠損	R185	－
不明・廃土	剥　片	2.6	2.9	0.5	4.6	石材：安山岩、２次加工ある剥片	R187	－
８ｂ区・下層	剥　片	3.5	2.8	0.8	7.3	石材：玉髄	R196	－
８区・下層	剥　片	2.8	3.2	0.7	6.4	石材：流紋岩	R198	－
8-9区間ベルト・下層	剥　片	2.0	1.8	1.0	3.1	石材：	R199	－

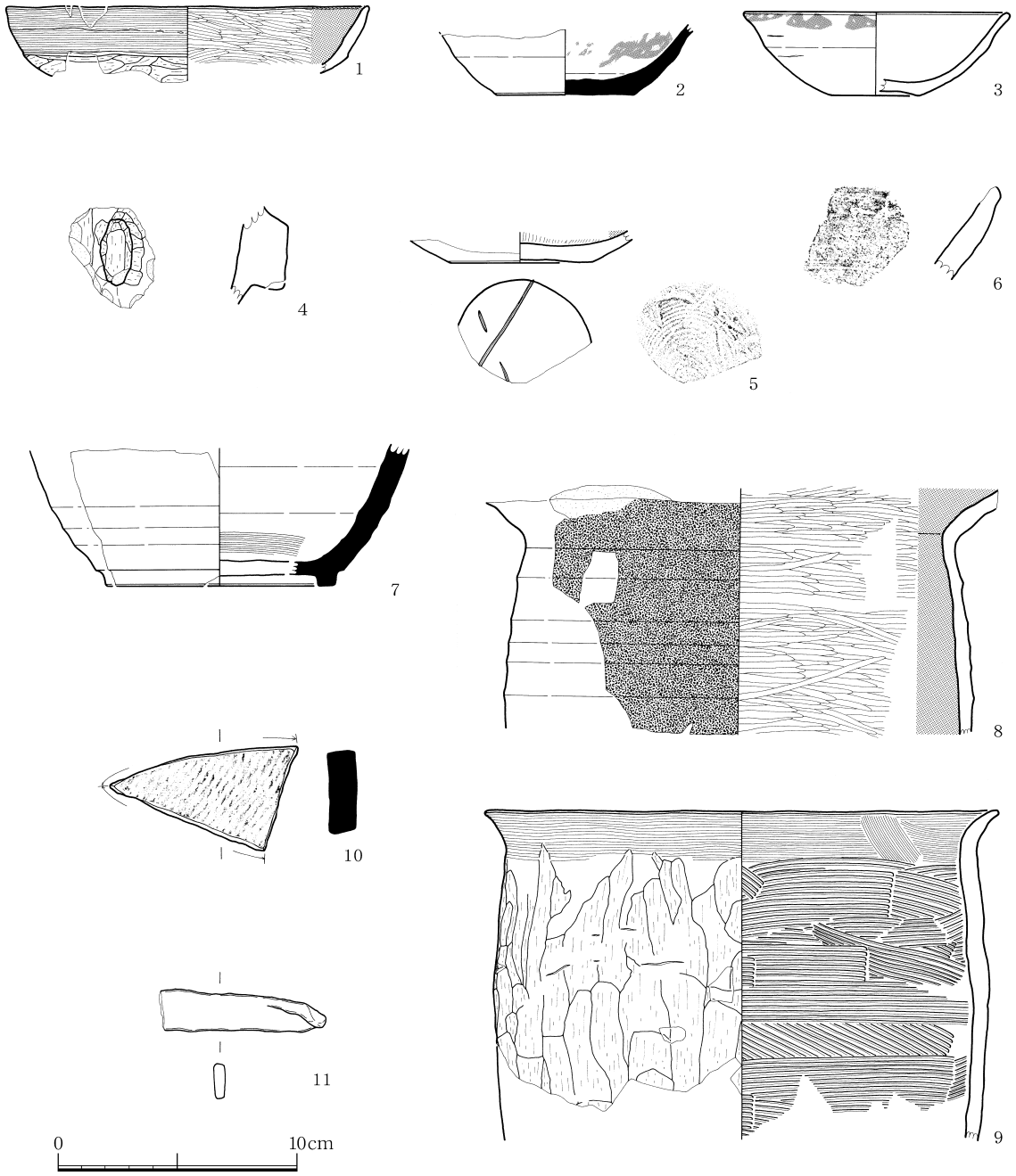
第２表 石製品観察表

８．表土（基本層序Ⅰ～Ⅵ層）出土遺物

表土（基本層序Ⅰ～Ⅵ層）から土師器、須恵器、中世陶器、鉄製品などが出土している。これらは遺構に伴わず、水田耕作や昭和30年代の田面及び道路造成時に巻き上げられたものと考えられる。なお、重機による表土掘削時に遺構周辺から出土している遺物もあるが、遺構との関係が不明瞭である。ここである程度器形が判明した出土遺物についてのみ資料の提示を行うこととする。

第30図２は須恵器坏底部、３は赤焼き土器坏である。２の内面及び３の外面にはそれぞれ油煙と見られる黒色物質が付着する。５はロクロ土師器坏底部片である。底面にはヘラ記号「×」がみられる。８はロクロ土師器長胴甕体上部片であり、外面には煮こぼれと見られる炭化物が濃密に付着する。10は須恵器甕体部片を転用した砥石である。２側面に使用面を認めることが出来る。11は鉄製品である。形態から鎌の可能性が考えられる。

第29図７は礫を用いた石錘と考えられるもので、側面に窪みが見られる。両面の一部に焼けた痕跡が見られる。



№	地区・層位	遺物名	残存	器高	口径	底径	特徴	登録№	図版
1	12区表土	非ロクロ土師器坏	口～体部½	－	16.2	－	外：ヨコナデ、ヘラケズリ、にぶい褐（7.5YR6/3）～褐灰（7.5YR4/1）、内：ヘラミガキ・黒色処理、黒（N1.5/ ）	R028	－
2	表採	須恵器坏	体下～底部½	－	－	6.2	外:ロクロナデ、灰(10YR6/1)～灰白(2.5Y8/1)、底:回転糸切り、内:ロクロナデ、黒色物質（油煙？）付着、灰白(2.5Y8/1)	R170	－
3	11区表土	赤焼き土器坏	ほぼ完成	3.7	11.8	6.0	外:ロクロナデ、口縁部付近に黒色物質（油煙？）付着、橙(2.5YR7/6)、底:回転糸切り、内:ロクロナデ、橙(2.5YR7/6)	R179	－
4	12区表土	非ロクロ土師器？甕	突手部	－	－	－	外：ヘラケズリ、にぶい黄橙（10YR7/4）、内：摩滅、にぶい赤褐（5YR5/4）	R027	－
5	廃土	ロクロ土師器坏	底部	－	－	6.4	外：ロクロナデ、にぶい橙（7.5YR6/4）、底：回転糸切り、ヘラ記号「×」、内：ロクロナデ→ヘラミガキ（放射状、粗い）・黒色処理	R183	13-3
6	16区・表土	中世陶器擂鉢	口縁部破片	－	－	－	外：ロクロナデ、にぶい赤褐（5Y7/2）、内：ロクロナデ、降灰、灰黄（2.5Y7/2）、在地産	R186	－
7	14区・表土	体下～底部	体下～底部	－	－	8.8	外：ロクロナデ、灰（5Y4/1）、内：ロクロナデ、灰（5Y5/1）	R003	13-13
8	14区・表土	須恵器甕	頸～体部⅓	－	－	－	外：ロクロナデ、炭化物付着、灰黄褐（10YR6/2）、内：ロクロナデ→ヘラミガキ・黒色処理　黒（N1.5/）	R037	－
9	14区・表土	非ロクロ土師器甕	口～体部½	－	23.0	－	外：ヨコナデ、ヘラケズリ、にぶい黄橙（10YR7/3）、内：ヨコナデ、ハケメ、にぶい橙（7.5YR7/3）	R043	－
10	廃土	砥石	完形	素材：須恵器甕体部を転用、2面に使用痕見られる				R182	－
11	12区表土	鉄製品・鎌？	ほぼ完形	長：7.4㎝以上、幅1.6㎝、厚：0.5㎝				R173	13-15

第30図 表土（基本層序Ⅰ～Ⅵ層）出土遺物

掘立柱建物跡属性表

遺構名	位置	構造・特徴	規模（総長）	柱間（m）	方向	備　　考
19建	2･12区	南北棟	桁行５間以上（11.80） 梁行１間以上（2.28＋α）	2.25＋2.15＋2.20＋2.25＋2.23 2.28＋α	N12°E	古代
37建	9･10区	東西棟？	桁行２間（7.75）	3.94＋3.83	N16°E	
68建	15区	東西棟	桁行５間（9.52）	1.89＋1.92＋1.94＋1.80＋1.98	N20°E	67土より古い、平安以前
90建	12区	南北棟	桁行２間以上（3.30＋α） 梁行１間以上（1.80＋α）	1.80＋1.50＋α 1.80＋α	N32°E	
91建	12区	東西棟	２間（4.42）	2.10＋2.10	N６°W	古代

井戸跡属性表

遺構名	位置	平面形態	断面形態	長軸	短軸	深さ	堆　　積　　土	備　　考
36井	７区	円形	逆台形	0.9	0.9	0.74	黒褐色シルト質粘土～にぶい黄褐色砂	近代以降の瓦
39井	11区	円形か	漏斗状	2.0	1.2以上	0.87以上	黒色シルト質粘土～黒褐色粘土	
49井	12区	円形	逆台形状	1.7	1.6	0.59	オリーブ黒粘土	灰白粒含む
51井	12区	円形か	箱　形	1.1	－	0.54	黒褐色粘土質シルト～黒色シルト質粘土	
52井	12区	楕円～円形	円筒形	1.15	－	1.02以上	黒褐色粘土（人為）、黒色粘土（自然）	
56井	12区	円形か	円筒形	0.8	－	0.69以上	黒褐色シルト質粘土（自然）	55住と重複
57井	12区	円形か	円筒形	1.1	－	0.56以上	黒褐色シルト質粘土（自然）	55住と重複

土坑属性表①

遺構名	位置	平面形態	断面形態	長軸	短軸	深さ	堆　　積　　土	備　　考
23土	10区	隅丸方形	箱　形	2.6	1.6以上	0.29	黒色粘土質シルト～褐色粘土（自然）	
24土	10区	隅丸方形？	U字形	0.4以上	－	0.29	黒色粘土質シルト～黒褐色粘土（自然）、褐灰色粘土（自然）	
25土	10区	隅丸方形	箱　形	0.6以上	0.55	0.35	黒色粘土質シルト～粘土（自然）、褐灰色粘土（自然）	
26土	10区	円　形	箱　形	0.9	0.7	0.31	黒色粘土質シルト（自然）、褐灰色粘土（自然）	
27土	10区	隅丸方形	箱　形	0.8以上	0.8以上	0.45	黒色粘土質シルト～黒褐色粘土（自然）、灰色粘土（自然）	
28土	10区	円　形	箱　形	0.9	0.7以上	0.35	黒褐色シルト質粘土（人為）、黒褐色～褐灰色粘土（自然）	
30土	10区	不整形？	U字形	0.93	－	0.43	黒色粘土～黒褐色粘土質シルト（自然）	
31土	10区	隅丸方形	箱　形	0.94	0.73	0.35	黒色粘土（自然）	
32土	10区	不　明	箱　形	0.4以上	－	0.50	黒色粘土質シルト（自然）、黒褐色粘土質シルト（自然）	
38土	10区	隅丸方形	U字形	0.65	0.45	0.32	黒色～にぶい黄褐色粘土（自然）	23土より古
40土	11区	隅丸方形	U字形	0.5以上	0.57	0.16	黒褐色粘土質シルト（自然）、褐灰色シルト質粘土（自然）	39井より古
42土	11区	隅丸方形	U字形	0.85	0.61	0.14	黒褐色～黒色シルト質粘土（人為）、黒色粘土質シルト（自然）	ピットより古
46土	12区	隅丸方形	箱　形	0.47	0.43	0.07	褐灰色粘土質シルト（自然）	45溝より古
48土	12区	円　形	U字形	0.57	0.54	0.16	黒色シルト～黒褐色粘土質シルト（自然）	
50土	12区	溝　状	箱　形	1.23	0.30	0.20	黒褐色～黒色シルト（自然）	
53土	12区	円　形	U字形	0.60	0.55	0.16	黒色粘土質シルト（自然）、褐灰色粘土質シルト（自然）	
60土	14区	円　形	箱　形	2.05	－	0.24	褐灰色粘土質シルト～黒褐色・黒色シルト質粘土（自然）	84土より新
61土	14区	不整円形	U字形	0.62	0.55	0.38	黒色～にぶい黄褐色シルト質粘土（自然）	93土より新
62土	14区	円　形	U字形	0.81	0.60	0.59	黄灰色シルト質粘土～黒褐色シルト質	西側に段
64土	14区	楕円形	箱　形	0.71	0.44	0.38	黒褐色粘土質シルト～褐灰色シルト質粘土（自然）、黄灰色～褐灰色シルト質粘土（自然）	
67土	15区	円　形	箱　形	0.74	－	0.46	黒色粘土～黒褐色シルト質粘土（人為）	土器多数出土
75土	16区	円　形	U字形	2.62	1.5以上	0.40	黒色シルト（自然）、黒褐色シルト質粘土～褐灰色粘土（人為）	77土、74溝、73溝より古

第３表 遺構属性表（1）

土坑属性表②

遺構名	位置	平面形態	断面形態	長軸	短軸	深さ	堆積土	備考
77土	16区	円形	U字形	0.54	0.37	0.25	黒褐色シルト質粘土（自然）	75土より新、74溝より古
80a･b土	21a区	隅丸方形	U字形	1.15	―	0.56	黒褐色～黒色粘土質シルト（b期、自然）、黒褐色～褐灰色粘土質シルト～粘土（a期、自然）	Ⅵ層掘り込み
81土	17区	円形	U字形	0.65	0.55	0.26	黒色粘土質シルト（自然）	82土より新
82土	17区	隅丸方形	箱形	2.32	1.4以上	0.24	地山土を含む黒色シルト質粘土～粘土質シルト（人為）	81土より古
84土	14区	隅丸方形	U字形	0.6	0.40	0.24	黒褐色シルト質粘土～粘土質シルト（自然）、褐灰色シルト質粘土（自然）	60土より古
85土	14区	隅丸方形	箱形	1.25	0.75	0.50	黒褐色粘土質シルト（自然）、黒色土（人為？）	63住より古
86土	23区	円形	U字形	1.42	1.36	0.54	黒褐色粘土質シルト（自然）	83住より新、小溝より古
93土	14区	不整形	箱形	1.80	―	0.20	灰褐色粘土質シルト（人為）	溝､61土より古

溝跡属性表

遺構名	位置	総長	上幅	下幅	深さ	断面形	方向	堆積土	備考
2A溝	15区	120	2以内	0.2	0.55	箱形	東西･N81°E	黒色～黒褐色粘土質シルト（自然）	土師器､須恵器､縄文土器､鉄滓
2B溝			1.84	1.25	0.55	U形		地山土を多く含む黒褐色粘土質シルト（自然）	非ロクロ土師器
33溝	10区	3.2	2.7	0.31	0.48	段上	南北･N25°E	黒～黒褐色粘土質シルト～シルト（自然）	34溝、小溝より新
34溝	10区	7.3	1.2	0.5	0.21	U形	東西	黒褐色シルト～粘土質粘土（自然）	33溝より古、ロ土師器
35溝	10区	3.4	0.35	0.3	0.4	U形	東西･N49°W	オリーブ黒色シルト質粘土（自然）	
45溝	12区	2.4	0.9	0.5	0.21	箱形	南北･N17°E	黒褐色粘土（自然）	須恵器、ロクロ土師器
47溝	12区	2.3	0.7	0.3	0.18	U形	南北･N15°E	黒～黒褐色粘土（自然）、褐灰色粘土（自然）	赤焼き土器、土師器
54溝	12区	2.3	1.3	0.5	0.34	逆台形	南北･N17°E	黒色シルト～粘土質シルト(自然)､黒色粘土(自然)	非ロクロ土師器
65溝	14区	2.1	0.9	0.7	0.15	U形	南北･N27°E	黒色粘土質シルト（自然）	64土より古
66溝	14区	2.1	0.6	0.35	0.14	箱形	南北･N27°E	黄灰色～灰褐色粘土質シルト（自然）	土師器
69溝	15区	2.85	0.40	0.20	0.03	箱形	南北･N19°E	黒色シルト質粘土（自然）	Ⅵ層より掘り込む
70溝	16区	2.35	0.65	0.35	0.18	箱形	南北･N30°E	黒色シルト（自然）	土師器、Ⅵ層より掘り込む
71溝	16区	2.35	1.0	0.25	0.37	逆台形	南北･N34°E	黒色シルト（自然）	
72溝	16区	1.85	0.5	0.4	0.08	箱形	南北･N37°E	黄灰色粘土（自然）	
73溝	16区	7.7	0.75	0.40	0.18	U形	東西･N56°W	黒色粘土質シルト（自然）	75・77土、74溝より古
74溝	16区	2.3	0.7	0.08	0.6	U形	東西･N46°W	黒色粘土質シルト～黒褐色シルト質粘土（自然）	73溝より古､76･75土より新
78溝	17･20区	26.5	1.94	1.15	0.48	逆台形	東西･N54°W	黒褐色シルト（自然）	土師器･磁器､Ⅵ層掘り込み
79溝	20a区	3.0	0.55	0.4	0.14	皿状	東西･N50°W	暗オリーブ色シルト（自然）	
87溝	23区	1.7	0.9	0.18	1.4	段掘り	東西･N76°E	黒褐色シルト（自然）	土師器破片
94溝	17区	1.55	0.70	0.32	0.15	箱形	東西･N49°W	黒褐色シルト質粘土（自然）	

第４表 遺構属性表（2）

Ⅴ. 考　察

1. 古代

遺構は竪穴住居跡・竪穴遺構、建物跡、溝跡、井戸跡、土坑が検出され、遺物は土師器、須恵器、赤焼き土器、緑釉陶器、鉄製品などが出土している。ここでは１、２次調査の成果（安達訓仁：2000）も含め検討を行う。

①竪穴住居跡・竪穴遺構について

a．年代について

竪穴住居跡・竪穴遺構は重複関係もなく、床面からの遺物もないことから個別に年代を考える。

【41号竪穴遺構】堆積層、掘方埋土からロクロ土師器坏・甕、非ロクロ土師器甕、須恵器坏が出土している。掘方埋土からロクロ土師器が出土することから構築年代は「表杉の入式」期（氏家和典：1957）と考えられるが、いずれも小片のため、正確な位置付けはできない。

【43号竪穴住居跡】堆積層、掘方埋土から遺物が出土しないため不明である。

【55号竪穴住居跡】堆積層、カマド堆積層、掘方埋土から非ロクロ土師器甕が出土している。ロクロ土師器を含まないことから、構築年代は「国分寺下層式」期（氏家和典：1957、1967）と考えられる。また、１号住居跡とは方向が同一のため同時期の８世紀代のものと考えられる。

【58号竪穴住居跡】堆積層からロクロ土師器坏、非ロクロ土師器甕、須恵器坏、掘方埋土から非ロクロ土師器甕が出土している。掘方埋土からはロクロ土師器が出土しないが、構築年代は不明である。堆積層出土遺物は流れ込みの可能性も考えられるが、ロクロ土師器坏、底部切り離しが回転糸切りである須恵器坏が出土していることから９世紀代の可能性があるが、正確な位置づけはできない。

【63号竪穴住居跡】削平を受け堆積土が残存せず、不整形な掘方埋土が確認されたのみである。カマド堆積層、貯蔵穴状ピット、掘方埋土からロクロ土師器坏、非ロクロ土師器甕、赤焼き土器坏が出土している。掘方埋土から須恵器坏が出土しており、特徴から構築年代は9世紀代と考えられる。

【83号竪穴住居跡】堆積層、貯蔵穴状ピット、掘方埋土からロクロ土師器坏、非ロクロ土師器甕、須恵器壺が出土している。住居廃絶後の初期堆積層には灰白色火山灰（註１）粒がまばらに含まれることから、83号住居跡の廃絶年代は灰白色火山灰降下以前の10世紀前半と考えられる。

（註１）灰白色火山灰の降下年代は秋田県払田柵外郭材木列の年輪年代測定法や仙台市陸奥国分寺跡の調査成果から考古学的には西暦907～934年の間とされる（宮城県多賀城跡調査研究所：1998、pp.76、註２）。また、『扶桑略記』の記述から西暦915年をあてる見解もある（井上雅孝：1997）。ここでは考古学的な事実関係から907～934年と考える。

b．住居構造について

【住居跡の平面形】

住居跡の平面形はほとんどが方形であるが、41号竪穴遺構は円形に近い隅丸方形である。

【住居跡の方向】

１号住居跡でN－36°－E、55号住居跡でN－34°－Eとほぼ同一方向を示すことから、同時期の可能性が高い。１号住居跡出土遺物は８世紀代と考えられる。63号住居跡は残存状況が悪いため計測

できないが東側に傾くものである。83号住居跡ではＮ－76°－Ｅを示す。これらは出土遺物から平安時代のものである。

この他の住居は全体を検出できなかったため、詳細は不明である。

【カマド】

カマドは55号住居跡、63号住居跡、83号住居跡から検出された。83号住居跡ではカマド側壁が残存するが、55号住居跡、63号住居跡ではカマド下部の堆積層が残存するのみで、煙道はいずれも削平のため確認されず残存状況は悪い。方向は１号住居跡、55号住居跡が北東側、63号住居跡、83号住居跡では東側に敷設される。各住居跡の検討から奈良時代は北側、平安時代は東側に敷設されたものと考えられ、奈良時代と平安時代ではカマドが敷設される方向が異なり、各時代で規制があった可能性が高い。なお、隣接する桃生田前遺跡でも８世紀中葉から後半の２～４号住居跡、８世紀代と考えられる１号住居跡はいずれも北西～北東側に敷設（安達訓仁：2000）されることから、下富前遺跡、桃生田前遺跡では８世紀代では北側を意識して構築されている。

②掘立柱建物跡について

古代と考えられる建物跡は第２次調査も含めると３棟ある。いずれも調査区の関係から全容は把握できない。桁行が５間の大型のものが２棟ある（19、68号建物跡）。もう１棟は小型のもの（91号建物跡）と考えられる。

68号建物跡は北側柱列のみが検出された桁行５間の側柱建物跡である。桁行５間、梁行１間以上である19号建物跡と比較すると、柱穴の規模、平面規模や柱間間隔など68号建物跡は19号建物跡より小規模である。方向もやや異なる。また、19号建物跡や91号建物跡とは約60mほど離れた東側に位置する。仮に桁行が２間あるいはそれ以上である場合、２号溝跡と重複する可能性が高いと考えられる。

小型と考えられる91号建物跡は北側柱列が検出されたのみである。柱穴が方形～隅丸方形を基調としており、規模が長軸0.58mと中近世と考えられるピットより大きいことや柱間寸法が2.1m等間であることから古代のものと考える。

19号建物跡と91号建物跡は近接するものであり、方向がほぼ同じであることや梁行がほぼそろうことから同時期と考えられる。19号建物跡柱穴埋土から非ロクロ土師器や須恵器の破片が出土し、梁行と２号溝跡の方向がほぼ同じであることから概ね８世紀代の可能性も考えられる。68号建物跡は重複関係から後述する67号土坑よりも古いもので、10世紀前半以前と考えられるが、19号建物跡と91号建物跡とは位置が離れており方向もやや異なることから現段階では詳細な位置づけはできない。

③２号溝跡について

２号溝跡は１～３次調査で検出され、長さ120m以上の東西溝跡である。３時期確認された。Ａ・Ｂ期は同位置で重複する。ここでは各期の特徴を記載し、その年代などを考える。

【Ａ期】Ｂ期に掘り直されるため、詳細な規模は不明である。底面は２次調査では皿状、３次調査では箱状であるが、下幅が上幅よりやや狭い逆台形状を呈するという特徴をもつ。遺物は非ロクロ土師器甕、須恵器がわずかに出土しているが、構築時期を示すものはない。出土遺物から８世紀代には機能していたと思われる。

【B期】3時期のなかで最大の規模となる。上幅4.5～1.84m、下幅0.2～0.6mであり、上幅と比べ下幅が狭いという特徴を持つ。遺物は非ロクロ土師器、ロクロ土師器、須恵器が出土しており、堆積層中位には灰白色火山灰層が２次堆積することから10世紀以前の９世紀代に掘り直されたものと考えられる。

【C期】灰白色火山灰より新しいことと中世陶器が出土することから、中世のものと考えられる。２次調査でのみ検出され、３次調査では検出されなかった。15区周辺が削平を受けたため検出されなかったか、A・B期と方向が異なるのかどうかは調査区の関係から判然としない。

次に２号溝跡の性格について考えてみたい。遺構の配置をみると２号溝跡を挟んだ南北両側に奈良時代から平安時代の住居がみられる。従って、集落を区画する目的をもつものではなく、用水や排水などを目的とすると考えられる。掘削年代は不明であるが、奈良時代から平安時代まで、集落存続期間機能していたものと考えられる。

④井戸跡について

古代と考えられる井戸跡は49号井戸跡１基のみである。素掘りのものである。遺物は細片のため図示できなかったが、須恵器坏・甕、ロクロ土師器坏・高台付坏、非ロクロ土師器甕が出土している。また、堆積層中位に灰白色火山灰粒が２次堆積することから灰白色火山灰降下以前に構築されたもので10世紀前葉前後に機能していたものと考えられる。住居跡などとは重複せず、これらとは離れた地点に位置するものである。このようなあり方は田尻町金鋳神遺跡（小村田達也：1992）や桃生田前遺跡でも確認されている。

⑤土坑について

【10～11区にかけての土坑群】

10～11区にかけて11基の土坑が検出された。規模や形態から次の２類に分類が出来る。

Ⅰ類　隅丸方形で径2.6mほどの大型のもの（23号土坑）。ロクロ土師器が出土することから平安時代以降のものと考えられる。

Ⅱ類　隅丸方形から円形で径１m前後のもの（24～31、38、40号土坑）。ほとんどのものが自然堆積であるが、上層が埋め戻されているものがある。遺物は縄文土器、土師器の可能性がある土器片が出土したのみである。

Ⅰ類は底面がほぼ平坦で壁が緩やかに立ち上がるものである。堆積土は自然堆積であり、炭化物や焼土をまばらに含むものである。規模からは竪穴遺構と分類する事も可能であり、41号竪穴遺構と平面形が類似する。41号竪穴遺構では掘方埋土がみられ生活や作業に使用されたと推定できるが、23号土坑では見られなかった。また、遺物も回転糸切りされたロクロ土師器坏、非ロクロ土師器甕の破片が出土したにすぎず、遺構の性格を把握することが出来なかった。

Ⅱ類は底面が平坦なものと凹凸を持つものとに細分できるが堆積土の状況に大きな差異はない。また、遺物も少ないことから性格は不明である。重複関係がなく、適度に散在することから、これらは同時期あるいは近接した時期のものであると考えられる。また、１次調査でも10区より西側の調査区で２基の土坑が検出されており、さらに北側や西側に広がると考えられる。これらは10区より低い位置

で確認されたが、近世以降の河川により浸食された結果と考えられる。なお、27号土坑のみは輪郭が不明瞭で他の土坑と堆積土の状況が異なることから、別の時期の可能性もある。

次にⅠ類とⅡ類の新旧関係をみる。重複関係からⅠ類である23号土坑がⅡ類である38号土坑より新しいことからⅡ類→Ⅰ類と変遷する。したがって、Ⅰ類はロクロ土師器が出土しそれ以降の遺物が含まれないことから平安時代のものであり、Ⅱ類はそれ以前である。Ⅱ類からは土師器の可能性がある土器片が出土していることから平安時代以前の古代と考えられる。

【60号土坑】

次に14区に位置する60号土坑についてみる。１次調査で北側半分が確認され、３次調査で南側の精査を行った。長軸２mの円形であり、底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がるものである。自然堆積と考えられ、ロクロ土師器坏・高台付坏・甕、非ロクロ土師器甕、赤焼き土器坏、須恵器甕の破片が出土した。９世紀後半から10世紀と考えられる。これらとともに炭化材や鉄滓が出土しているが、底面に焼けた痕跡などがなく、遺構内で火を用いたものではないため性格は判然としない。しかし、鉄滓が出土することと図示は行わなかったが近接するピットからふいご羽口が出土することから集落内で小鍛治が行われていたものと考えられる。60号土坑が小鍛治を行った施設であるとはいえないが、今後の調査により確認されるものと考えられる。

⑥67号土坑出土遺物について

67号土坑は15区西端に位置するものである。径約１m程の円形を呈するものと考えられ、人為堆積と考えられる。堆積層から焼土、炭化物とともに多数の土器が出土した。炭化物、焼土を含み、須恵器に焼けた痕跡が認められるものもあることから、火災などにあったため廃棄された可能性がある。

出土した遺物にはロクロ土師器、非ロクロ土師器、赤焼き土器、須恵器、緑釉陶器、鉄製品、礫がある。ここでは図示した遺物について特徴を説明し、年代について考える。

【土師器】坏、高台付坏、鉢、甕がある。いずれもロクロ調整されるものである。

坏A（第19図１～３）

内面黒色処理されるものである。底部からゆるやかに立ち上がるもので、口縁端部が僅かに外反する。体部下端は手持ちヘラケズリが施される。底部切り離しは全面に手持ちヘラケズリ再調整が施されるが、１では回転糸切り痕跡が僅かにみられる。内面見込みは粗いミガキ調整が放射状に施される。

坏B（第19図４～７）

内面黒色処理されるものである。底部からゆるやかに立ち上がるもので、口縁端部が僅かに外反する。底部切り離しはいずれも回転糸切りである。内面は粗いミガキ調整が放射状に施される。

高台付坏A（第19図８、９）

内面黒色処理されるものである。高台部は欠損する。完形でないため判然としないが、底部から直線的に外傾する身の浅いもの（９、Ａ１）と底部からゆるやかに立ち上がる身の深いもの（８、Ａ２）がある。内面は粗いミガキ調整が放射状に施される。

鉢A（第19図10）

内面黒色処理されるものである。底部から体部下端にかけての破片である。底部からほぼ垂直に立

ち上がるもので、内面は細かいヘラミガキ調整が施され、見込みは放射状にミガキ調整されるものである。

甕A（第20図７）

小型の甕でロクロ調整されるものである。口径と体部径がほぼ同じである。

【赤焼き土器】坏、高台付坏が出土している。いずれもロクロ調整されるものである。

坏A（第20図２～５）

体部下端から口縁端部まで直線的に外傾し、口縁部が丸いものである。口縁端部が僅かに外傾するものもある。底部を欠損することから切り離しは不明である。

坏B（第20図１）

体部下端からゆるやかに内弯しながら立ち上がるものである。底部切り離しは回転糸切りによる。また、内面は部分的にヘラミガキ調整が施される。

高台付坏A（第20図６）

高台部はやや高く外側に踏ん張るもので、体部下端から口縁端部まで直線的に外傾し、口縁端部がわずかに外傾する。

【須恵器】坏、甕が出土している。

坏A（第20図８）

ロクロ調整されるものである。体部下端から外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁端部で外傾するものである。

甕A（第21図１）

中甕の頸部から体部の破片である。外面は平行タタキ整形ののちロクロ調整がされ、ロクロ目が顕著である。なで肩状を呈する。

甕B（第20図９）

大甕の体部破片である。外面は平行タタキ調整、内面は押さえ痕跡、横ナデ調整がみられる。外面は火熱により器面が剥離している。

【緑釉陶器】

皿A（第19図11）

口縁部片が１点出土した。器形から皿と考えられる。釉薬は濃緑色であり、胎土は灰色で硬質である。器面調整である内面調整の有無は釉薬のため観察できない。産地は小片のため判然としないが、洛西産など京都周辺で焼成されたものと考えられる（註１）。

【鉄製品】

鉄鏃A（第19図12）

１点出土している。長頸鏃であり、鏃身部は三角形のものである。頸部断面は丸形である。

67号土坑出土の各遺物の概要は以上の通りであり、特徴は以下のようにまとめられる。

①　器種はロクロ土師器坏A・B、高台付坏A、鉢A、甕A、赤焼き土器坏A・B、高台付坏A、須恵器

坏A、甕A・B、緑釉陶器皿Aで構成されるものである。ロクロ土師器坏A・B、赤焼き土器坏Aが主体を占め、これらはほぼ同数含まれる。須恵器坏は１点と著しく少ない。

② ロクロ土師器坏A・B、鉢Aはいずれも内面見込みのヘラミガキ調整は粗く、下部は放射状にミガキ調整が施される。再調整されないもの（B）と底面及び外面下端に再調整されるもの（A）があり、Aがやや多い。Aでは口径13.6～14.8㎝、底径5.9～6.2㎝、器高が4.8～5.2㎝ であり、Bでは口径13.8～14.6㎝、底径5.9～6.1㎝、器高5.9～6.2㎝ である。

③ 赤焼き土器坏A・Bは口径13.8～15.8㎝、器高4.8㎝ であり、小型坏は含まない。内面にヘラミガキされるもの（B）がある。

④ 須恵器甕Aは完形ではないが、なで肩状の器形から９世紀後葉以降にみられるものである（村田晃一：1992）。

次に上記の特徴と類似する資料として、多賀城跡Ｅ群土器（白鳥良一：1980）、多賀城市高崎遺跡ＳＸ1080土壙（高野芳弘：1991、千葉・伊東：1995）、仙台市藤田新田遺跡ＳＤ302Ｃ河川跡（村田晃一：1994）などをあげることが出来る。多賀城周辺のものと比較すると土師器及び赤焼き土器の器形や法量、須恵器の比率が低いなど類似しているが、器種構成に欠落するものや宴会や儀式などに使用されたとされる赤焼き土器の比率が多いものがあるなどの相違はみられる。これらは灰白色火山灰層の前後で認められるもので、10世紀前半の年代が与えられている。

上記の遺跡と宮城県北部とは離れており遺跡の性格も異なることから単純な比較は難しいが、特徴が類似することから67号土坑出土遺物は10世紀前半の年代が考えられる。

なお、第19図７の体部には墨書痕跡が認められる。字形は多賀城市多賀城跡（宮城県多賀城跡調査研究所：1979）や仙台市五本松窯跡第15号窯跡出土平瓦刻印（佐藤・小川：1987）などで「土」と判読されたものに似るが、左側のはらいがないなど字体が異なる。したがって、ここでは判読不能と考える（註２）。

（1） 緑釉陶器の産地及び山王遺跡出土緑釉陶器の観察にあたっては宮城県多賀城跡調査研究所吾妻俊典氏、阿部恵氏、後藤秀一氏、宮城県教育庁文化財保護課村田晃一氏、柳沢和明氏にご教授・ご協力をいただき、洛西産とご教授いただいた。また、平成14年３月２日にさいたま市で開催された第６回窯跡構造研究会の際、矢本町教育委員会佐藤敏幸氏に愛知県立愛知高等学校城ヶ谷和弘氏の紹介を受け、近江産かとのご教授を得た。いずれの見解も東海産ではないことは確実であるとする。なお、平安京での年代観は洛西産緑釉陶器は９世紀前半～10世紀前半、近江産緑釉陶器は10世紀前半～11世紀初頭とされる（平尾政幸：1994、宮城県教育委員会：1998）

（2） 墨書土器については再度検討を行い、今後刊行を予定している「長者原Ⅱ遺跡発掘調査報告書」（1988年調査、刻書土器が出土）で報告する。

⑦東北地方北部系の土師器について

東北地方南部の土師器とは異なる属性をもつ土師器が出土した。土師器は非ロクロ土師器坏（第23図13）と長胴甕（第24図１）がある。

坏は半円球状の有段丸底で、内弯気味に外傾しながら口縁部に至るものである。口縁部は横ナデ、段以下にケズリ、ミガキがみられる。段の位置は中位やや上に位置するもので身はやや深い。口径17.2㎝と大型である。形態は東北地方南部の土器型式である「栗囲式」（氏家：1957）の範疇で捉えられるものである。しかし、外面の段以下にミガキがみられること、内面には段や屈曲はみられないが、内面

見込みに放射状の細かいヘラミガキが施されることは、東北地方北部の土師器坏の製作技術に影響を受けたものである。したがって、東北地方南部の土師器の要素と北部の土師器の要素を併せ持つものである。栗囲式は近年細分が試みられており（村田晃一：1998、佐藤・益子・菅原：2001）、形態からおおよそ７世紀後半～８世紀初頭頃のものと考えられる。

長胴甕は頸部に段を持つもので、頸部から外傾しながら立ち上がり、中位で屈曲し段をもち、そこからほぼ垂直に立ち上がり口縁部に至るものである。口唇部は沈線状に窪む。調整は口縁部は横ナデ、段以下は細かいハケメ、内面は口縁部付近が横ナデ、胴部はハケメという特徴を持つ。このような特徴を持つものは青森県八戸市酒美平遺跡甕ＡⅢa類（馬淵川流域、大野・渡・藤谷：2001）、岩手県山田町房の沢Ⅳ遺跡ⅡＡ２類（岩手県沿岸部、佐々木・佐藤：1998）などでみられ、岩手県、青森県などの東北地方北部に広く分布する。これらの年代は上記報告書内の検討で、他の遺物との共伴関係から７世紀後葉から８世紀前葉とされる。下富前遺跡出土の長胴甕は遺構に伴うものではないが、上記の各遺跡出土の長胴甕の特徴と類似することから同時期のものであると考えられる。宮城県内での類例は数が少なく高清水町観音沢遺跡第10溝出土の長胴甕（加藤・阿部：1980、pp.181、第25図７）があげられる。頸部に沈線がみられるという相違はあるが、形態やハケメ調整は類似する。また、球胴甕で口縁部形態が類似する資料は頸部に沈線がみられるという相違はあるが志波姫町御駒堂遺跡２号住居出土資料（小井川・小川：1982）などに見つけることができる。これらの年代は７世紀後葉から８世紀前半頃と考えられている。

以上のことから、この２点は東北地方北部系の土師器であり、７世紀後半から８世紀前半頃のものと考えられる。

この時期の宮城県北部は東北地方北部の土器圏内に含まれるという指摘もある（小井川・小川：1982、村田晃一:2000）。しかし、現段階では遺構に伴わないものであり、同時期の遺物は第１次調査時に２号溝跡から出土した非ロクロ土師器高坏と須恵器坏蓋があるのみである（安達訓仁：2000、第30図５、６）。脚部に透かしをもつ高坏は墳墓や寺院、官衙などから出土すると指摘されるもの（村田晃一：2000）で、坏蓋は涌谷町長根窯跡Ａ地点１号窯跡（佐々木・桑原：1971）出土坏蓋に類似する。このような土器と東北地方北部系の土師器がほぼ同時期に存在する可能性が高いことから、今後周辺の調査を行い概期の遺構の検出をまって検討する必要がある。

⑧集落の変遷について

上記の検討から集落の変遷を考える。ただし、遺構に伴う遺物が少なく詳細な検討を行うことはできなかった。ここでは、各遺構の検討を基に大きく第Ⅰ～Ⅲ期に分けてそれぞれの特徴を考える。

【第Ⅰ期】７世紀後半から８世紀前葉までの栗囲式期である。遺構は検出されず、遺物のみが出土するもので、非ロクロ土師器高坏、須恵器坏蓋、東北地方北部系土師器がある。これらはほとんどが、15区の２号溝跡から出土しているので、周辺に遺構が存在する可能性が高い。ただし、15区周辺は昭和30年代の開田により削平を受け、極めて残存状況は悪いと考えられる。

【第Ⅱ期】８世紀前葉以降の国分寺下層式期（氏家：1957）である。１号住居跡と55号住居跡、２号溝跡（ａ期）があり、該当する遺構数は少ない。住居跡からの土器の出土は少なく、確定的ではないが、

住居跡の方向が一致することから同時期のものであろう。２号溝跡は掘り直されたｂ期のものに灰白色火山灰を含むことからａ期はそれ以前のものと考える。住居跡は２号溝跡の南側と北側に展開し、約50mほどの広がりを持つ。瀬峰町大境山遺跡（阿部・赤澤：1983）などと同様に住居跡数棟が集まり、そのような単位が適度に散在するものと考えられるが、広範囲に面的な調査をできていないため、詳細な集落の構造や規模は不明である。なお、19号建物跡や91号建物跡の梁行は２号溝跡とほぼ並行することから、２号溝跡機能時に同時存在する時期があると考えられるが、これら建物跡が２号溝跡掘削時まで溯るかどうかは、遺物が少なく、重複関係もないため、正確には位置づけられない。

【第Ⅲ期】９世紀以降のロクロ土師器が出土する時期である。住居跡･竪穴遺構、井戸跡、溝跡、土坑がある。Ⅱ期と比して遺構数が多く、ロクロ土師器に赤焼き土器が共伴するものもあることから、数期に細分されるものと考えられるが残存状況や遺物の出土状況が悪く詳細は不明である。住居跡・竪穴遺構は３棟あり、詳細な時期決定はできないものの９世紀代のものと10世紀前半頃のものがある。井戸跡や２ｂ号溝跡も出土遺物や堆積土から９世紀代～10世紀前半に機能していると思われる。これらが分布する範囲は東西約200m、南北約60m以上と広範囲に広がるが、同時期に存在する住居跡は数棟が散在するものと考えられる。井戸跡は住居跡などから離れた場所に位置する。構造は第Ⅱ期と類似するものであろう。

現段階での集落の変遷は８世紀から10世紀まで継続して営まれると考えられるが、集落構造は面的な調査を行っていない事から不明な点が多い。今後機会がある場合、これらを検証していく必要があろう。

２．中世

①遺物について

中世の遺物は中世陶器が９点出土したのみである。カラー図版２の下段に主要なもの８点を掲載した。いずれも破片であり、遺構からの出土はない。器種としては甕、壺などの袋物や擂鉢がある。特徴のわかる擂鉢口縁部破片（第30図６）は器形から在地産のもので、13世紀後半から14世紀前半頃のものと考えられる（飯村均：1995）。この他、東海地方産や在地産のものがあるが破片のためその特徴を把握することが難しいのだが、おおよそ上記の年代のものと考えられる。なお、近世の遺物はほとんど出土していない。

②遺構について

中世頃と考えられる遺構は掘立柱建物跡がある。今回多数のピットを検出しているが掘立柱建物跡と認定できたものは２棟と少ない。これらはいずれも調査区の関係から全体の規模は不明である。また、第２次調査検出の建物跡を含めると５棟になる。建物跡の分布は２区南側、12区、３区の遺跡中央付近に集中するが、ピットは11区東側から15区西側に広く分布する。これらは、いずれも柱穴の規模が0.2～0.3mほどの小型であることから中世頃のものである。調査区の関係から詳細な建物跡の変遷を追うことはできない。出土遺物から13～14世紀頃の屋敷跡と考えられる。ただし、ピットには根固めのためとみられる礫があるものや礎板石と考えられる礫が底面にみられるもの（第14図、12－Ｐ

68）もあるため、時代が下る可能性もある。また、柱抜取痕がみられるものもあり、ほぼ同位置での柱穴の重複があるものもみられることから、建物の位置などに何らかの規則性があった可能性もあろう。16世紀末頃から17世紀初めにかけて葛西氏の家臣白鳥氏（本拠地は岩手県前沢町、鈴木玄雄：1922）が藤沢館跡館主小野寺氏を頼り帰農し、下富前遺跡、桃生田前遺跡付近に居住したといわれる（瀬峰町：1966）が、遺物からは検出された屋敷と白鳥氏の屋敷の間に連続性がない可能性が高いと指摘できる。

古代以外の井戸跡は５基確認されたが、重複関係から古代以降と考えられるものが２基ある以外、遺物が出土しないことから正確な年代の位置づけをすることはできない。また、調査区の幅は狭いが遺跡内のおおよその地点を調査したが、前回同様確実に屋敷を区画する溝跡を検出することはできなかった。２ｃ号溝跡など中世と考えられる溝跡はあるが区画溝跡を確認することができないことから、掘立柱建物跡で構成される屋敷を区画するような溝跡はない可能性が高いと考えられる。

Ⅵ. まとめ

１．下富前遺跡は瀬峰町大里字富下富前に所在する。小山田川左岸に位置し、標高約６～７ｍの微高地に立地する。低地部分との比高差は約0.70～１ｍほどである。第１～３次調査より縄文時代、奈良･平安時代、中世の複合遺跡であることが判明した。遺構は微高地全域で見られたが、10区から11区西側の土坑群と11区東側から15区までの住居跡、建物跡などの遺構が比較的集中する部分が確認された。

２．遺跡範囲の西端付近に設けた調査区７～９区は旧河川あるいは湿地状の低地部と考えられ、その下層より縄文土器片、石器類が出土している。縄文土器には繊維土器、大木４・５・10式期の土器があり、また、動物顔面形突起をもつ土器片も出土している。これらは概ね縄文時代早期後葉から中期後半頃と考えられ、前期後半の大木４・５式がその主体をしめ、前述の動物顔面形突起をもつ土器片もこれらと同時期の可能性が考えられる。大木５式には仙台湾周辺の土器と北上川中流域周辺の土器に類似したものが認められた。

これらは近世以降の再堆積層から出土しているが、縄文土器が多量に出土する地点が限定されるため、その周辺の微高地に住居跡などの生活領域が存在する可能性も考えられる。なお、標高の高い地点である12区で検出された50号土坑はＴピットの可能性を考えたが残存状況が悪く断定できなかった。

３．奈良・平安時代の遺構として竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑などが検出された。

奈良時代の遺構として竪穴住居跡がある。これらは２次調査検出の１号住居跡をふくめて、いずれも北方向にカマドが構築される可能性が高い。一方、平安時代の竪穴住居跡は２棟ではあるが東方向にカマドを持つものと考えられ、いずれの時期も方向に規制があったと考えられる。集落は数棟の住居跡が散在して分布する傾向が８～10世紀まで継続することが考えられた。

遺物は遺構などから土師器、須恵器、赤焼き土器、鉄製品などが出土している。15区では10世紀前半頃の一括資料が得られた。また、７世紀後半から８世紀前半頃の東北地方北部系の土師器も出土

している。

４．中世以降の遺構としては掘立柱建物跡が検出された。ただし、調査区の幅が狭いという制約のため、建物跡と認識できたものは少ない。ピットの集中する範囲は11区東側から15区西側付近であり、南側の23区ではピットが希薄であった。また、これらを区画する溝跡は確認されなかった。遺構に伴う遺物の出土は今回の調査ではなかったが、基本層中からは中世陶器片が出土することと第２・３次調査で遺構から近世陶磁器が出土しないことから、これらは概ね13～14世紀代の屋敷跡と考えられるが、柱穴掘方下部に礎板石を持つものもあることから時期が下るものも含まれる可能性がある。

引用参考文献

愛知県陶磁資料館・五島美術館：1998『日本の三彩と緑釉－天平に咲いた華－』特別展図録

安達訓仁：2000「桃生田前遺跡　下富前遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第19集 瀬峰町教育委員会

阿部正光：1982「瀬峰町三代出土の土器」『瀬峰町の文化財』第２集　瀬峰町教育委員会

阿部正光・赤澤靖章：1983「大境山遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第４集　瀬峰町教育委員会

阿部正光・赤澤靖章：1984「瀬峰町大里字富蒲盛出土の蔵骨器、および骨片」『瀬峰町の文化財』第３集　瀬峰町教育委員会

阿部正光・赤澤靖章：1985「がんげつ遺跡　第３次発掘調査報告書」『瀬峰町文化財調査報告書』第５集　瀬峰町教育委員会

阿部正光・赤澤靖章・佐藤敏幸：1987「瀬峰町泉谷館跡・清水山Ⅰ遺跡発掘調査略報」『瀬峰町の文化財』第６集　瀬峰町教育委員会

阿部正光・佐藤敏幸：1988「民生病院裏遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第７集　瀬峰町教育委員会

飯村　均：1995「東北諸窯」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

井上雅孝：1997「陸奥における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第７号　北陸古代土器研究会

岩手県立博物館：1983『岩手の土器』

氏家和典：1957「東北地方土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

氏家和典：1967「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』

大野　亨・渡則子・藤谷一徳：2001「酒美平遺跡Ⅱ」『八戸市埋蔵文化財調査報告書』第88集　青森県八戸市教育委員会

加藤道男・阿部博志：1980「観音沢遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ－」『宮城県文化財調査報告書』第72集　宮城県教育委員会

北上市教育委員会：1983「滝ノ沢遺跡（1977～82年度調査）」『北上市文化財調査報告書』第33集　岩手県北上市教育委員会

木村浩二・青沼一民・長島栄一：1981「郡山遺跡Ⅰ－昭和55年度発掘調査概報－」『仙台市文化財調査報告書』第29集　仙台市教育委員会

興野義一：1968「大木式理解のために（Ⅳ）」『考古学ジャーナル』No24　ニューサイエンス社

興野義一：1969「大木式理解のために（Ⅴ）」『考古学ジャーナル』No.32　ニューサイエンス社

興野義一：1970「大木５b式土器の提唱－宮城県長者原遺跡資料による－」『古代文化』第22巻第４号　（財）古代学協会

興野義一：1981「糠塚貝塚について」『迫町史』　迫町

興野義一：1984「大木式土器について」『宮城の研究』１　清文堂

佐藤美智雄・小川淳一：1987「五本松窯跡」『仙台市文化財調査報告書』第99集　仙台市教育委員会

佐々木清文・佐藤良和ほか：1998「房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第

287集　(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
小井川和夫・小川淳一：1982「御駒堂遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ－」『宮城県文化財調査報告書』第83集　宮城県教育委員会
小村田達也：1992「金鋳神遺跡－金鋳神遺跡ほか－」『宮城県文化財調査報告書』第150集　宮城県教育委員会
斎野裕彦：1999「動物デザイン考古学」『地底の森ミュージアム　平成11年度特別企画展図録』 仙台市富沢遺跡保存館
佐藤敏幸・益子剛・菅原優子：2001「赤井遺跡Ⅰ－牡鹿柵・郡家推定地－」『矢本町文化財調査報告書』第14集矢本町教育委員会
佐々木茂楨・桑原滋郎：1971『長根窯跡』涌谷町教育委員会
佐々木茂楨・遊佐五郎：1980「沼崎山遺跡」『豊里町文化財調査報告書』第２集　豊里町教育委員会
佐々木尚見・阿部正光：1982「瀬峰町の遺跡－三代遺跡・桃生田前遺跡・下富前遺跡－」『瀬峰町の文化財』第１集　瀬峰町教育委員会
佐藤美智雄・小川淳一：1987「五本松窯跡」『仙台市文化財調査報告書』第104集　仙台市教育委員会
白鳥良一：1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所
鈴木玄雄：1922『栗原郡藤里村誌』上巻　栗原郡藤里村誌編纂委員会
瀬 峰 町：1966『瀬峰町史』 瀬峰町史編纂委員会
東北学院大学民俗学ＯＢ会：1998『東北民俗学研究』第６集　東北学院大学民俗学ＯＢ会
東北中世考古学会編:2001「掘立と竪穴　中世遺構論の課題」『東北中世考古学叢書』2　東北中世考古学会　高志書院
東北歴史資料館：1996『東北地方の土偶』
千葉孝弥・伊藤浩：1995「高崎遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第37集　多賀城市教育委員会
高野芳弘：1991「高崎遺跡井戸尻地区の調査」『多賀城市史』４　考古資料　多賀城市
宮城県教育委員会：1986「小梁川遺跡　遺物包含層編」『宮城県文化財調査報告書』第117集　宮城県教育委員会
宮城県教育委員会：1998「山王遺跡Ⅳ－多賀前地区考察編－」『宮城県文化財調査報告書』第171集　宮城県教育委員会
宮城県多賀城跡調査研究所：1979『宮城県多賀城跡調査研究所年報1978』 宮城県多賀城跡調査研究所
宮城県多賀城跡調査研究所：1998『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』 宮城県多賀城跡調査研究所
平尾政幸：1994「緑釉陶器の変質と波及」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３　施釉陶器－』古代の土器研究会
村田晃一：1992「多賀城跡周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』　大戸古窯跡群検討会・会津若松市教育委員会
村田晃一：1994「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第162集　宮城県教育委員会
村田晃一：1995「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号　福島県考古学会
村田晃一：1998「栗囲式の成立と展開」『考古学の方法』第２号　東北大学文学部考古学研究会
村田晃一：2000「飛鳥・奈良時代の北辺－移民の時代－」『宮城考古学』第２号　宮城県考古学会
山内清男：1929「関東北における繊維土器」『史前学雑誌』第１巻第２号　史前学会
山内清男：1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

写　真　図　版

調査前風景（南西より）

７区全景（西より）

８区全景（東より）

図版 1

作業風景
（８－９区間ベルト）

10区全景（西より）

23号土坑（北より）

図版 2

10区土坑群（東より）

39号井戸跡
（北西より）

11区東側全景（西より）

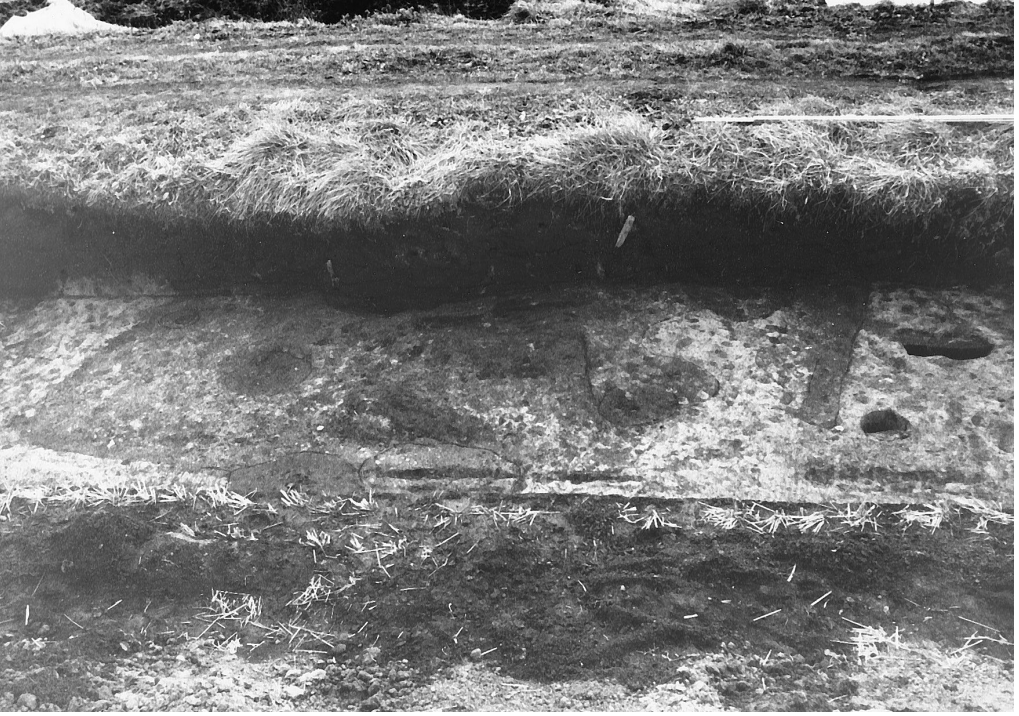
図版 3

41号竪穴遺構
（北西より）

43号住居跡（北より）

12区全景（東より）

図版 4



55号住居跡（北より）

49号井戸跡断面（北より）

作業風景（12区）

図版 5

13区全景（西より）

58号住居跡
（北より）

14区全景（西より）

図版 6

63号住居跡（西より）

60号土坑（南より）

67号土坑断面（北より）

67号土坑遺物出土状況①
（北より）

67号土坑遺物出土状況②
（北より）

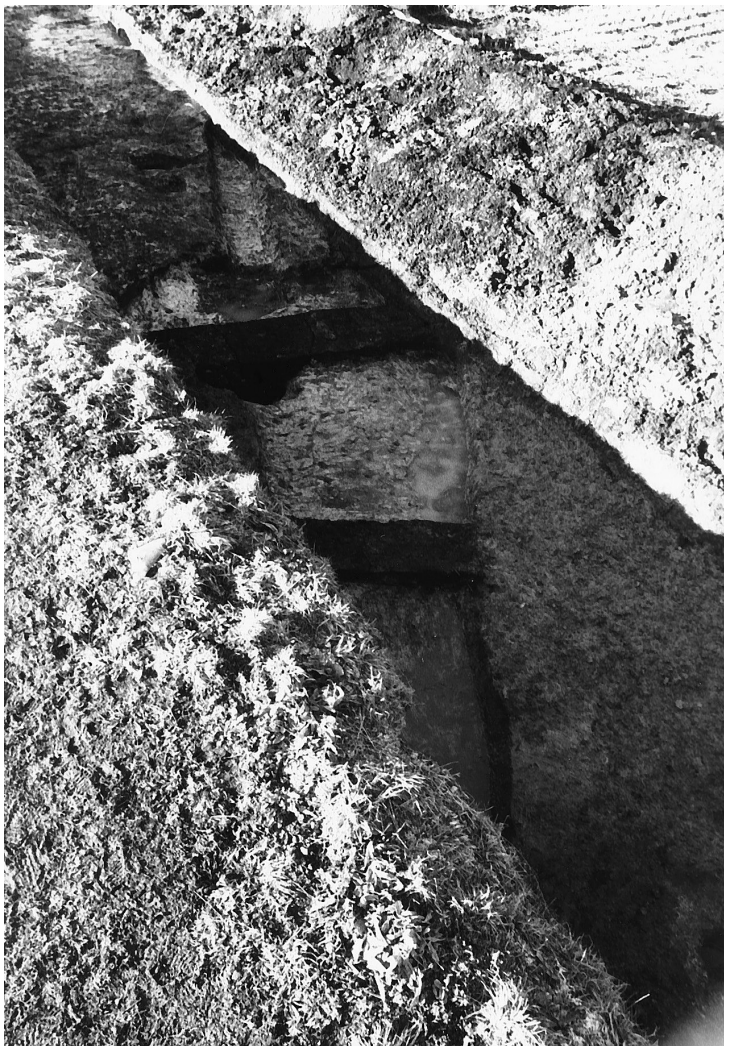
68号建物跡（西より）

68号建物跡
北西隅柱断面（西より）

２号溝跡（南西より）

２号溝跡１次確認状況
（西より）

２号溝跡断面（西より）

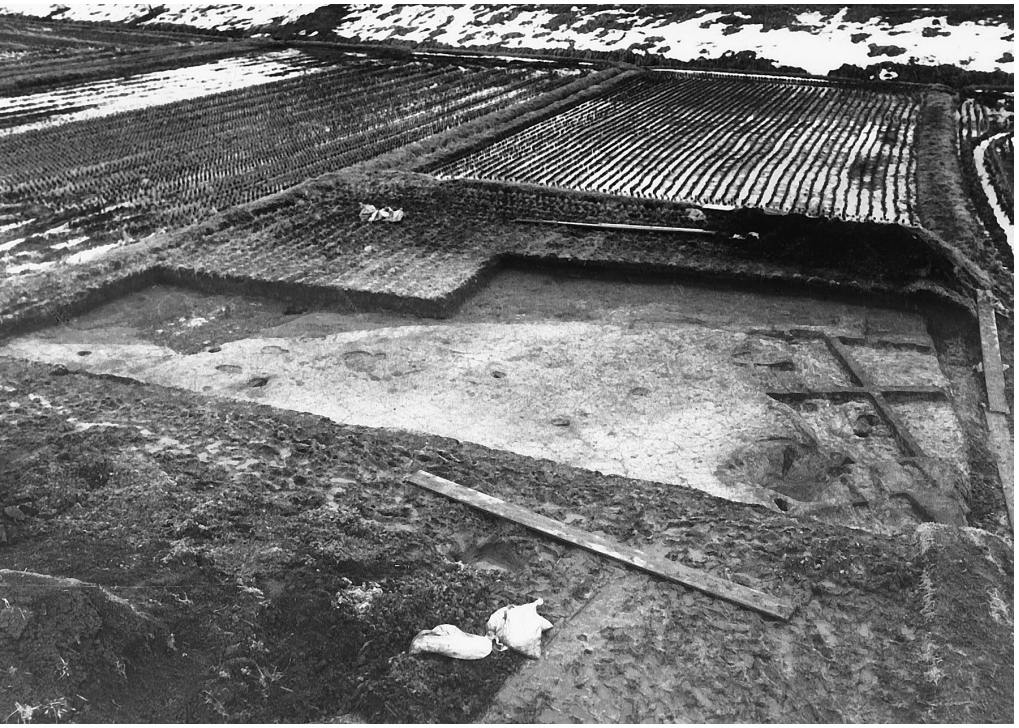


73号溝跡・76号溝跡（東より）

78号溝跡（西より）

図版 10

80号土坑（南より）



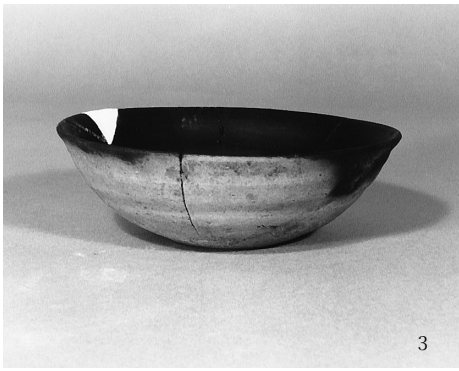
23区全景（北より）

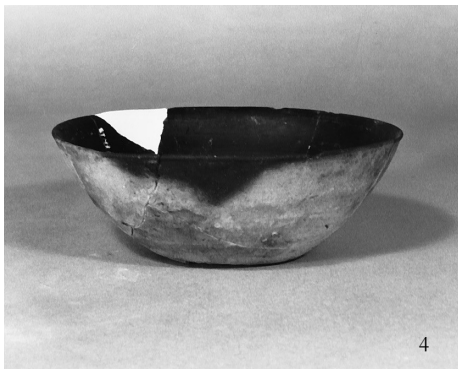
83号住居跡（西より）

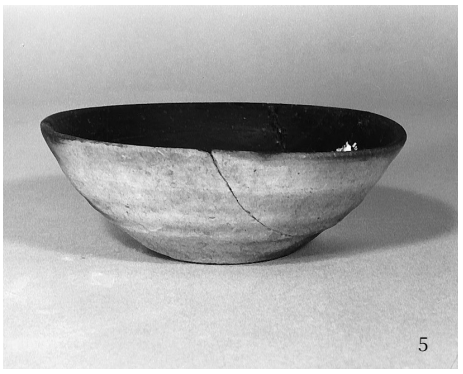
図版 11

1

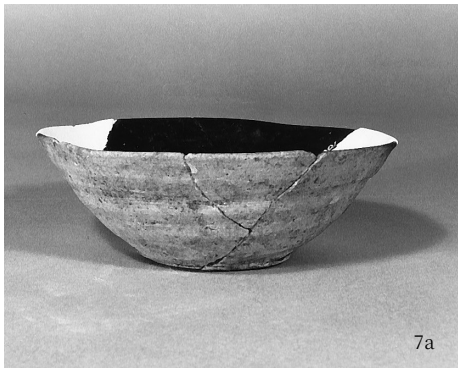
2

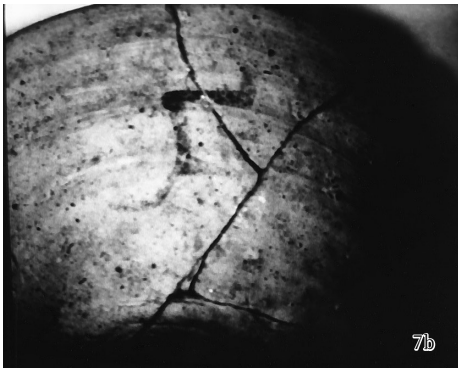

3


4


5

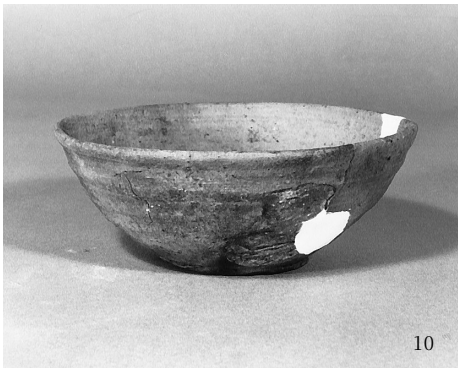
6


7a


7b

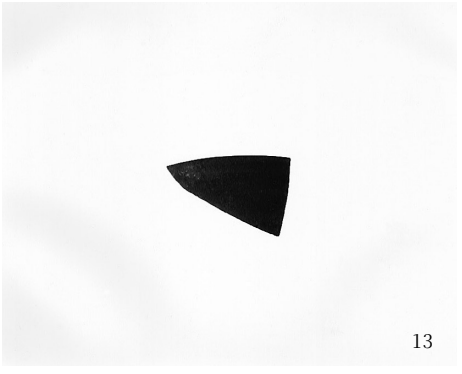
8

9


10

11

12


13

14

図版 12

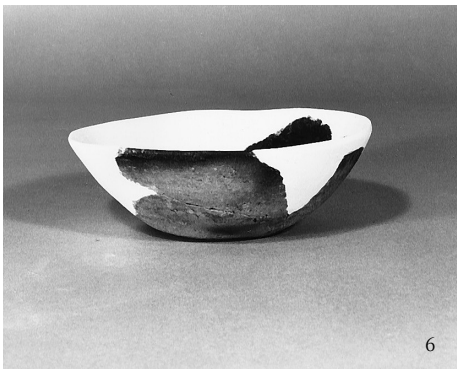
1

2

3

4

5


6

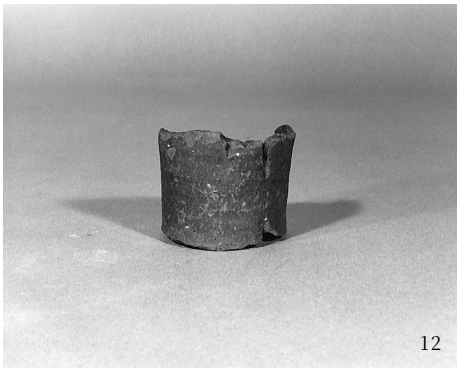
7

8

9

10

11

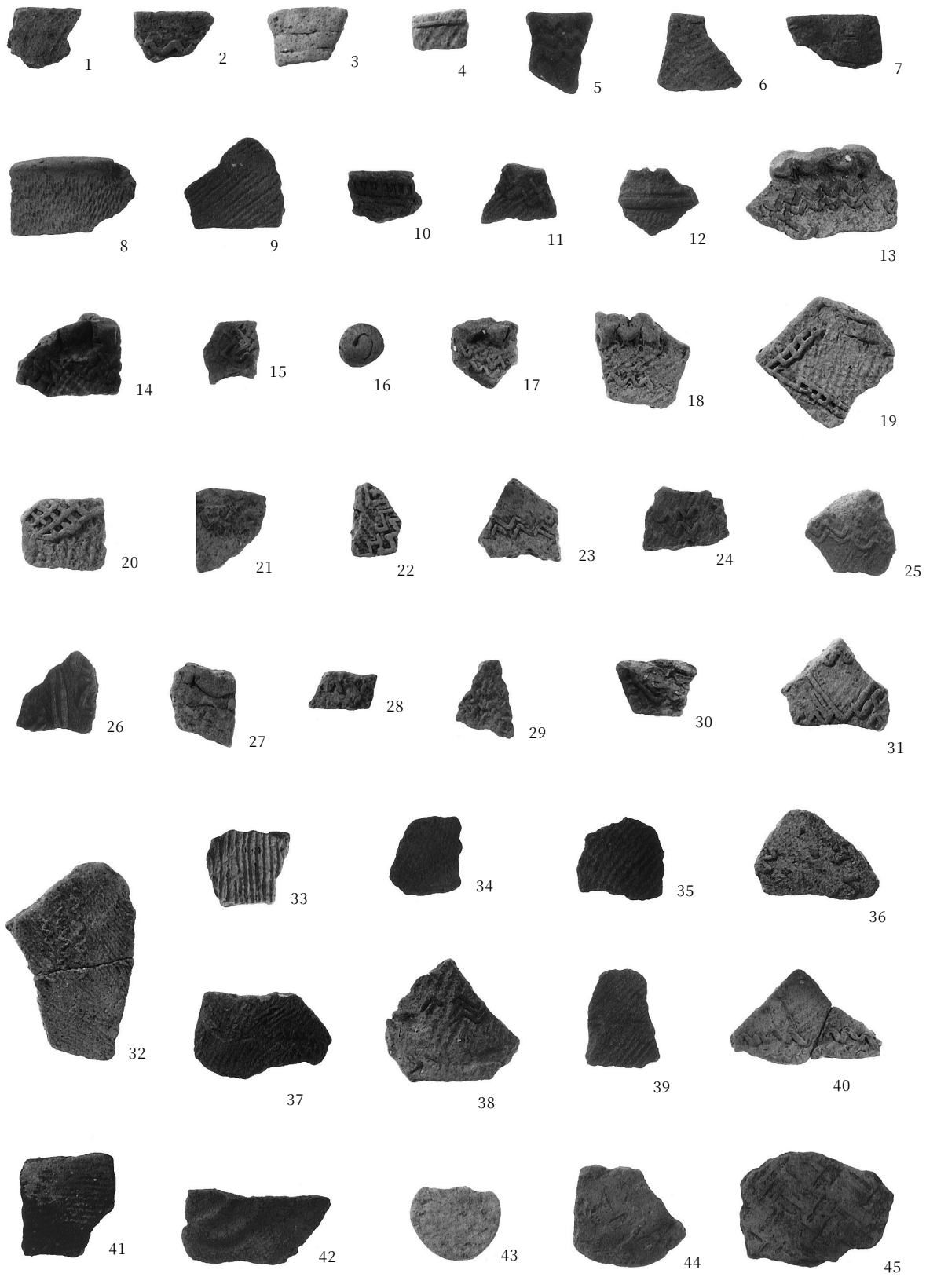

12

13

14

15

図版 13


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45

図版 14

1

2

3

4

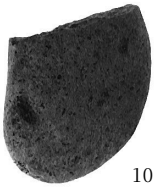
5

6

7

8

9


10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

図版 15

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しもとみまえいせき
書　　名	下富前遺跡
副 書 名	富地区県営担い手育成ほ場整備事業に係る発掘調査報告書Ⅱ
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	瀬峰町文化財調査報告書
シリーズ番号	第20集
編 集 者	安達訓仁
編 集 機 関	瀬峰町教育委員会
所 在 地	〒989-4502　宮城県栗原郡瀬峰町藤沢字下田32-1　TEL 0228－38－2171・2172
発 行 年 月 日	西暦2002年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しもとみまえ いせき 下富前遺跡	みやぎけん 宮城県 くりはらぐん 栗原郡 せみねちょうおおさとあざ 瀬峰町大里字 しもとみまえ 下富前	46	047	141° 4′ 35″	38° 38′ 45″	2001.11.7 ～ 2002.1.22	約1,350㎡	県営ほ場整備に係る事前調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下富前遺跡	包 蔵 地	縄文時代		縄文土器（繊維土器、大木４・５・10式、動物頭部形突起）、石器	
	集 落 跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡	土師器（墨書土器）、須恵器、緑釉陶器、鉄製品	
	屋 敷 跡	中 世	掘立柱建物跡	中世陶器 近世陶磁器	

瀬峰町文化財調査報告書　第20集

下 富 前 遺 跡

平成14年３月20日　印刷
平成14年３月25日　発行

発行　瀬 峰 町 教 育 委 員 会
〒989-4502　宮城県栗原郡瀬峰町藤沢字下田32-1
ＴＥＬ　0228－38－2171・2172

印刷　南 部 屋 印 刷 株 式 会 社
〒987-2215　宮城県栗原郡築館町高田一丁目7-36
ＴＥＬ　0228－22－2131